恒武西宮遺跡 6

Tsunetake-nishimiya Site
The 21st Excavation Report

浜松市教育委員会
2018 年 10 月
Hamamatsu Municipal Board of Education,October,2018

恒武西宮遺跡6

2018年10月

浜松市教育委員会

Ⅴ区全景　南東から

巻頭図版 2

Ⅴ区　SP83　土師器甕出土状況　西から

Ⅴ区　SK18　土師器高坏出土状況　北西から

Ⅴ区　出土遺物

例　言

1　本書は、静岡県浜松市東区恒武町における恒武西宮遺跡 21 次調査にかかる発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、株式会社スズケイの物流センター新築工事に先立ち実施した。発掘調査は浜松市の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市市民部文化財課が補助執行）のもと、株式会社島田組中部営業所が実施した。調査にかかわる費用は全額株式会社スズケイが負担した。

3　調査にかかわる期間は、以下の通りである。

委託期間　（現地調査）　平成 29 年 12 月 11 日～平成 30 年 3 月 16 日

（整理作業）　平成 30 年 5 月 31 日～平成 30 年 10 月 31 日

4　現地調査は、山中美歩（浜松市市民部文化財課地域遺産グループ）・和田達也（浜松市市民部文化財課埋蔵文化財グループ）の指導監督のもと、安孫子雅史（株式会社島田組文化財事業本部調査室）・河本匡人（株式会社島田組文化財事業本部工事部）・瀧口泰孝（株式会社島田組文化財事業本部調査室）が実施し、以下の方々の協力を得た。

森下哲也・藤田恭平・下釜あや（株式会社飯田組）、山﨑進一（株式会社リンク）、鈴木寛貴（浜松カメラ商会）、西岡正行（株式会社アイランドブライダル映像制作部）

5　整理作業は、山中・井口智博（浜松市市民部文化財課埋蔵文化財グループ）の指導監督のもと、安孫子・萩原美香（株式会社島田組文化財事業本部調査室）が行った。

6　本書の執筆は第 1 章 1 調査に至る経緯・4 恒武西宮遺跡の調査歴 ・第 4 章 総括を山中、第 2 章 4 出土遺物を萩原が行い、その他を安孫子が執筆した。

7　本調査に関する資料は、浜松市地域遺産センターで保管している。

8　本書で報告する遺構の略号は下記の通りである。

溝：SD　土坑：SK・SX　掘立柱建物：SH　小穴：SP

9　本書で報告する土器の断面と、種別の関係は以下の通りである。

須恵器 ■　　土師器 □

目 次

図 版 目 次

巻頭図版

図　　版

図 表 目 次

挿　図

挿　表

第1章　序　論

1　調査に至る経緯

遺跡の概要　恒武西宮遺跡は、浜松市東区恒武町から貴平町にかけて立地する、古墳時代から中世の集落遺跡である。周辺には山ノ花遺跡、恒武西浦遺跡、恒武東覚遺跡が分布しており、これらの遺跡を含めて恒武遺跡群と呼ばれる。これまで恒武遺跡群で行われた調査では、古墳時代前期から戦国時代までの遺構や遺物が発見されている。各遺跡の調査結果を見ると、恒武西宮遺跡では、古墳時代の方形周溝墓や掘立柱建物跡、自然流路、戦国時代の区画溝、掘立柱建物跡などが検出されている。また、恒武西宮遺跡の北に位置する山ノ花遺跡では、大型の自然流路（恒武大溝）が検出されており、大溝からは古墳時代中期の木製祭祀具、滑石製模造品など、祭祀関連の遺物が豊富に出土している。

恒武遺跡群の北の笠井町周辺にも、笠井若林遺跡、笠井西浦遺跡などの遺跡が分布している。笠井地区では、これまでの調査で奈良・平安時代を中心とした遺構や遺物が確認されている。笠井地区から恒武地区にかけて遺構の変遷を見ると、古墳時代には恒武地区で遺構や遺物が多く確認されるが、奈良・平安時代からは笠井地区で複数の遺構が検出されるようになり、集落の中心が移り変わっていることが伺える。これらの調査結果から、恒武地区は、古墳時代に地方の有力な首長層との関わりが強い地域であり、古代には集落の中心から外れるが、戦国時代には再び集落が広がり、現在の地割の原型となる区画が形成された地域と捉えられる。

開発計画の浮上　2017年、恒武西宮遺跡の範囲内において、株式会社スズケイの物流センター建設事業が計画された。このため、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）は、2017年3月27日～29日に予備調査（17次調査）を実施した。調査の結果、当該地に古墳時代の遺跡が残存していることを確認した。

本発掘調査の実施　予備調査の結果を受けて、事業者と浜松市教育委員会が事前協議を行い、開発対象地の本発掘調査を行うことを決定した。実務は浜松市から業務を委託した株式会社島田組が実施した。現地調査は2017年11月15日～2018年3月20日に行った。調査面積は1704㎡である。

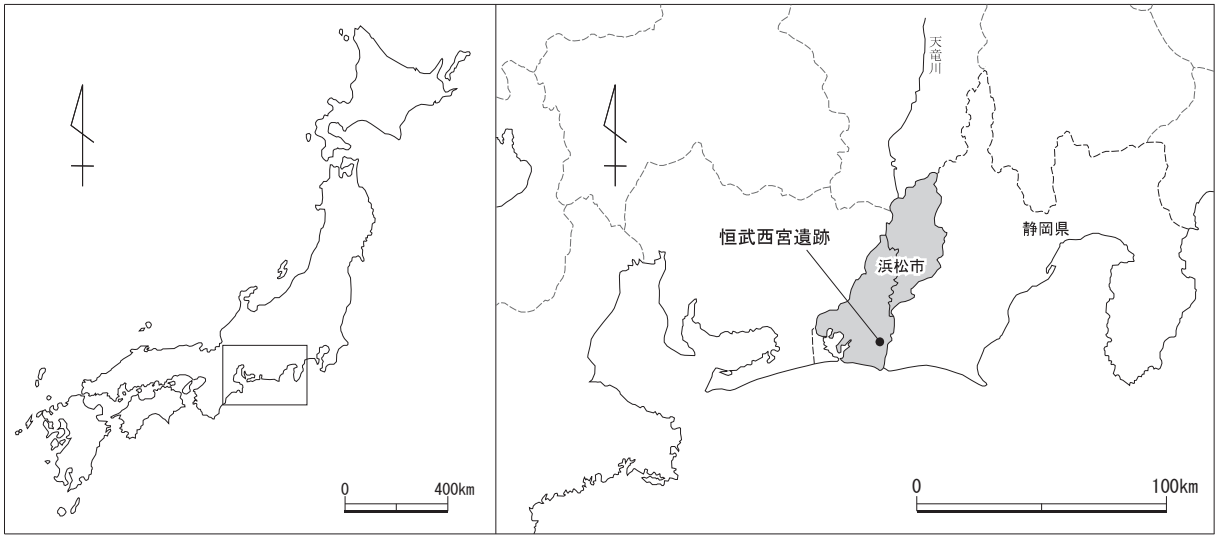


Fig.1　調査対象地の位置

2　調査の方法と経過

調査地区の設定　発掘調査を実施した区画は、水路や社屋等の範囲であり、コの字や長方形の形状をし、五つの調査区からなる。国家座標に即して５ｍグリッドを設定した。東端にあるコの字の水路に対する調査区をⅠ区、その西にある２つの調査区をⅡ区・Ⅲ区、また、現水路の西側にある小さな調査区をⅣ区、最も大きな調査区をⅤ区と呼称する。

表土掘削　全調査区の盛土･旧耕作土および攪乱は重機（バックホー）を使用して除去した。バックホーには平爪を装着して掘削をおこなった。旧耕作土の下には明瞭な遺物包含層が存在せず、直下に遺構面が現れた。但し、Ⅴ区については東側に広範囲の攪乱が存在したため、攪乱埋土を極力除去することに努めた。

Fig.2　調査区の位置（S=1/10000）

遺構精査　遺構の検出は鋤簾を使用した。遺構検出面は概ね黄褐色を呈するシルト質であるため、比較的容易であった。遺構内の調査は埋土の状況を確認するため、小穴は半截し、溝状遺構は横断、土坑状遺構は縦断に土層観察用セクションベルトを設定し、埋没状況の把握に努めながら調査を行い、土層断面図を作成した。また、出土した遺物については、重要と思われるものについては取り上げ番号を付し、取り上げ地点の記録を行った。また、特に重要と思われるものについては出土状況図を作成した。

記録の作成　遺構の平面図および断面図、前述した遺物の出土状況図はトータルステーションを用い、CAD ソフトを用いて図化を行った。20 分の 1 を基本として作図し、必要に応じて 10 分の 1、40 分の 1 などの図面を作成した。

21 次調査の経過　2017 年 12 月 11 日からⅡ区・Ⅲ区・Ⅰ区の順で表土掘削を行った。遺構検出は比較的容易であったが、年内に終了するには時間的ロスを極力少なく調査を行う必要があった。そのため、複数の調査区を同時進行的に調査した。2 面調査を行う必要のあったⅡ区・Ⅲ区を優先して行い、Ⅰ区に関しては余裕ができたときに調査を行うこととした。Ⅱ区では掘立柱建物を、Ⅲ区では掘立柱建物と古墳時代の溝を確認した。2 面目の調査を行ったⅡ区・Ⅲ区のうち、Ⅱ区では小穴と溝を確認したが、Ⅲ区には遺構が存在しなかった。

Ⅱ区とⅢ区の 2 面目の調査のため、再度重機による掘削を行った後、Ⅳ区の表土掘削を行い、古墳時代の溝を確認した。この溝はⅢ区で確認したものの続きである。Ⅰ区でも、古墳時代の溝を確認した。南側で確認したものはⅢ区で確認したものの続きで、北で確認したものは、翌年にⅤ区で確認した SD47 の続きである。北側で確認した溝は複数段階のものが存在し、調査最終日前日 12 月 26 日にその本体を確認し、翌 27 日出土状況写真・出土状況図を作成して完掘した。

そののち完掘写真撮影・実測の補足を行い本年の調査を終了した。尚、12 月 25 日からⅤ区の表土掘削を開始した。翌年 1 月 9 日より調査を再開し、翌日に表土掘削を終了した。遺構検出を行った結果、調査区の中央南寄りに北東から南西方向の溝を確認した。また、その周辺には複数の土坑状遺構が確認できた。

Fig.3　遺構検出状況

Fig.4　SD47 調査状況

Fig.5　現地説明会状況

しかし、西側と東側は非常に不明瞭であったため、少しずつ人力による掘下げを行った結果、多くの部分に攪乱が存在することが判明した。西側については速やかに人力で掘削を行った。また、東側については、重機の届く範囲で再度掘削を行い、攪乱の除去に努めた。その結果、南東隅に小穴を集中して確認した。

中央南よりで確認した溝を調査した結果、土師器・須恵器のほかに石製模造品の勾玉や銅製品の耳環が出土した。この溝の調査の過程でさらに古い時期の溝を確認した。この古い時期の溝からは遺物の出土がなく、砂を基本とした土で埋まっていた。箱型の断面を持つことから人為的な溝であると判断した。これらの成果に基づいて2月25日に現地説明会を開催した。その後、1面目の調査の補足等を行い、3月2日から、開発で損傷を受ける部分について2面目の調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。2面目の記録等を行い、3月7日に現地での調査を終了した。尚、2月21日から遺物洗浄を行い、3月1日に終了した。翌2日から注記を行い、3月14日に終了した。

遺物整理・報告書作成作業　5月31日から株式会社島田組の整理棟にて遺物の分類・接合・実測・トレース・写真撮影を行い、10月まで報告書作成作業を行った。

調査参加者

現地	石岡 幸・伊藤 均・大庭 俊・纐纈 鉱治・小林 俊海・佐藤 政治・杉山 道雄・鈴木 清・須部 公夫・竹内 誠一・辻 健治・野本 徹・藤原 豊廣・松本 兼生・山本 留美子・渡邊 時次
整理	石岡 幸・山本 留美子・岡中 喜美・清岡 廣子・下澤 あい・田中 理恵・濱口 由美子・前田 紀子

3　地理的環境・歴史的環境

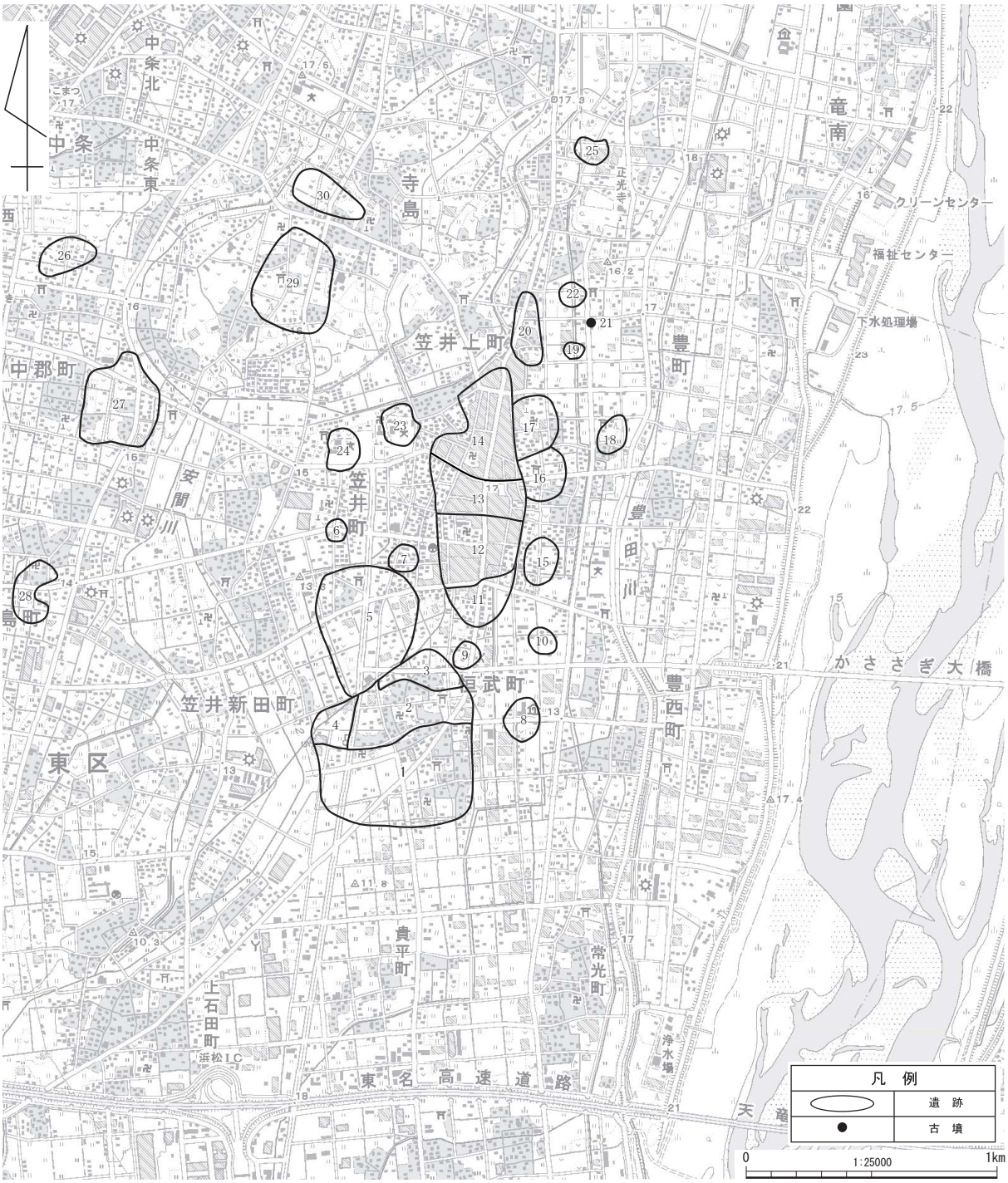
(1) 地理的環境

浜松市の東境を流れる天竜川は長野県の諏訪湖を水源とし、遠州灘へ流れる全長約216㎞の長大な河川である。この流域の大部分は山岳地帯である。天竜区以南から河口までの約23㎞の下流域で沖積平野（天竜川西岸に広がる沖積平野）を形成している。この沖積平野は東の磐田原台地、西の三方原台地に挟まれ、この中を天竜川は南流する。現在では、近世以降の河川改修により流路が直線的に固定されているが、かつては「暴れ天竜」と呼ばれ、氾濫増水を繰り返し、流路の変更が絶え間なく行われた。その結果、複雑な微地形が展開している。

この沖積平野の中央に位置する東区恒武町に本遺跡は立地する。恒武町は北に接する笠井町とともに比較的安定した扇状地上にある。この基盤層は、過去の調査においても今回の調査においても確認しているが、旧天竜川の堆積物である礫層である。この基盤層の上に広がる扇状地の末端に本遺跡は立地し、この南側には比較的平坦な土地が広がっている。しかし、かつては天竜川の氾濫等により、流路の変更が頻繁に行われた結果、網の目のような流路が入り組んだ地形を形成していたと考えられる。これらの流路の間に安定した微高地が散在し、こうした場所に本遺跡などが存在する。

(1) 歴史的環境

縄文時代以前　恒武・笠井地区における縄文時代以前の遺跡は、現状では確認することが極めて困難である。旧石器時代に関しては後世の土砂堆積が著しく、当時の生活状況をうかがい知ることは困難である。また、縄文時代についてもいわゆる「縄文海進」ののちに海退するにつれ、沖積平



1	**恒武西宮遺跡**	11	笠井東遺跡	21	蛭子森古墳
2	恒武西浦遺跡	12	笠井下組遺跡	22	八幡西遺跡
3	恒武東覚遺跡	13	笠井中組遺跡	23	御殿山東遺跡
4	山ノ花遺跡	14	笠井上組遺跡	24	御殿山遺跡
5	笠井若林遺跡	15	八ッ面遺跡	25	上石原遺跡
6	笠井町広野遺跡	16	宮前遺跡	26	橋爪遺跡
7	笠井西浦遺跡	17	大通西遺跡	27	万斛遺跡
8	茶ノ木田遺跡	18	服織神社境内遺跡	28	上大瀬遺跡
9	社口遺跡	19	八幡南遺跡	29	宮東遺跡
10	平松遺跡	20	隋国遺跡	30	寺島天神遺跡

Fig.6　恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布図

野が形成されたと考えられる。この時期はまだ沖積平野の形成途上であり、安定した平野ではなく、河道や湿地が交錯する景観であったと推定できる。そうしたことから、生活の基盤は三方原台地の上と考えられる。しかし、天竜川西岸に広がる沖積平野での発掘調査において縄文土器が出土する例があり、今後の類例増加によっては景観復元に変更が加えられる可能性もある。

弥生時代　弥生時代になると天竜川西岸に広がる沖積平野が安定化し、遺跡数が激増する。宮竹野際遺跡では縄文時代晩期から弥生時代前期併行の土器が出土し、本格的な水田造営開始前の平野利用の痕跡を見出すことができる。弥生時代中期になると宮竹野際遺跡をはじめ田見合遺跡、将監名遺跡、海東遺跡などから弥生土器が出土し、将監名遺跡では大規模な集落跡を確認している。恒武・笠井地区においては、これまで弥生時代の遺構・遺物の検出例が乏しかったが、近年社口遺跡において中期後葉の長頸壺が完形の状態で出土した。従来低調と思われていた当地区における弥生時代の集落様相に関して今後の再検討が求められる。弥生時代後期になると平野部の遺跡数が増加し、平野部への集落進出が本格化する。発掘調査された遺跡だけでも天王中野遺跡、中田北遺跡、将監名遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、大蒲村東遺跡、森西遺跡、松東遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、海東遺跡などがあげられる。これらは恒武・笠井地区より南側の天竜川西岸に広がる沖積平野上に立地し、この時期には多くの集落が形成されている。

古墳時代　古墳時代になると沖積平野における弥生時代後期の濃密な遺跡分布から一変し、集落の様相が不明瞭になる。大規模な集落が解体し、小規模な集落へと景観が変化すると考えられる。この変化と呼応するように、恒武・笠井地区での人為活動の痕跡が明瞭になってくる。恒武西宮遺跡では、古墳時代前期（元屋敷Ⅱ式）の方形周溝墓や葬送儀礼に伴う土器集積を確認し、大量の古式土師器が出土した。

古墳時代中期になると、沖積平野を見下ろす丘陵や台地上に古墳が築かれる。後期にかけて三方原台地東縁一帯には総数500基を超える古墳が築造され、三方原古墳群と総称される。山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡で確認した大溝が中期の遺構として特筆される。これらの遺構からは多くの木製祭祀遺物や石製祭祀遺物・大量の土器が出土した。これらの調査結果から、山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡では有力な首長層が存在し、祭祀を取り仕切ったと考えられ祭祀の様子の一端が知られることとなった。

古墳時代後期になると、恒武・笠井地区周辺では、豊町に立地する蛭子森古墳が特筆される。これは直径23.6ｍの円墳で右片袖式石室を有する。鳥装飾付須恵器などの土器ほか大刀や鉄鏃・馬具などの遺物が出土した。多くの古墳が丘陵などに築造されたが、天竜平野に築造された数少ない古墳として注目でき、群集墳を築造した者とは隔絶した存在であったと考えられる。恒武西宮遺跡ではこの時期の集落も確認し、本遺跡を中心とした古墳時代後期の人為活動が活発であったことが判明している。

古代　本市を含む静岡県の西部は律令体制においては遠江国に属する。恒武・笠井地区およびその周辺は麁玉・長田・磐田郡のいずれかに属していたと推定される。長田郡は和銅2(709)年に長上・長下の二郡に分割され、磐田郡は後世に豊田郡が分離する。これらの郡のうちのいずれに古代の笠井地区が属していたかは明確にはわからない。近世の郡境と古代のそれを同一視することにはいささかの問題もあるが、概ね古代から続く郡境が踏襲されている判断すると、恒武・笠井地区を分断するように近世の郡境が存在する。笠井町は長上郡に、恒武・貴平・豊西町は豊田郡に属していることがわかる。近世の郡境が天竜川の流路跡であった可能性が高いことや郡境が錯綜していることから、古代においても天竜川の流路跡を郡境とし、それが錯綜していたと考えられる。この時期の

遺跡として笠井若林遺跡があり、竪穴建物跡・掘立柱建物跡を集中的に確認し、集落が営まれていたことが判明している。これらは奈良時代から平安時代に属している。また、恒武西宮遺跡でのこの時期の遺構や遺物は希薄であり、笠井若林遺跡を中心に人々が住んでいたと考えられる。

中世　中世において笠井地区周辺は、羽鳥荘と美薗御厨の領域に含まれると考えられるが、これらの荘園についての情報は極めて少なく実態について明らかにできていない。この時期の遺構については比較的多く見つかっている。御殿山遺跡や笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡などから山茶碗などが出土している。また、恒武西宮遺跡では鎌倉時代の菊花双鳥鏡が採集されている。中世後半になると笠井地区の全域で遺構や遺物が確認されている。特に、恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡では方形に区画した屋敷地跡が見つかっている。これらの区画は現在の地境とほぼ一致することから、このころに形成された地割が現在まで継承されていることがわかる。

4　恒武西宮遺跡の調査歴

恒武西宮遺跡では、本報告書を作成した 2018 年までに 23 回の発掘調査が行われている。古墳時代～中世の遺跡が確認されているが、主に古墳時代と戦国時代に遺跡の時期が集中している。過去の調査の中で特筆すべきものを以下に挙げる。

1 ～ 2 次調査は、1996 年～ 1999 年に、県道浜松環状線の建設工事に伴い行われた。古墳時代中期～後期を中心とした時期の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝（自然流路跡）などが確認され、調査箇所一帯が古墳時代の集落域であることがわかった。また、土坑内から滑石製模造品がまとまって出土しており、一般的な集落とは異なる性質の遺跡である可能性が指摘された。戦国時代においては、掘立柱建物跡や区画溝が検出されており、屋敷地の広がる景観であったとみられている。

Tab. 1　恒武西宮遺跡調査履歴一覧

次数	期間	調査主体	主な時代	文献	発行年
1 次	1996. 9 ～ 1997. 3	（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮・西浦遺跡』	2000
2 次	1998. 10 ～ 1999. 6	（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』	2002
3 次	1998. 9 ～ 1999. 1	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
4 次	1999. 5	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
5 次	1999. 12	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
6 次	2000. 10 ～ 12	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
7 次	2000. 11 ～ 12	浜松市教育委員会	戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
8 次	2007. 11 ～ 12	（財）浜松市文化振興財団	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡 8 次』	2009
9 次	2007. 12	浜松市教育委員会	古墳～中世	『浜松市試掘調査概要』	2009
10 次	2008. 4	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成 21 年度浜松市試掘調査概要』	2011
11 次	2010. 9	浜松市教育委員会	古墳～鎌倉	『平成 22 年度浜松市試掘調査概要』	2012
12 次	2014. 9	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成 26 年度浜松市文化財調査報告』	2016
13 次	2015. 6	浜松市教育委員会	古墳～中世	『平成 27 年度浜松市文化財調査報告』	2017
14 次	2016. 3	浜松市教育委員会	古墳	『平成 27 年度浜松市文化財調査報告』	2017
15 次	2016. 10	浜松市教育委員会	なし	『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』	2018
16 次	2016. 10	浜松市教育委員会	古墳	『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』	2018
17 次	2017. 3	浜松市教育委員会	古墳	『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』	2018
18 次	2017. 4	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
19 次	2017. 8	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
20 次	2017. 8	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
21 次	**2017. 11 ～ 2018. 2**	**浜松市教育委員会**	**古墳**	**本書**	**2018**
22 次	2018. 5	浜松市教育委員会	中近世	整理作業中	－
23 次	2018. 6	浜松市教育委員会	古墳～中世	整理作業中	－

3 次調査と 6 次調査は、県道浜松環状線に接続する市道拡幅工事に先立ち、実施された。調査箇所の東側において、古墳時代前期の方形周溝墓と土器集積が検出されており、元屋敷式期の良好な資料として注目される。前期の遺構はこの 2 基が確認できたが、建物跡など集落に関するものは検出されなかった。古墳時代中期～後期においては、周辺の調査結果と同様に建物跡や溝などが検出された。検出された溝の中には、恒武大溝につながるとみられる自然流路があり、流路内からは完形に近い状態の須恵器や土師器が豊富に出土した。また、広範囲で戦国時代の屋敷地の区画溝が検出されており、戦国時代の区割りが現在まで踏襲されていることがわかった。

8 次調査は、市道改良工事に伴い、3 次調査箇所の隣地で実施された。古墳時代前期の遺物が出土しており、3 次調査区で検出された方形周溝墓などの遺構と関連するものとみられる。また、中世の遺構や遺物が確認されており、検出された遺構の中には戦国時代の区画溝がある。この遺構は 3 次調査で検出された区画溝とつながっており、屋敷地が方形の区画で区切られていたことがわかった。

18 次調査は、2017 年に工場建設に伴い実施された。調査箇所の西側で集落の中心にあたる高位面、東側で湿地状の堆積がみられる低位面を確認した。古墳時代前期と後期の遺構・遺物が確認されており、特に高位面で古墳時代前期の竪穴建物跡が検出されたことは、恒武地区の古墳時代前期の集落に関する重要な調査成果であるといえる。竪穴建物跡の北東から S 字甕（C 類）が出土していることから、集落は 3 世紀後半に形成されたものとみられている。

23 次調査は、2018 年に遺跡の東側で実施された予備調査である。敷地東側の調査坑で、古墳時代前期の遺物が集中的に出土した。出土遺物は古式土師器で、S 字甕、高坏、長頸壺など複数の器種が確認できた。その他の調査坑でも、数は少ないが古式土師器が出土しており、敷地内全域に前期の遺物包含層があるとみられる。

以上の発掘調査の他にも、小規模開発に伴う予備調査が遺跡内の各地で行われている。初期の恒武西宮遺跡の発掘調査では、古墳時代中期～後期や戦国時代の調査成果が目立っていたが、近年の発掘調査で古墳時代前期の様相も明らかになってきている。これまでの調査結果をふまえた恒武西宮遺跡の傾向として、古墳時代前期の遺構・遺物は遺跡の東側、古墳時代中期～後期の遺構・遺物は遺跡の西側に多く確認できている。遺跡の北側では、奈良時代の遺構が数基確認されているが、全体的に古代の遺構・遺物は少ない。また、戦国時代においては、遺跡の全域で区画溝を中心とした遺構や遺物が検出されている。調査事例の増加によって、恒武西宮遺跡では、各時代の遺跡の中心地が異なった場所にあることが明らかになりつつある。

第２章　調査成果

1　予備調査の結果

2017 年 3 月 27 日～ 29 日に、開発予定地の予備調査（17 次調査）を行った。開発予定地に調査坑を 33 箇所、調査溝 3 箇所を設定した。各調査坑における土層堆積状況は次のとおりである。Ⅰ層：褐色～灰褐色シルト（表土）、Ⅱ層：褐色系シルト層、Ⅲ層：淡灰色系粘土層、Ⅳ層：黒灰色粘土層、Ⅴ層：砂または砂礫（基盤層）。遺物包含層は、Ⅱａ層の暗褐色シルト、Ⅱｄ層の黄褐色シルトである。

遺構は、調査坑 6、18、21、25、26 で小穴を検出した。遺構埋土は調査坑 6 においては黄褐色シルト、その他では暗褐色シルトである。また、敷地北西に自然流路（SD01）を確認した。流路は 2000 年の本発掘調査（6 次調査）で検出されたものと同一と考えられる。今回検出した流路の幅は約 4 ｍ、深さは最も深い場所で約 1.1 ｍである。

遺物は、調査区の全体から 5 世紀代の土師器が出土している。流路内の調査坑 4、調査溝 1、2、3 からは、7 世紀中葉の須恵器と土師器が多数出土しており、須恵器には坏身、坏蓋が多く含まれている。以上の調査結果から、開発予定地の全域で古墳時代の遺跡が残存していると捉えられる。（詳細は浜松市教育委員会 2018『平成 28 年度 浜松市文化財調査報告』に掲載）

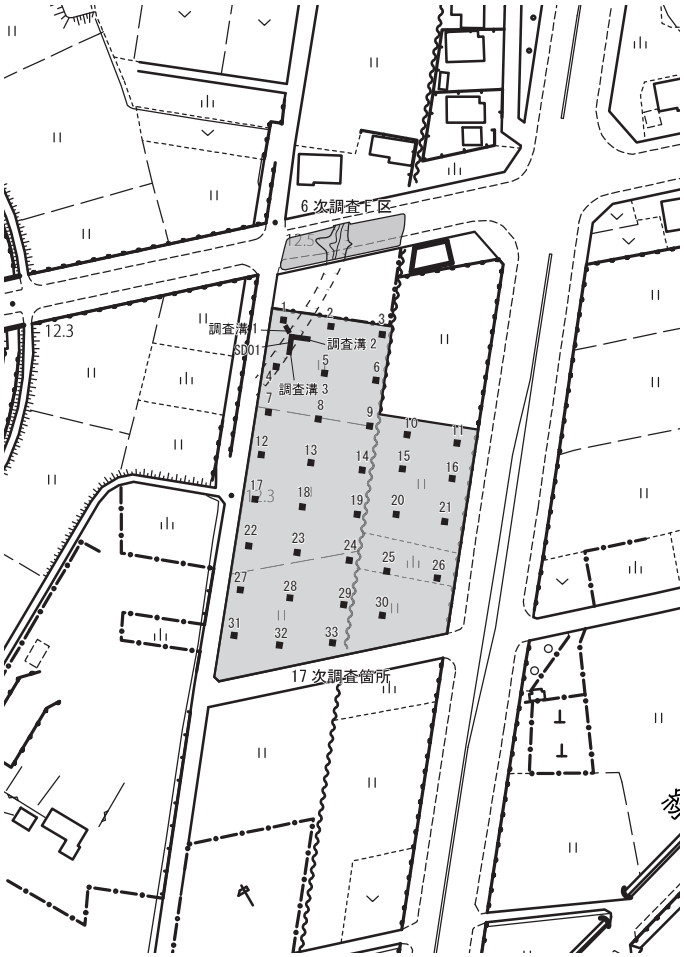


Fig.7　17 次調査位置図　(S=1/2,500)

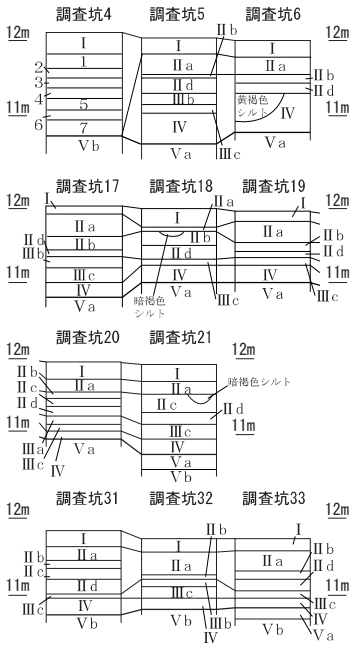


Fig.8　土層柱状図　(S=1/100)

2　基本層序

本遺跡における基本層序は予備調査でも確認しているが、概ね５層に判別でき、今回確認した最下層でも礫層が存在した。これは旧天竜川系の堆積と考えられ、その氾濫原に本遺跡は立地している。以下にⅡ・Ⅲ・Ⅴ区の基本層序を示し、所見を記す。

Ⅰ層　10YR6/1 褐灰色砂質シルト　この層は表土層であり、概ね畑地に関わる耕作土である。
　　（6 次調査　Ⅰ層に対応　以下、() 内は 6 次調査の成果に基づく。）

Ⅱ層　この層は２～４層に細分できる。

1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト　一部に酸化鉄の沈着がみられる（Ⅱａ層）
2　10YR5/1 褐灰色シルト（Ⅱａ層）
3　2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（Ⅱａ層）
4　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト（Ⅱａ層）
5　2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト　この層の上面から１面目の遺構が掘られている。（Ⅱｂ層）
6a　2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　この層の上面から２面目の遺構が掘られている。（Ⅱｂ層）
6b　2.5Y6/2 灰黄色シルト（Ⅱｂ層）
6c　2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（Ⅱｂ層）
6d　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（Ⅱｂ層）

Ⅲ層　この層は２層に細分できる。

1　10YR5/1 褐灰色シルト（Ⅲ層）
2　10YR5/1 褐灰色砂質シルト（Ⅲ層）

Ⅳ層　この層は２層に細分できる。

1　10YR4/1 褐灰色粘質シルト（Ⅳ層）
2　10YR3/1 黒褐色粘質シルト（Ⅳ層）

Ⅴ層　旧天竜川の堆積物

1　5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト（Ⅴ層）
2　礫層（Ⅵ層）

遺構はⅡ-5 層の上面から掘り込まれていることが分かった。

また、一部の調査区では２面目の調査を行ったが、それは、Ⅱ-6a 層から掘り込まれている。但し、３か所の２面目対象調査区で遺構を確認したのはⅡ区だけであった。

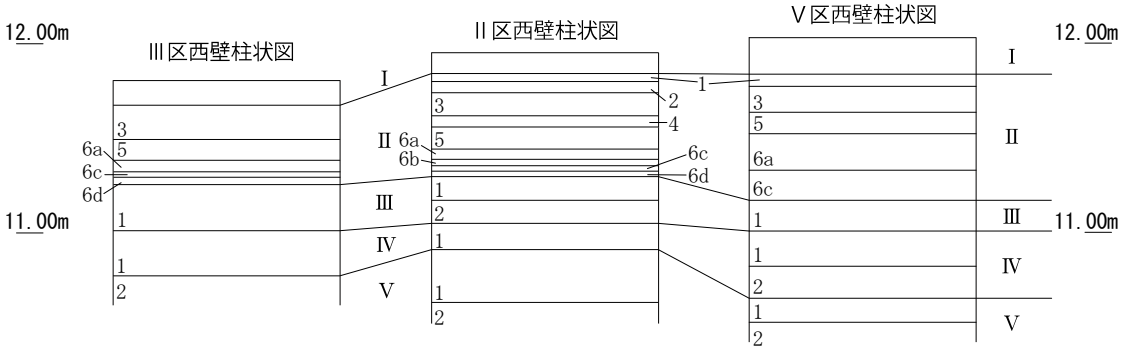


Fig.9　基本層序柱状図 (S=1/40)

3. 検出遺構

(1) 概要

本調査地では下図のように遺構を確認した。基本層位のⅡ-5層（2.5Y6/2灰黄色砂質シルト層）の上面、標高11.4～11.6mのところで遺構を確認した。6～7世紀の溝や掘立柱建物のほか、6世紀の土坑を確認した。この面が1面目の調査面である。また、1面目から10～15cm掘り下げたⅢ-2a層（2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層）の上面、標高11.4～5mのところで小穴1基、溝3条を確認した。この遺構からは極少量の遺物が出土しているが、1面目の遺物と明瞭な違いはなかった。次に、各調査区ごとに確認した遺構のうち主なものについて確認状況等を記す。

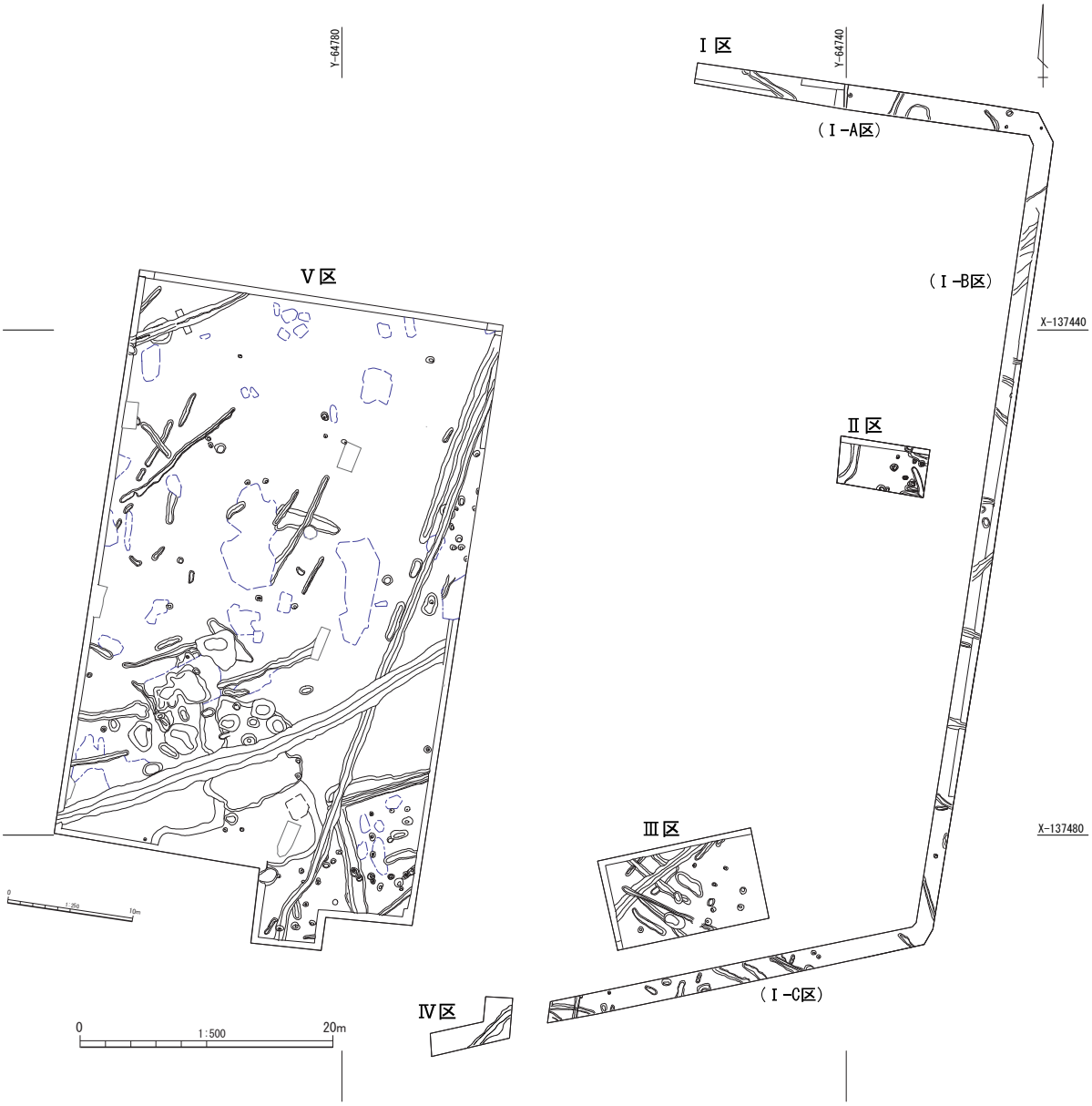


Fig.10　遺構配置図（S=1/500）

(2) Ⅰ区検出遺構

Ⅰ区は開発範囲の東側にあり、水路設置に伴う調査区である。Ⅱ-5層の上面で6～7世紀にかけての溝や小穴・土坑を確認した。以下に主要な遺構について述べる。

①溝

SD36・91・41・42・43 (Fig.12) 調査区の北東部(Ⅰ-B区)で確認したもので、北東から南西へ流れる溝群である。SD36・91、SD41・42、SD43の3時期に大別することができる。SD36は幅200㎝、深さ25㎝、SD91は幅110㎝、深さ25㎝の断面が船底型の溝である。それぞれはSD41・42・43の北にSD36、南にSD91があり、最も新しい時期に属する。SD36はN-50° 4′ -E、SD91はN-49° 59′ -E振れる。SD41は幅100㎝、深さ40㎝、SD42は幅96㎝、深さ35㎝の断面が船底型の溝で、SD41のほうが、SD42より新しいことがわかる。SD41はN-50° 82′ -E、SD42はN-46° 13′ -E振れる。SD41・42の下にSD43が存在し、ここから須恵器・土師器(Fig.39-3～5)が出土した。このことから、SD43が6～7世紀の溝であると判断した。SD43は幅135㎝、深さ43㎝の断面が船底型の溝で、N-50° 1′ -E振れる。断面観察から一度掘りなおしていると考えられる。SD41・42から出土する土師器は古墳時代のものであるが、破片であることから、SD43よりもやや下る時期のものであると判断した。

SD30 (Fig.13) 調査区の東部(Ⅰ-B区の中央)で確認したもので、北東から南西へ流れる溝である。幅76㎝、深さ33㎝の断面がU字形の溝で、N-50° 51′ -E振れる。シルト質の土で埋まる。この埋土から須恵器(Fig.39-7)・土師器(Fig.39-6)が出土する。出土した遺物から古墳時代のものと判断できる。

②小穴

SP21 (Fig.14) 調査区の南部(Ⅰ-C区の西端)で確認したもので、幅24㎝、長さ24㎝、深さ13㎝の断面が船底型の浅い小穴である。褐灰色シルトで埋まる。遺物の出土はなかった。

SP26 (Fig.14) 調査区の南部(Ⅰ-C区の東側)で確認したもので、幅31㎝、長さ31㎝、深さ16㎝の断面が船底型の小穴である。埋土は2層に分かれるが、暗灰黄色シルトを主体に埋まる。遺物の出土はなかった。

SP27 (Fig.14) 調査区の南部(Ⅰ-C区の東側)で確認したもので、幅31㎝、長さ31㎝、深さ16㎝の断面がV字型の小穴である。埋土は2層に分かれるが、SP26と同様のものが主体である。遺物の出土はなかった。

SP28 (Fig.14) 調査区の東部(Ⅰ-B区の中央やや北側)で確認したもので、幅18㎝以上、長さ31㎝、深さ16㎝の断面が箱型の小穴である。東半は設定したトレンチによって破壊されるが、東壁の断面にこの遺構に当たる層が存在しないため、トレンチ内で遺構が収束すると判断した。SP26・27と同様の埋土を主体とする。遺物の出土はなかった。

SP29 (Fig.14) 調査区の北部(Ⅰ-A区の中央)で確認したもので、幅32㎝、長さ33㎝、深さ15㎝の断面がU字型の小穴である。土師器片が出土する。

SP30 (Fig.14) 調査区の北東部(Ⅰ-A区の東側)で確認したもので、幅22㎝、長さ22㎝、深さ9㎝の断面がU字型の浅い小穴である。土師器片が出土する。

SP31 (Fig.14) 調査区の北東部(Ⅰ-A区とⅠ-B区が交わるところ)で確認したもので、幅16㎝、長さ22㎝、深さ12㎝の断面がU字型の小穴である。断面の観察から柱痕もしくは柱抜取り跡と判断できる部分が存在するが、平面では確認できていないため、柱穴であった可能性の指摘にとどめる。

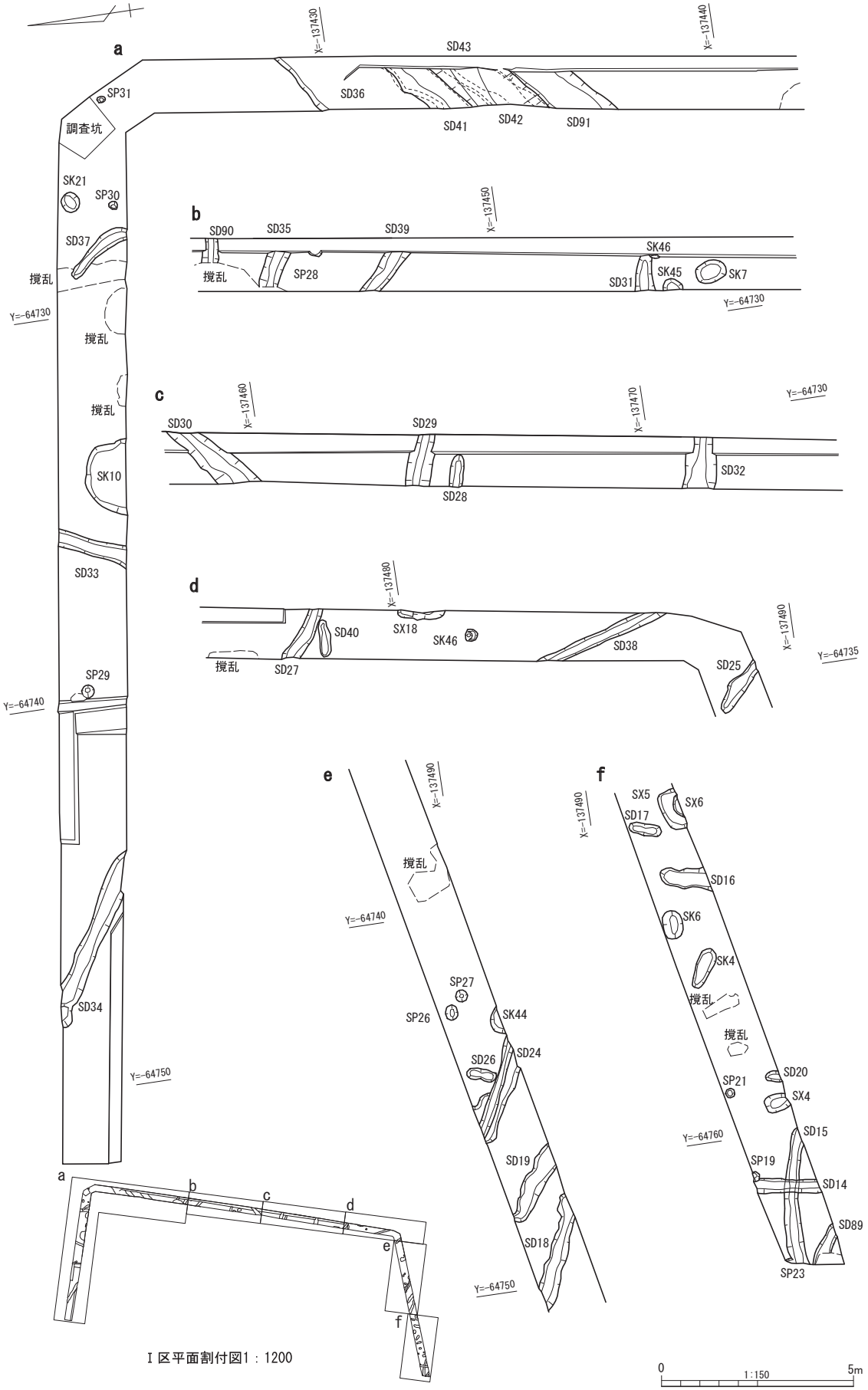
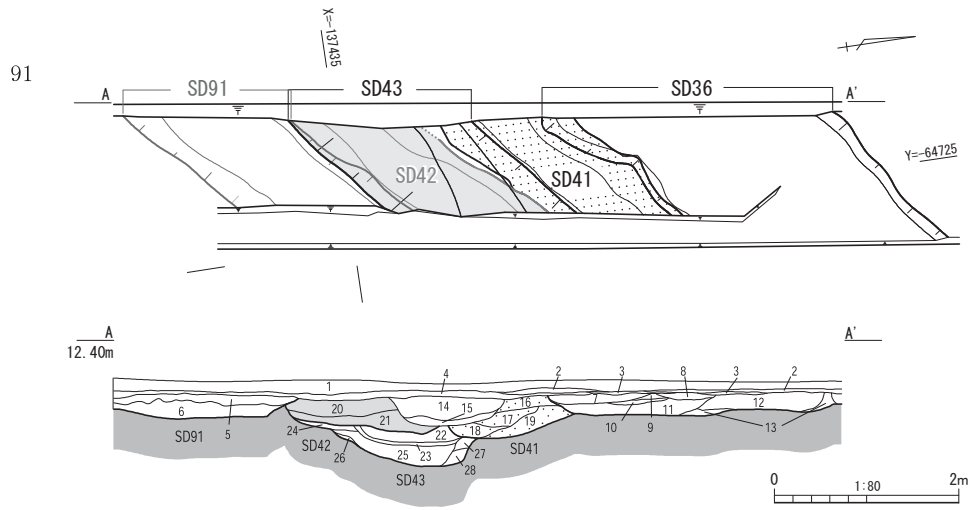
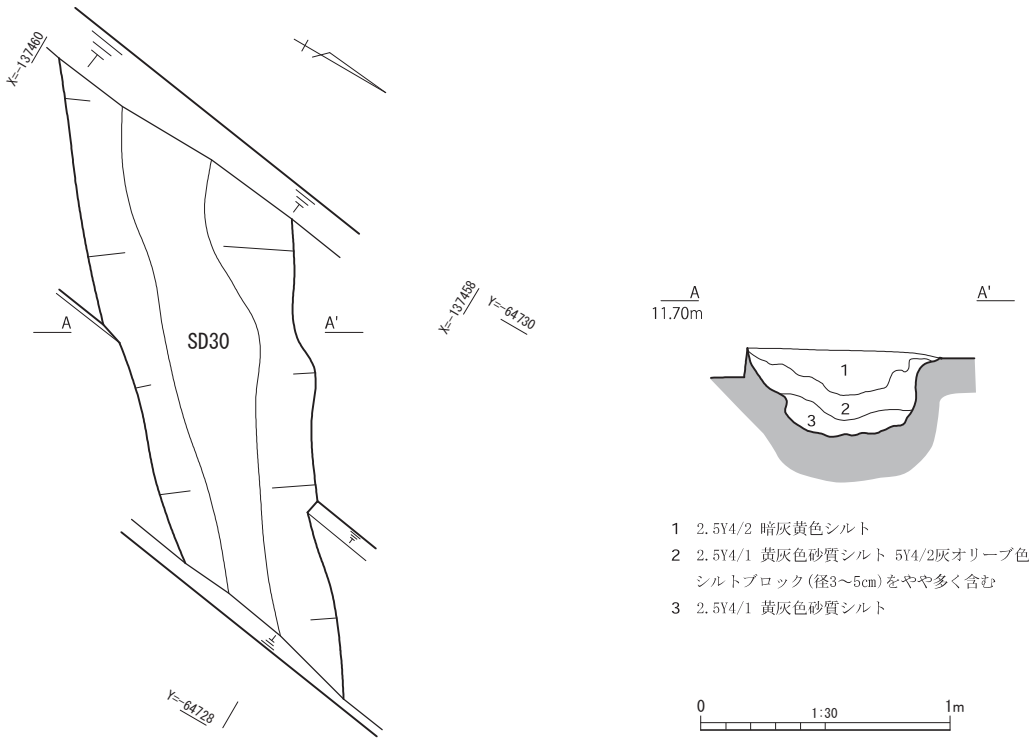


Fig. 11　Ⅰ区遺構配置図（S=1/150）



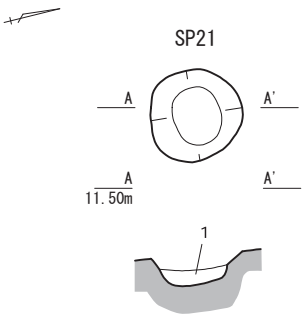
1 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 現耕作土
2 2.5Y6/2 灰黄色シルト 酸化鉄の沈着若干あり
3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
2.5Y5/1黄灰色シルトブロック(径3cm)を少量含む
4 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
5 10YR6/1 褐灰色シルト SD91
6 2.5Y6/1 黄灰色シルト SD91
7 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト SD36
8 2.5Y6/2 灰黄色シルト SD36
9 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト やや青みを帯びる SD36
10 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト 土師器片を含む SD36
11 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト 炭化物・土師器片を少量含む SD36
12 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト 炭化物・土師器片を少量含む SD36
13 10YR4/1 褐灰色シルト SD36
14 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 2.5Y5/3黄褐色細粒砂とラミナを形成
15 10YR4/1 褐灰色シルト
16 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト 2.5Y6/1黄灰色シルトとラミナを形成 SD41
17 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト SD41
18 2.5Y5/1 黄灰色シルト SD41
19 10YR4/1 褐灰色砂質シルト SD41
20 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト SD42
21 2.5Y4/1 黄灰色シルト SD42
22 2.5Y6/1 黄灰色シルト SD43
23 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土 SD43
24 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト SD43
25 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト 炭化物を含む SD43
26 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト SD43
27 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 炭化物を少量含む SD43
28 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト SD43

Fig.12 SD36・91・42・41・43 平面・断面図 (S=1/80)

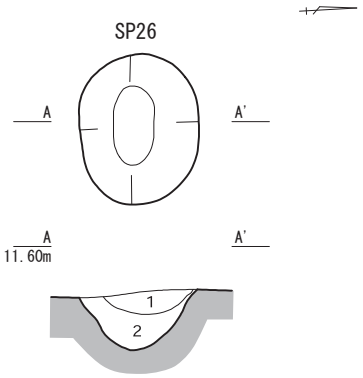


1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト 5Y4/2灰オリーブ色シルトブロック(径3～5cm)をやや多く含む
3 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト

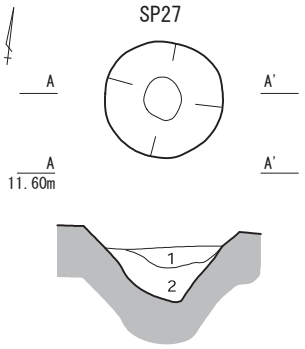
Fig.13 SD30 平面・断面図 (S=1/30)



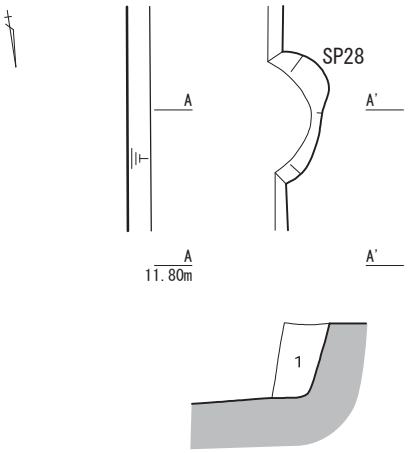
1　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y5/1黄灰色シルトブロック(径3cm)をやや多めに含む



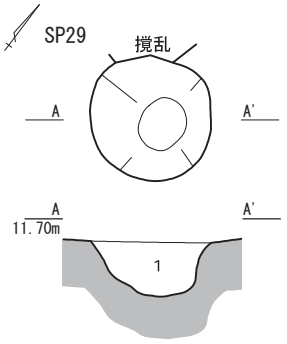
1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック(径3～5cm)をやや多く含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルト小ブロック(1～2cm)を極少量含む



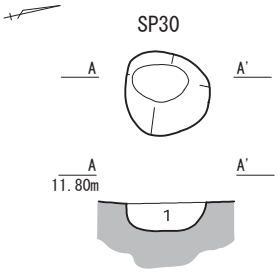
1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック(径3～5cm)を少量含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルト小ブロック(径2cm)を少量含む



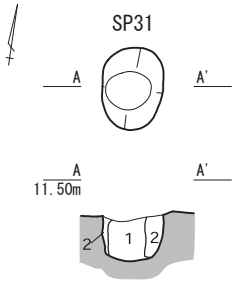
1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR3/2黒褐色砂質シルト小ブロック(1～3cm)を少量含む



1　2.5Y5/1 黄灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック(径1～5cm)を多く含む



1　2.5Y3/1 黒褐色シルト



1　5Y3/2 オリーブ黒色シルト
　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを少量含む
2　5Y4/2 灰オリーブ色シルト

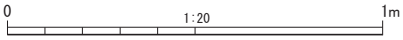


Fig.14　小穴平面・断面図 (S=1/20)

これらの小穴の用途についてはSP31が柱穴である可能性があるが、その他の遺構については、SP26とSP27の形状と埋土が似ていることから同種遺構であると考えられる以外は、性格が不明である。ただし、大きさおよび深さが同じものが多いことから、似たような性格のものであると考えられる。

③土坑

SK04　(Fig.15)　調査区の南部（Ⅰ-C区の西より）で確認したもので、幅40㎝、長さ108㎝、深さ6㎝の断面が船底型の浅い土坑である。鉄分の沈着がみられる暗灰黄色シルトで埋まる。遺物の出土はなかった。

SK06　(Fig.15)　調査区の南部（Ⅰ-C区の西より）南東で確認したもので、幅50㎝、長さ74㎝、深さ4㎝の断面が船底型の浅い土坑である。SK4と同様に暗灰黄色シルトで埋まる。鉄分の沈着はなかった。遺物の出土はなかった。

SK10　(Fig.15)　幅198㎝、長さ108㎝以上、深さ24㎝の断面が船底型の浅い土坑である。遺物の出土はなかった。

SK21　(Fig.15)　調査区の北部（Ⅰ-A区）SP30の北側で確認したもので、幅48㎝、長さ50㎝、深さ9㎝の断面が船底型の浅い土坑である。SK6と同様の暗灰黄色シルトで遺物の出土はなかった。

SK45　(Fig.15)　調査区の東部（Ⅰ-B区の中央）で確認したもので、幅52㎝、長さ38㎝以上、深さ11㎝の断面が船底型の浅い土坑である。埋土は2層に分かれるがSK6と同様の暗灰黄色シルトを主体とする。遺物の出土はなかった。

(3) Ⅱ区検出遺構

Ⅱ区は開発範囲の東側にあり、防火水槽設置に伴う調査区である。Ⅱ-5層の上面（1面目）で溝2条や小穴7基を確認した。その10㎝下のⅢ-6a層の上面（2面目）では小穴1基、溝3条を確認した。

1面目で確認した小穴はその配置から総柱建物（SH1）および柱穴列（SA1）と判断した。

A　1面目確認遺構

①建物

SH01　(Fig.17・18)　調査区の東側のⅡ-5層上面で確認した。遺構配置からSP1・SP2・SP11・SP5・SP13の柱穴からなる掘立柱建物で、総柱建物である可能性が高いと判断できる。各々の柱穴は幅42～72㎝のおおむね隅丸方形を呈し、柱抜取り跡が存在する。SP2が北東へ、SP11が北西へ抜き取っているが、その他は南東へ抜き取っていると判断できる。これらの柱穴のうちSP1・SP5・SP11の柱抜取り跡からは土師器甕片（Fig.40-14～16）が出土し、SP1からややまとまって出土したが接合にはいたらなかった。これらの出土した遺物から古墳時代後期のものと判断できる。主軸はN-33°8′-E振れる。また、柱抜取り跡の観察から径20～30㎝の柱が据えられていたと判断できる。なお、SP1・2・11の列とSP5とSP13の列の向きが違うことから、建物でない可能性もあるが、確認できた遺構から一連の建物の可能性が高いと判断した。

②柱穴列

SA01　(Fig.17)　SP3とSP4からなり、主軸はN-28°40′-E振れる。この2つの柱穴はSH1のSP5・SP13の西側に沿うように存在することからSH1との関連を考えることも可能ではあるが、確認できている遺構が少ないことなどから独立した柱穴列として扱った。また、SP3は幅28㎝、長さ45㎝の楕円形、SP4は幅29㎝、長さ33㎝の隅丸台形の小穴で、SP3には柱痕もしくは柱抜取り

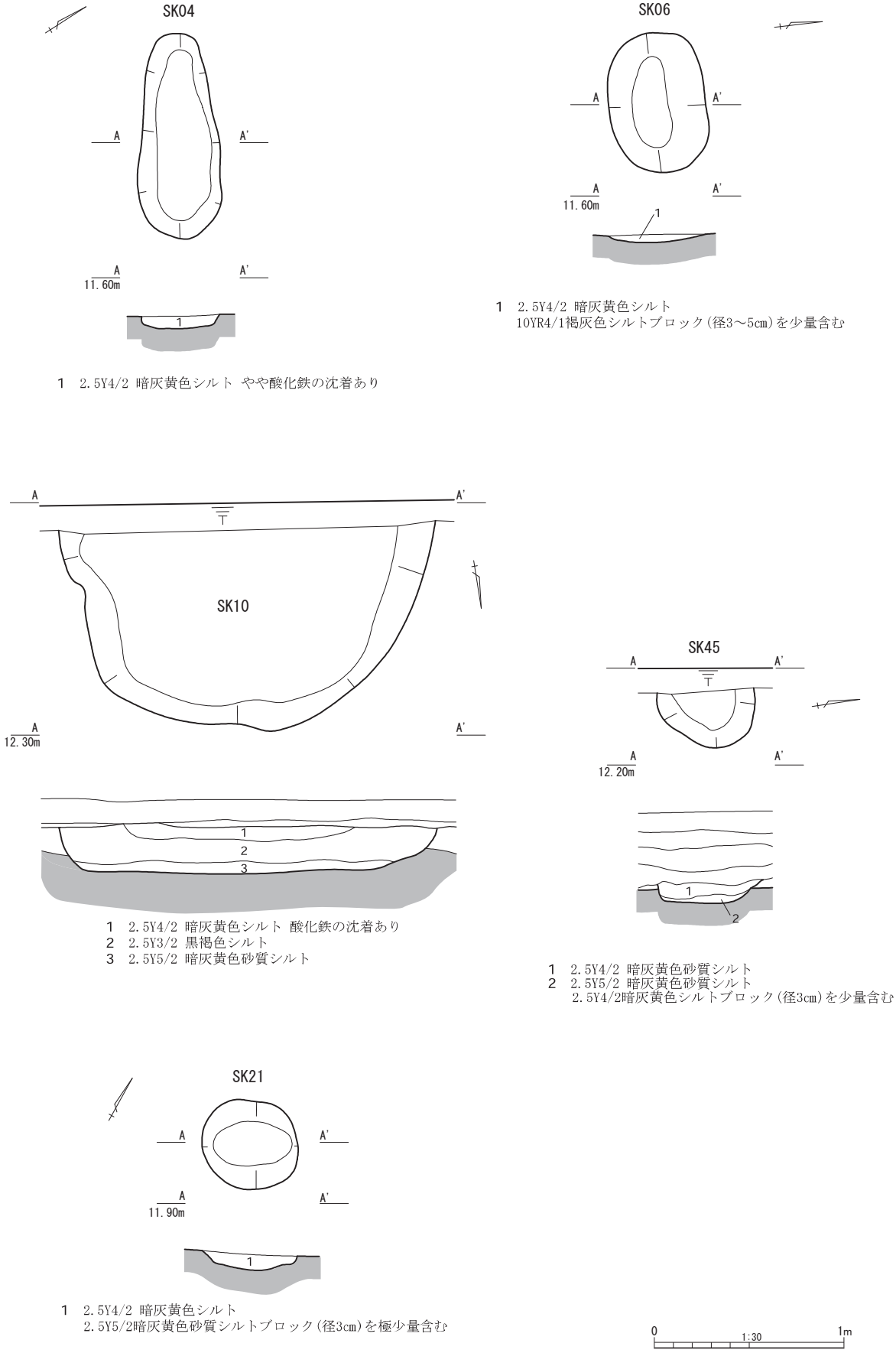


Fig.15　土坑平面・断面図 (S=1/30)

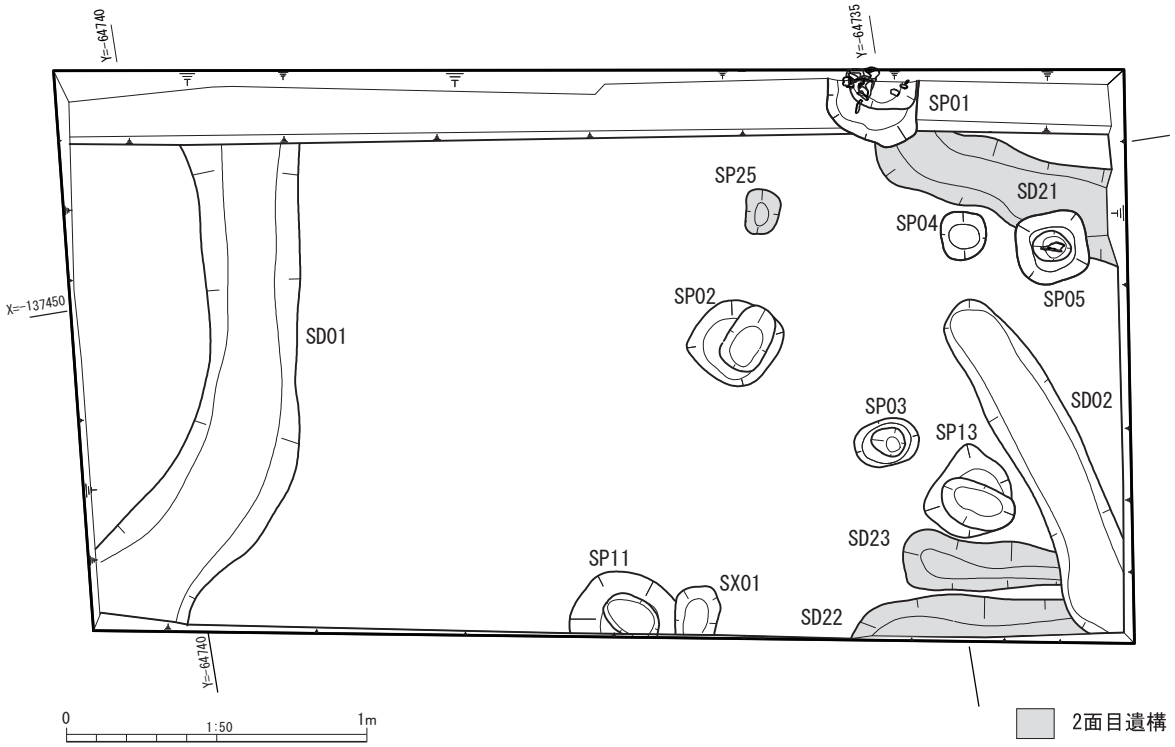


Fig. 16　Ⅱ区確認遺構（S=1/50）

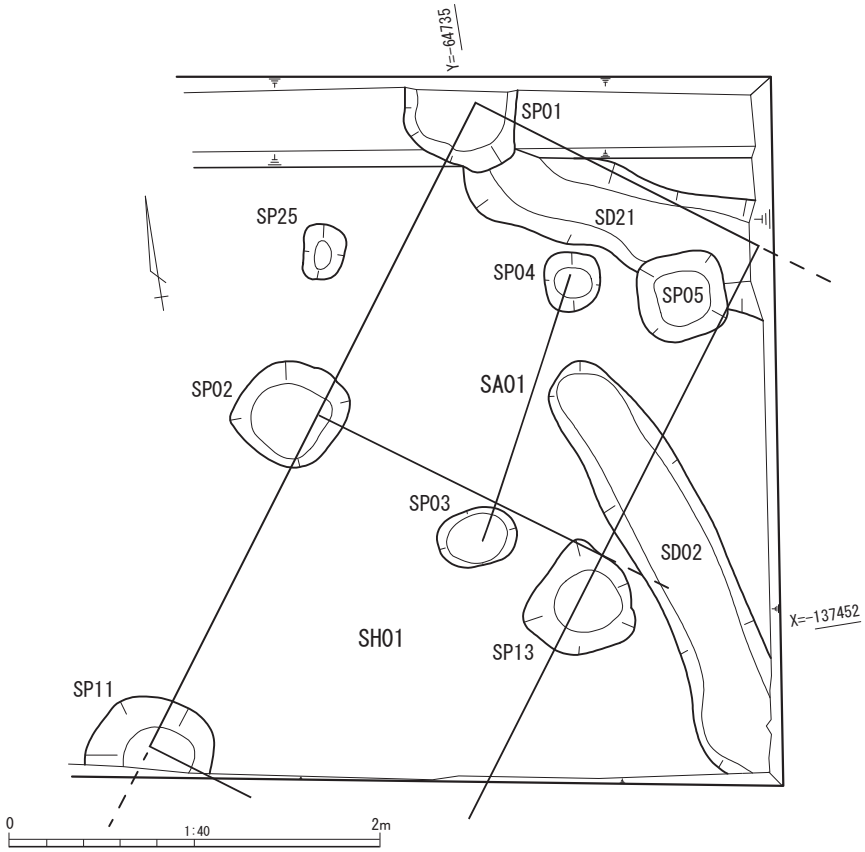
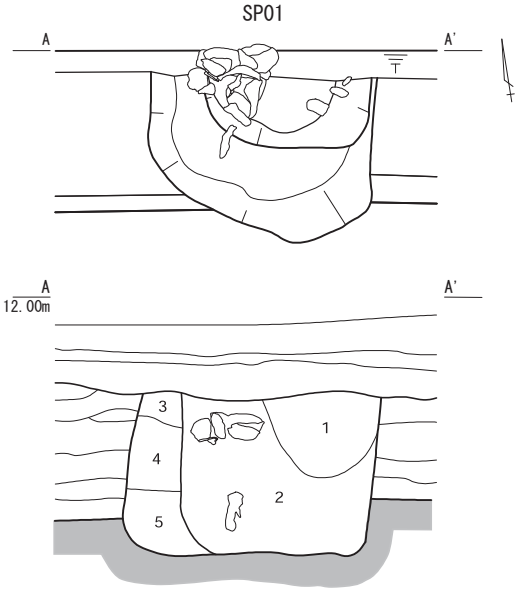
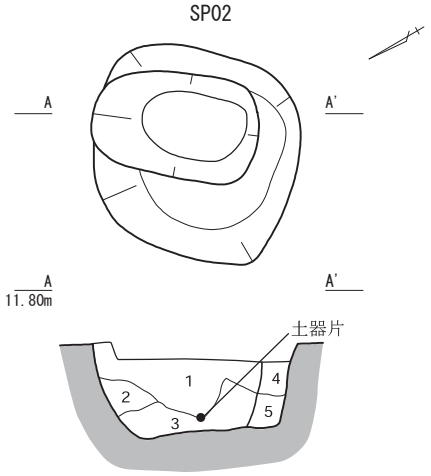


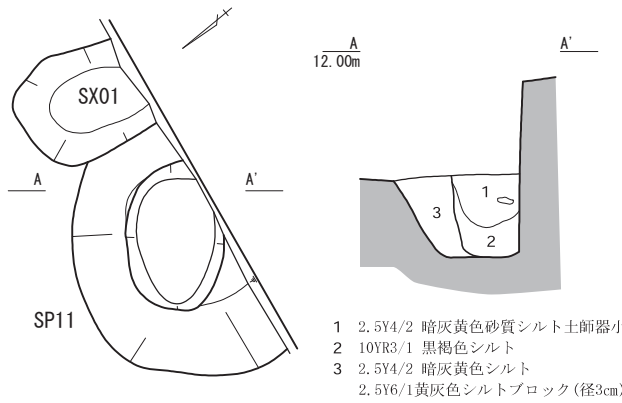
Fig. 17　SH01・SA01 平面図（S=1/40）



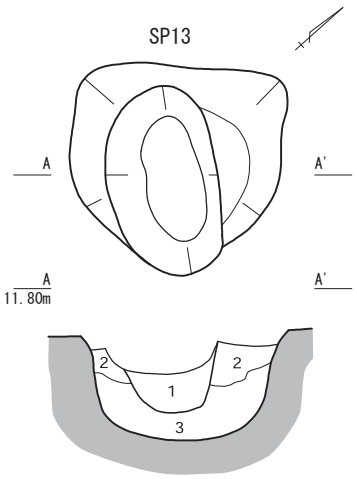
1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト 酸化鉄の沈着が多い
2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
　10YR3/1黒褐色シルトブロック(径3～5cm)を含む。土師器甕出土
3　2.5Y4/3オリーブ 褐色シルト 酸化鉄の沈着がやや多い
4　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
　2.5Y5/3黄褐色シルトブロック(径3～5cm)を少量含む
5　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト



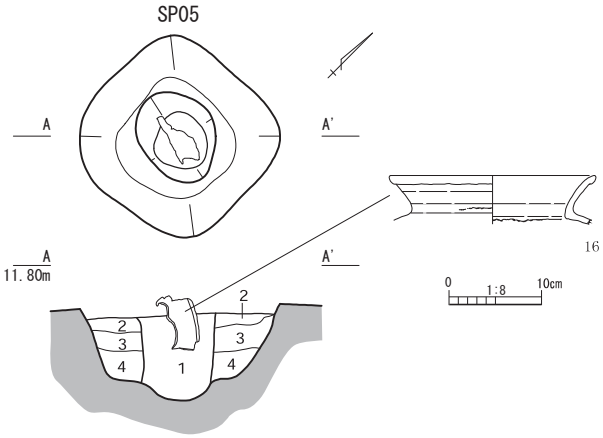
1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　2.5Y5/3黄褐色シルトブロック(径5cm)、土師器小片を少量含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
　2.5Y5/3黄褐色シルトブロック(径3cm)を少量含む。酸化鉄の沈着が多い
3　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
　10YR3/1黒褐色シルトブロック(径3cm)を少量含む
4　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 酸化鉄の沈着が多い
5　2.5Y5/3 黄褐色シルト
　2.5Y4/2暗灰黄色および10YR3/1黒褐色シルトブロック(径3cm)を少量含む



1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト土師器小片を含む
2　10YR3/1 黒褐色シルト
3　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　2.5Y6/1黄灰色シルトブロック(径3cm)を少量含む



1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 酸化鉄の沈着あり
2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト 酸化鉄の沈着あり
3　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト



1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト 土師器壺口縁～肩部
2　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 酸化鉄の沈着あり
3　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
4　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト

0　1:20　1m

Fig.18　SH01 各柱穴平面・断面図

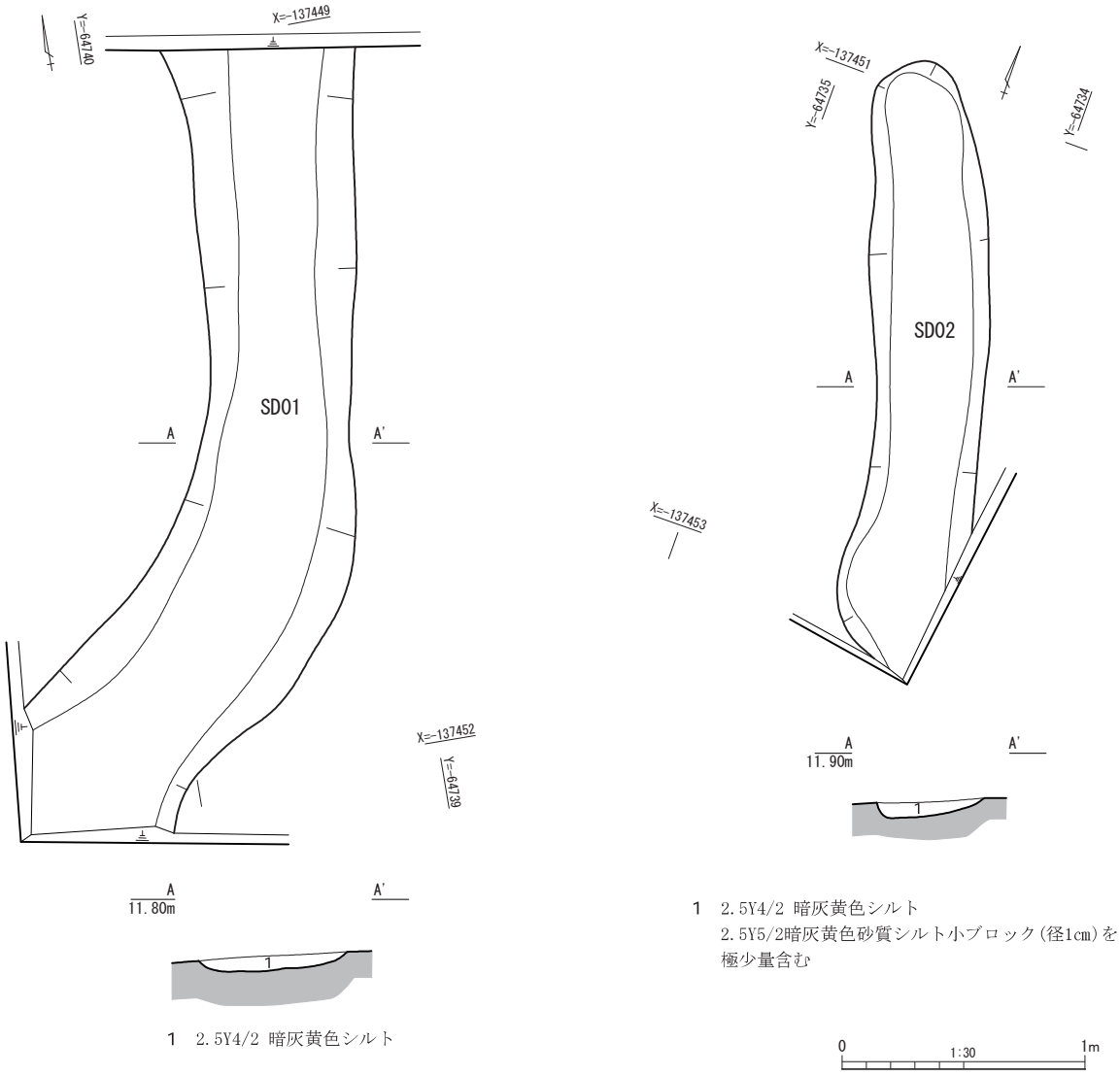


Fig.19　SD01・SD02 平面図 (S=1/30)

跡が確認でき、径 20 cmの柱が据えられていたと判断できる。なお、SH1 との関連性については不明であるが、よく似た方向性を持つことから足場の柱穴である可能性もある。

③溝

SD01　(Fig.19)　調査区の西側で確認したもので、幅 58 ～ 78 cm、深さ 10 cmの断面が船底型で、約 N-8°　17′　-E 振れる素掘りの浅い溝である。また、調査区の南西部で西に曲がり、N-49°　35′　-E の振れに変化する。長さは 3.5 m以上である。比高差は 4 cmで緩やかに南から北へ傾斜する。土師器片が出土している。このことから古墳時代後期のものと判断できる。

SD02　(Fig.19)　調査区の南東角で確認したもので、幅 42 ～ 50 cm、深さ 3 ～ 5 cmの断面が船底型で N-16°　19′　-W 振れる素掘りの浅い溝である。長さは 2.5 m以上である。比高差は 7 cmで北から南へ傾斜する。土師器甕片・須恵器瑳片 (Fig.40-17) などが出土している。このことから古墳時代後期のものと判断できる。

B　2面目確認遺構

①小穴

SP25　(Fig.16・20)　1面目のSB1の北西部分で確認したもので、長さ30㎝、幅20㎝の隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

②溝

SD21　(Fig.16・20)　SP1およびSP5に壊される溝で、幅45～60㎝、深さ10㎝ほどの断面が船底型で、N-63°　37′　-W振れる東西方向の素掘りの浅い溝である。長さは1.6ｍ以上である。比高差は3㎝で北西から南東へ傾斜する。土師器甕片（Fig.40-18）が出土している。これは小片であるため、時期について判断しがたいが、古墳時代後期と判断できる。

SD22・23　(Fig.16・20)　調査区の南東角で確認したもので、SD22は幅25㎝以上、深さ6～12㎝の、SD23は幅20～40㎝、深さ5～10㎝の断面船底型で、それぞれ、N-79°　28′　-W・N-78°　13′　-W振れる東西方向の素掘りの浅い溝である。長さはSD22が1.8ｍ以上、SD23が1.5ｍ以上である。比高差はSD22が5㎝で西から東へ傾斜するのに対して、SD23が4㎝で東から西へ傾斜する。遺物の出土はなかった。

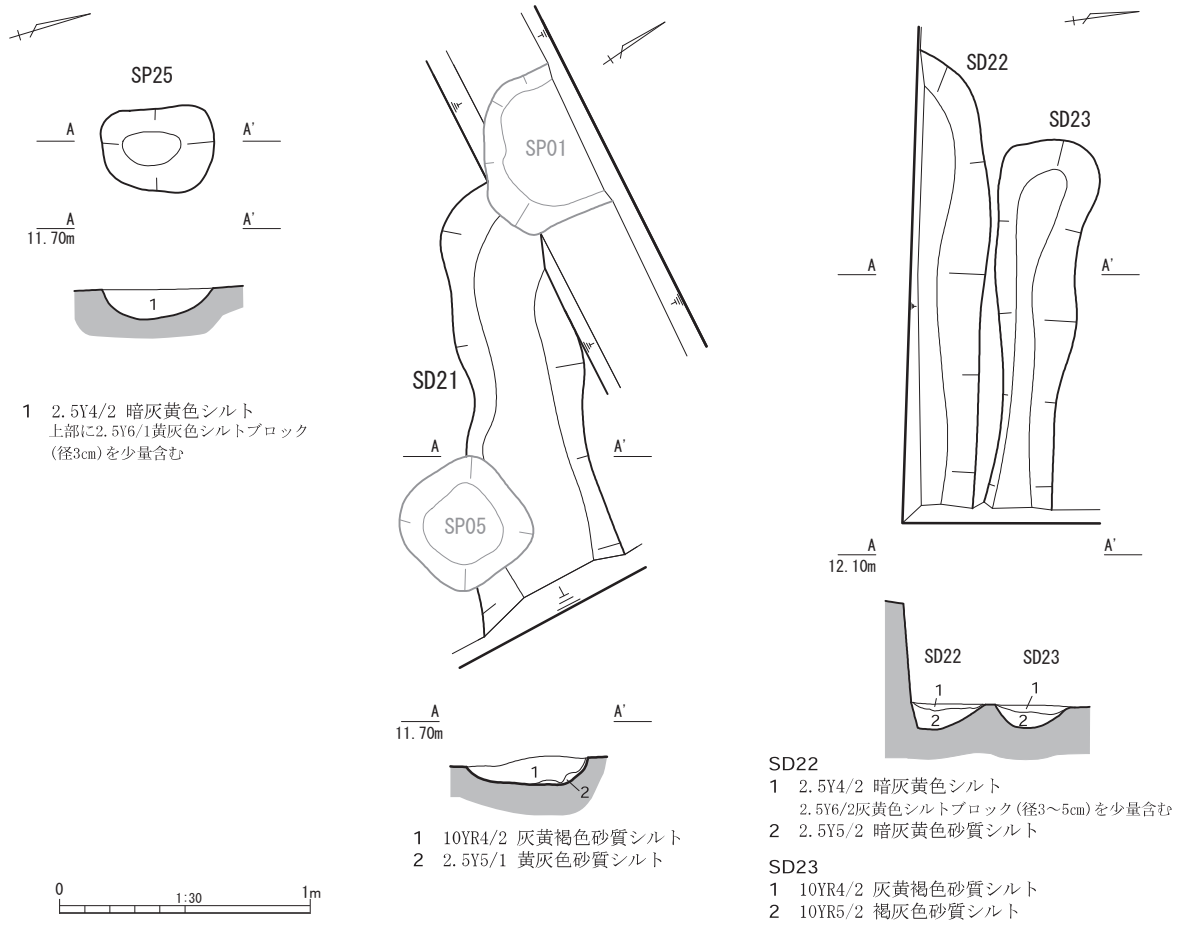


Fig.20　SP25・SD21・22・23平面・断面図(S=1/30)

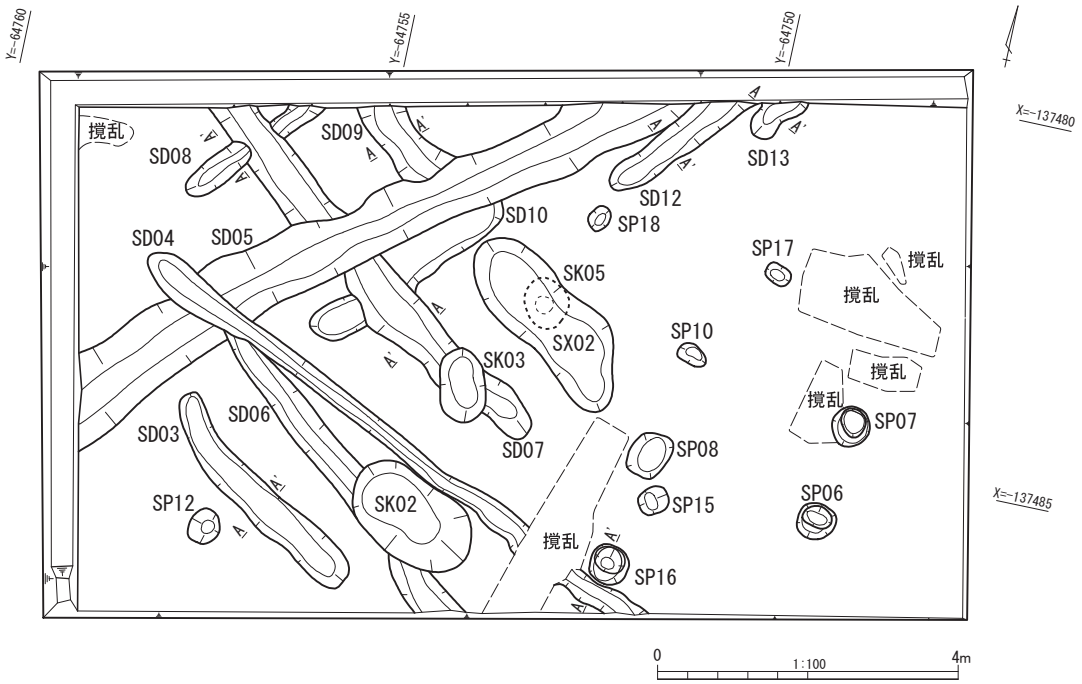


Fig.21　Ⅲ区確認遺構配置図（1/100）

(4) Ⅲ区検出遺構

Ⅲ区は開発範囲の南東側にあり、防火水槽設置に伴う調査区である。Ⅲ-1 層上面で、土坑 3 基、小穴 9 基、溝 10 条、その他の遺構 1 基を確認した。ここでもⅡ区と同様に 2 面目（Ⅲ-2a 層）の調査を行ったが遺構の確認には至らなかった。そのため、確認した遺構はすべて 1 面目のものである。

①建物

SH02　(Fig.22・23) 調査区の東側で確認したもので、遺構配置から SP6・SP7・SP8・SP10・SP16 の柱穴からなる掘立柱建物で、1 間×2 間もしくはそれ以上の掘立柱建物、または総柱建物であると考えられる。各々の柱穴はおおむね隅丸方形を呈し、SP6・SP7・SP16 では柱抜取り跡が存在する。SP6・SP16 が東南東へ、SP7 が南東へ抜取っていると判断できる。主軸は N-9° 30′ -E 振れる。柱抜取り跡の観察から径 30 ㎝前後の柱が据えられていたと判断できる。SP16 では土師器甕片 (Fig.40-19) が出土している。

②小穴

SP17　(Fig.24)　調査区の南東側、SH2 の北側で確認したもので、長さ 35 ㎝、幅 24 ㎝の隅丸方形の小穴である。断面の観察からは柱抜取り跡と判断できる部分を確認したが、平面では確認できなかった。遺物の出土はなかった。

SP12　(Fig.24)　調査区の南西側で確認したもので、長さ 46 ㎝、幅 42 ㎝の隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

SP15　(Fig.24)　調査区の南東側で確認したもので、SH2 の SP8 の南側に存在する。長さ 40 ㎝、幅 34 ㎝の隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

SP18　(Fig.24)　調査区の南西側で確認したもので、長さ 32 ㎝、幅 26 ㎝の隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。出土している土師器片から、古墳時代後期の遺構と判断した。

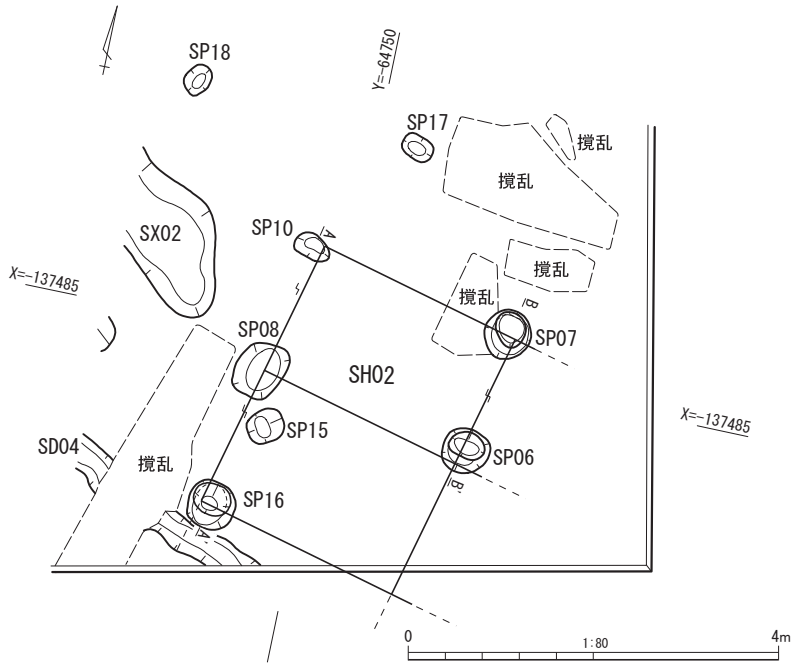
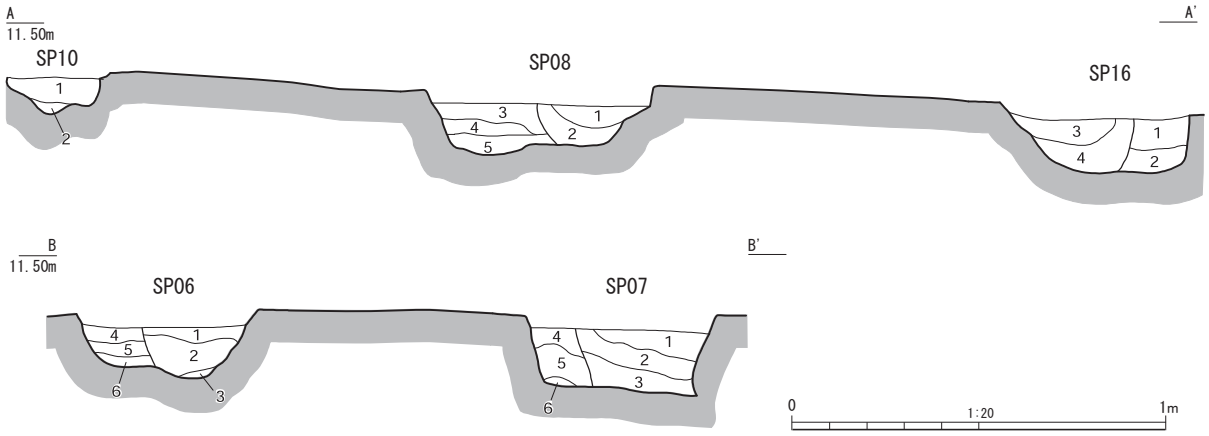


Fig.22　SH02 平面図 (S=1/80)



SP10
1　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルト小ブロック
　(径1～2cm)を少量含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　10YR5/1褐灰色シルトブロック
　(径3cm)を極少量含む

SP08
1　10YR5/1 褐灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック
　(径3cm)をやや多めに含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　10YR5/1褐灰色シルト小ブロック
　(径1cm以下)を極少量含む
3　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック
　(径3cm)を少量含む
4　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
5　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　2.5Y4/1黄灰色砂質シルトブロック
　(径3cm)を少量含む

SP16
1　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/1褐灰色シルト小ブロック
　(径1cm)を少量含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/1褐灰色シルトブロック
　(径3cm)をやや多めに含む
3　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y6/1黄灰色シルト小ブロック
　(径1cm)を極少量含む
4　2.5Y6/1 黄灰色シルト
　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック
　(径3cm)を少量含む

SP06
1　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y6/1黄灰色シルトブロック(径1～3cm)を極少量に含む
2　10YR4/1 褐灰色シルト
　2.5Y6/1黄灰色シルトブロック(径1～3cm)をやや多めに含む
3　2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
4　10YR5/1 褐灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック(径3cm)を少量含む
5　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
　10YR5/1褐灰色シルトブロック(径3cm)を少量含む
6　2.5Y5/1 黄灰色シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック(径3cm)を少量含む

SP07
1　2.5Y6/1 黄灰色シルト
　10YR5/1褐灰色シルトブロック(径3cm)を少量含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
3　10YR4/2暗灰黄色シルト
　2.5Y5/1黄灰色シルトブロック(径3cm)を少量含む
4　2.5Y4/1 黄灰色シルト
　2.5Y5/1黄灰色シルト小ブロック(径1cm)をやや多く含む
5　2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
　10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロック(径1cm)を極少量含む
6　2.5Y5/1 黄灰色シルト
　10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロック(径1cm)を極少量含む

Fig.23　SH02 断面図 (S=1/20)

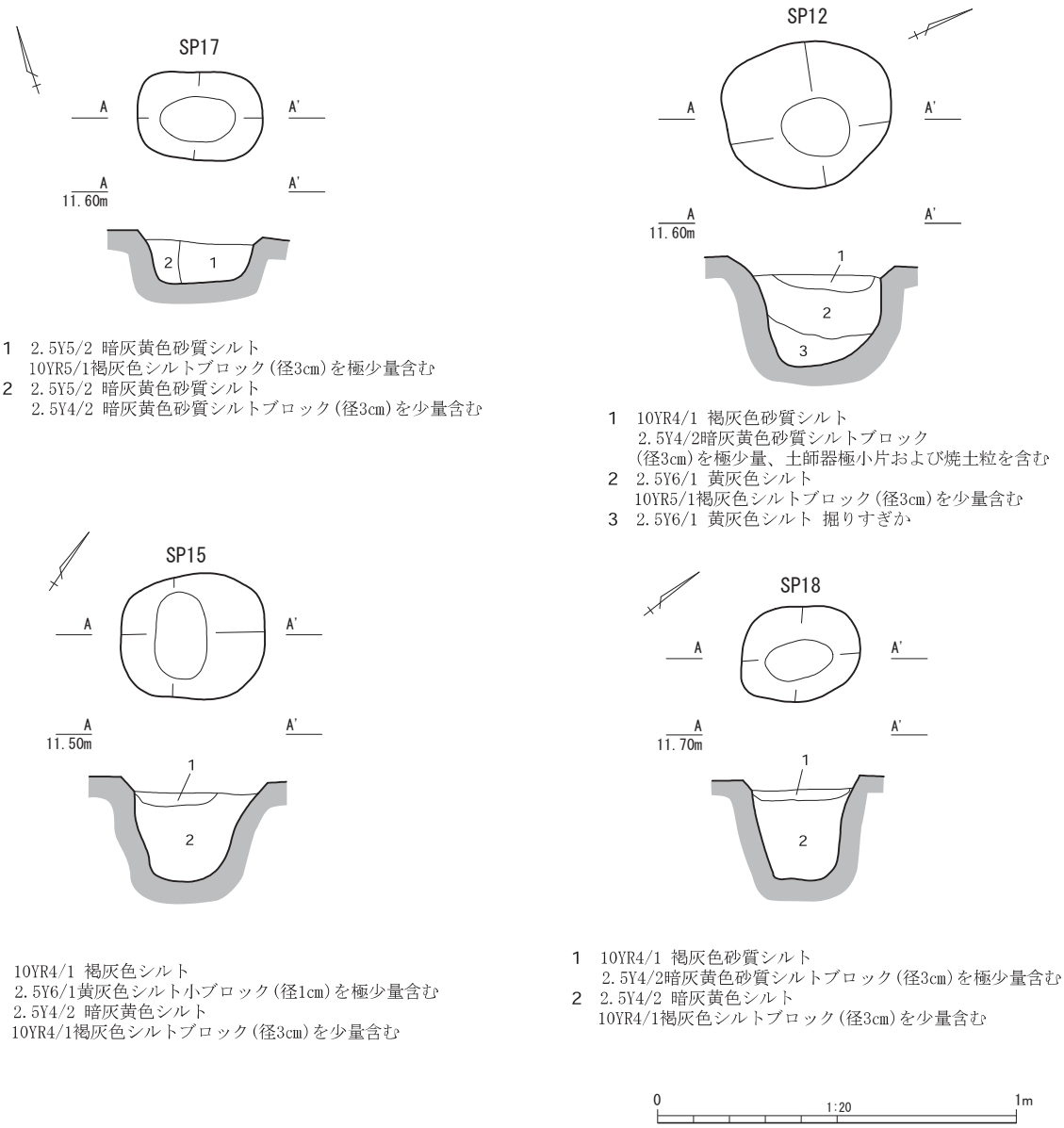


Fig.24　SP17・12・15・18 平面・断面図 (S=1/20)

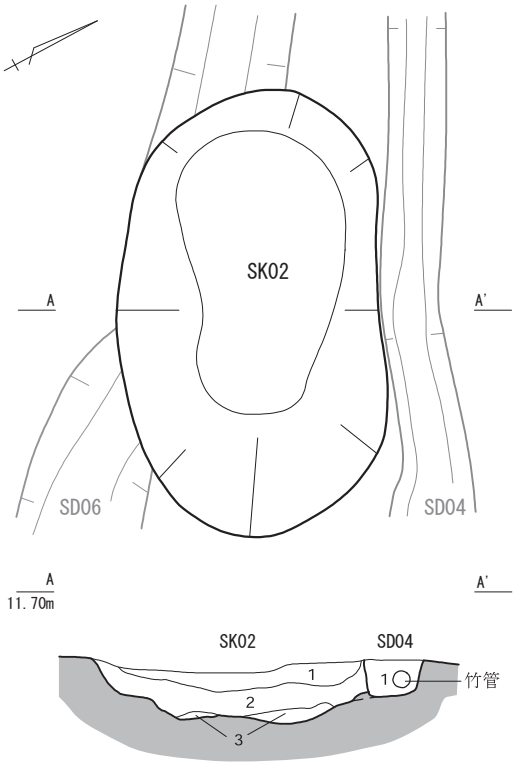
③土坑など

SK02　(Fig.25)　調査区の南西側で確認したもので、長さ 180 cm、幅 105 cmの楕円形を呈し、深さ 25 cmの断面が船底形の土坑である。

SK03　(Fig.25)　調査区の中央で確認したもので、SD10 よりも新しいものである。長さ 100 cm、幅 60 cmの楕円形を呈し、深さ 12 cmの断面が船底形の土坑である。

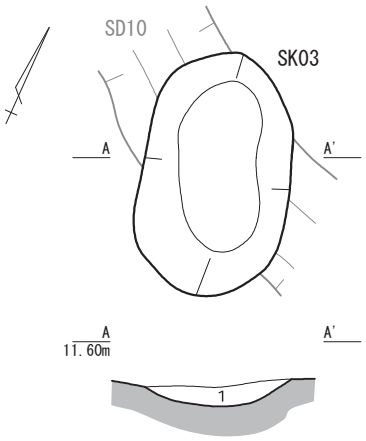
SK05　(Fig.25)　調査区の中央で確認したもので、SX2 に先行する。長さ 69 cm、幅 58 cmの南側がややとがる楕円形を呈し、深さ 30 cmの断面が船底形の土坑である。

SX02　(Fig.25)　SD10 の東側に並行する。長さ 260 cm、幅 96 cmのやや長い楕円形を呈し、深さ 10 cmの断面が船底形の土坑である。

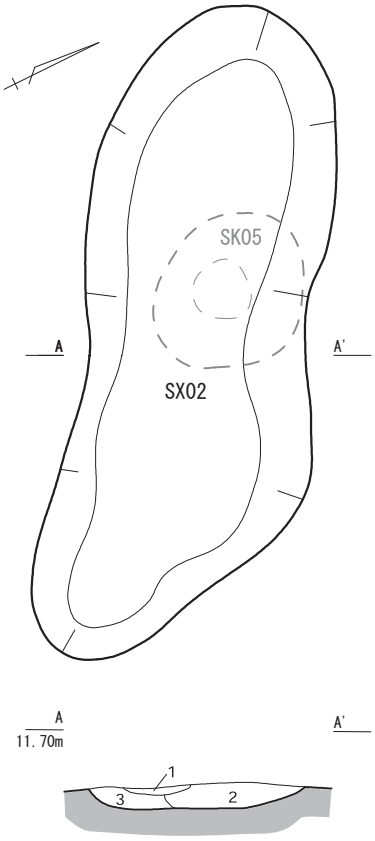


SK02
1　10YR3/2 黒褐色シルト
　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト小ブロック(径1cm以下)を少量含む
2　10YR3/1 黒褐色シルト
　2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(径3～4cm)を少量含む
3　2.5Y3/1 黒褐色シルト
　5Y5/2灰オリーブ色シルト小ブロック(径1～2センチ)を少量含む

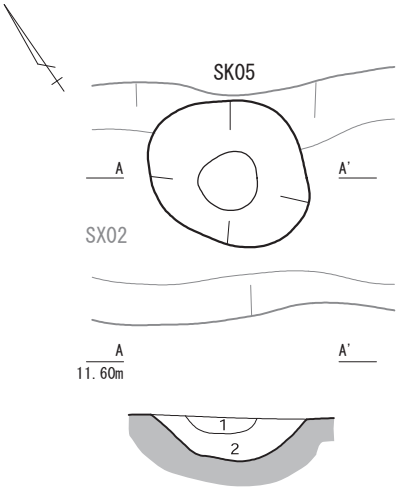
SD04
1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック(径5cm)を少量含む



1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト



1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
2　10YR3/2 黒褐色シルト
　2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック(径3～5cm)を少量含む
3　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR3/2黒褐色シルトブロック(径5cm)を少量含む



1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/1褐灰色シルトブロック(径3～5cm)を少量含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
　10YR4/2灰黄色シルトブロック(径3～5cm)をやや多めに含む

0　1:30　1m

Fig.25　SK02・03・05・SX02 平面・断面図 (S=1/30)

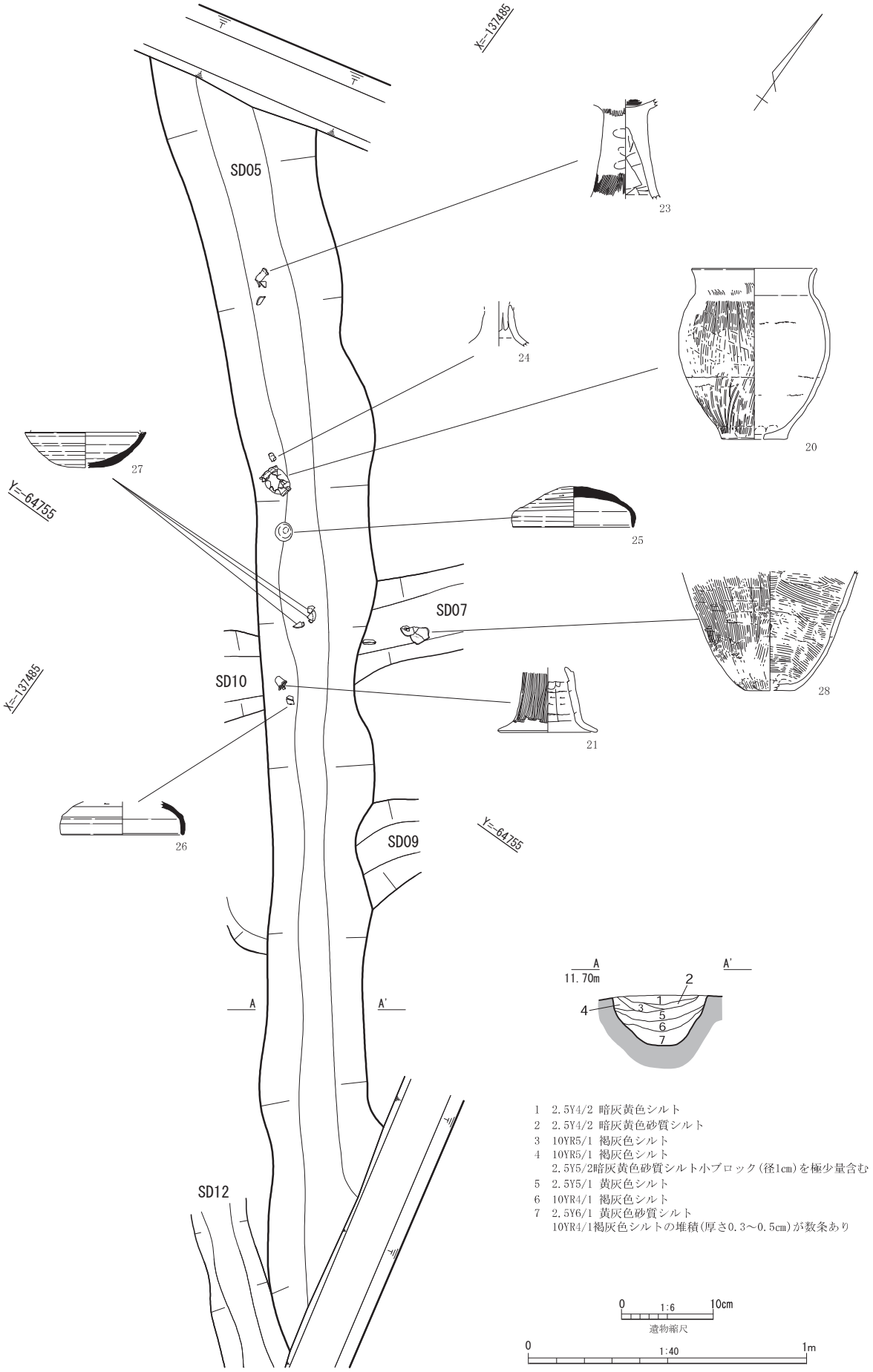


Fig.26　SD05 平面・断面図 (S=1/40)

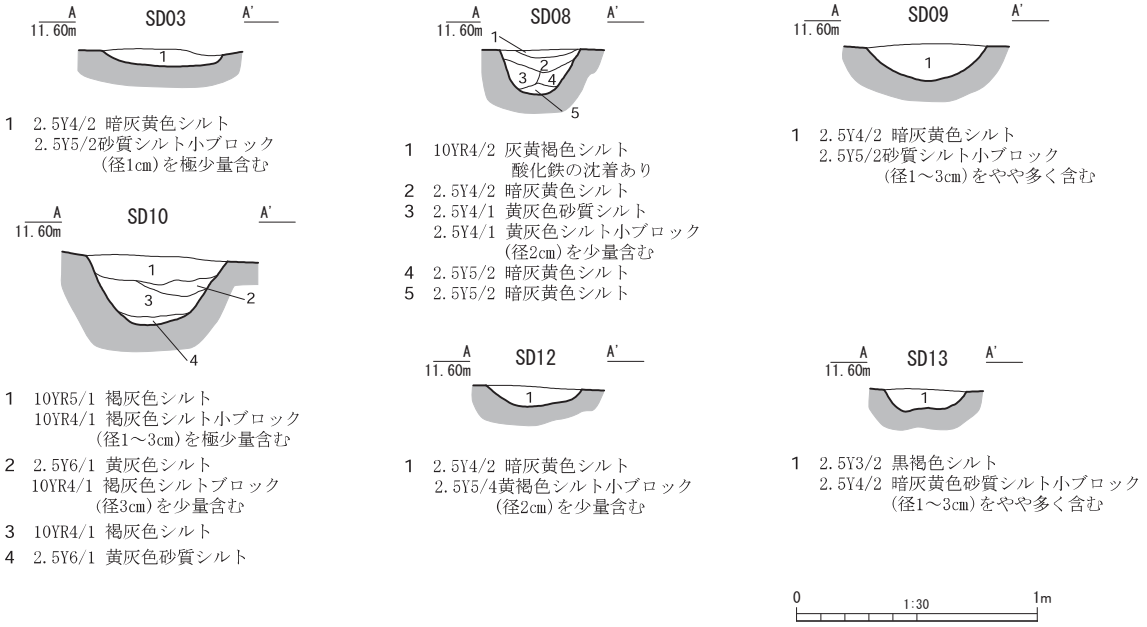


Fig.27　SD03・08・09・10・12・13 断面図 (S=1/30)

④溝

SD05　(Fig.26)　調査区の北西部分で確認したもので、幅 68 ～ 100 cm、深さ 30 ～ 40 cmの断面逆台形の N-53°　16′　-E 振れる素掘りの溝であり、SD4 と SD6 が交差する付近で N-41°　19′　-E に振れが変化する。底面の標高値から比高差が 7 cmで中央部分が下がっていることが分かる。北東端と南西端の比高差は 1 cmないことから、本来はおおむね水平な底面であったと判断できる。須恵器 (Fig.40-25 ～ 27) や土師器 (Fig.40-20 ～ 24) が出土したことから 6 ～ 7 世紀のものと判断した。

SD07・10　(Fig.26・27)　SD5 と交差し、それぞれ幅 51 ～ 55・52 ～ 75 cm、深さ 15 ～ 20・10 ～ 33 cmの断面が船底形の N-51°　17′　-W 振れる素掘りの溝である。SD5 と SD7・10 の新旧関係については当該部分の埋土の違いを確認できなかったため、同時に存在したと判断した。また、溝底面の標高値から SD7 は比高差が 3 cmで北西から南東へ緩やかに、SD10 は比高差が 23 cmで南東から北西へ傾斜し、SD5 へ合流したものと判断できる。SD7 では土師器片 (Fig.40-28・29) が出土した。

SD08　(Fig.27)　SD7 と交差する幅 36 cm、深さ 16 cmの断面が船底型の N-42°　11′　-E 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値から比高差が 4 ～ 3 cmで北東から南西へ緩やかに傾斜する。

SD09　(Fig.27) SD7 の東側で確認した。SD7 に並行し、SD5 と交差する幅 48 ～ 65 cm、深さ 14 cm の N-48°　34′　-W 振れる浅い素掘り溝である。SD5 との新旧関係は SD7・10 と SD5 との関係と同様に埋土の違いを確認できなかったため、SD5 と同時に存在したと判断した。また、その SD5 と同時に存在した SD7・10 とも同時に存在したと判断した。SD9 の溝底面の標高値から比高差が 2 cmで、北西よりも南東のほうが低くなっているが、確認長が 1.2m であるため溝全体の傾斜方向については判断しがたい。

SD12　(Fig.27) 調査区の北東側で確認した。幅 41 ～ 47 cm、深さ 8 ～ 10 cmの断面が船底形の N-41°　4′　-E 振れる浅い溝である。溝底面の標高値から比高差が 6 cmで､南西から北東へ傾斜する。

SD13　(Fig.27) SD12 に並行し、その南東側で確認した。幅 36 ～ 43 cm、深さ 11 cmの断面が船底形の N-40°　56′　-E 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値の比高差が 1 cmないことと、確認長が 76 cmであることから溝全体の傾斜方向については判断しがたい。

SD04　(Fig.21)　調査区の南西側中央寄りで確認した。幅 24 ～ 45 cm、深さ 15 cmの断面が箱形の N-65°　33′　-W 振れる溝で竹管が埋設されており、暗渠排水路と判断できる。溝底面の標高値から比高差が 8 cmで、北西から南東へ傾斜する。

SD06　(Fig.21)　調査区の南西側で確認した。幅 45 ～ 52 cm、深さ 10 cmの断面が船底形の N-51°　13′　-W 振れる浅い素掘り溝で SD4 に先行する。溝底面の標高値から比高差が 4 cmで北西から南東へ傾斜する。

SD03　(Fig.27)　調査区の南西側で確認した。幅 50 ～ 53 cm、深さ 7 ～ 9 cmの断面が船底形の N-58°　9′　-W 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値から比高差が 4 cmで北西から南東へ傾斜する。

(5) Ⅳ区検出遺構

Ⅳ区は開発範囲の南側にあり、排水路の付け替えに伴う調査区である。ここでは溝 1 条を確認した。

①溝

SD11　(Fig.29)　調査区の南東角で確認した幅 55 ～ 100 cm、深さ 30 ～ 35 cmの断面が逆台形の N-45°　16′　-E 振れる素掘りの溝である。土師器片や円礫などが出土した。明瞭な砂層などの水流堆積は確認できていないが、中層より下位では堆積土が砂っぽくなるので、非常に緩やかな水流が存在したと考えられる。また、底面の標高値分布から北東から南西へ流れる溝と判断できる。出土した須恵器 (Fig.40-32) から古墳時代後期の遺構と判断できる。

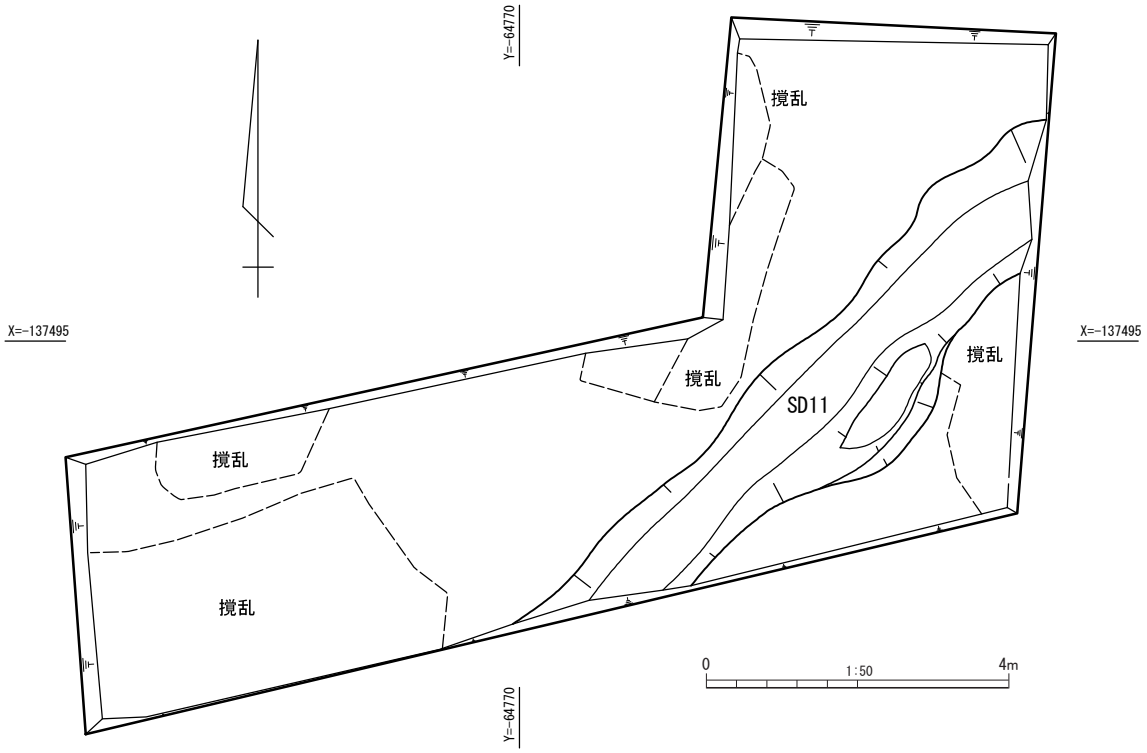


Fig.28 Ⅳ区確認遺構配置図 (S=1/50)

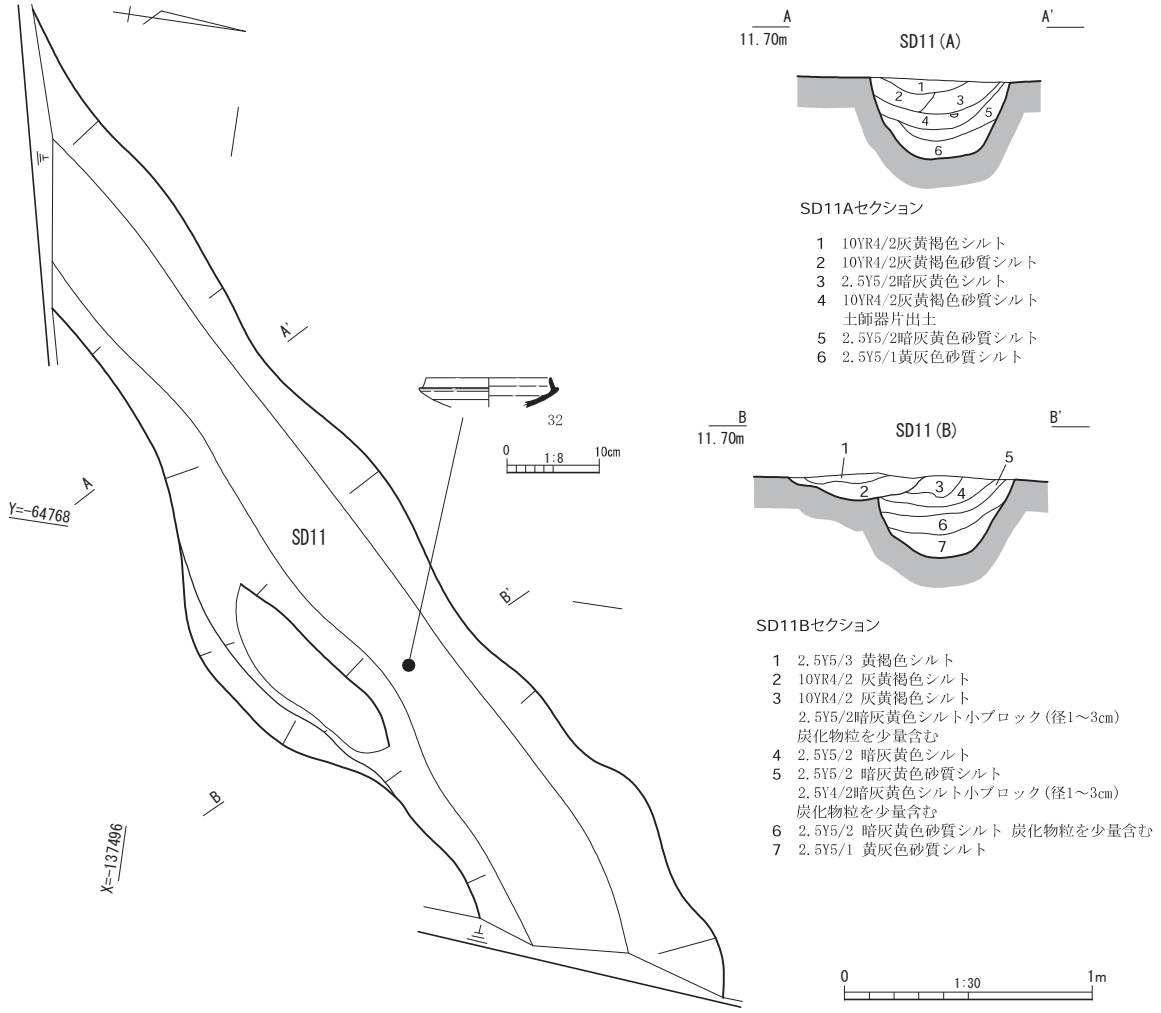


Fig.29　SD11 平面・断面図 (S=1/30)

(6) Ⅴ区検出遺構

Ⅴ区は開発範囲の南西部分にあり、掘立柱建物と思われる小穴群や、小穴、土坑、溝などの多くの遺構を確認している。概して､南側に遺構が集中している。この調査区でも上下２面の調査を行ったが、遺構はすべて１面目で確認した。なお、２面目に関しては、建物の基礎部分によって影響を受ける部分のみの調査を行った。

①建物および小穴群

小穴群　(FIg.32・33)　調査区の南東側には、柱穴と判断できる複数の遺構が確認できている。遺構の上下関係は少なくとも２時期あるようである。しかし、遺構の配置状況からさらに多くの時期差が存在しているものと判断した。また、遺構平面および断面の観察から、その多くが柱穴の可能性が高いことも確認している。特に SP35 ～ 38・46・47・66 はやや大きめの掘方を持ち、深さも深いことや、その配置状況から、掘立柱建物が建っていたと考えられるが、SP47・46 や SP36・44 には新旧関係が存在することから、この小穴群には複数の時期が存在することがわかる。その配置から、SP35・36・37・38 が一組の遺構（掘立柱建物か）を構成すると想定されるが、他の小穴と

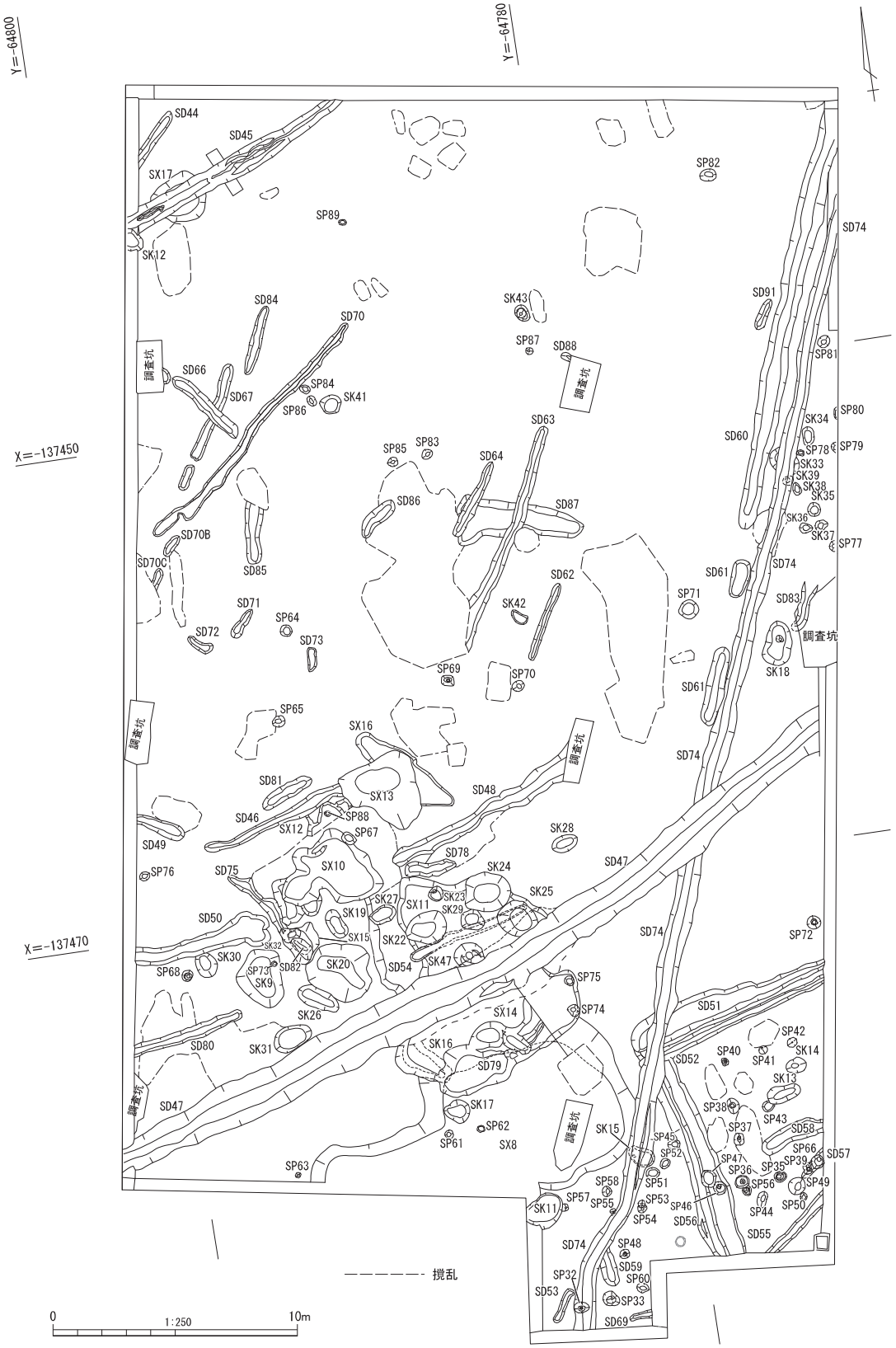


Fig.30　Ⅴ区遺構配置図（S=1/250）

の関連性が不明瞭である。このようにこの地点には複数の小穴が存在するが、各遺構間の関連性が判然としないため、掘立柱建物などを確定することはできなかった。

②小穴

SP83（Fig.31）調査区中央北寄りで確認したもので、幅39㎝、長さ47㎝の楕円形を呈し、深さ21㎝の断面が逆台形の小穴である。底部を欠くほぼ1個体分の土師器甕の破片（Fig.42-64）が出土した。破損もしくは破壊後に埋納されたものと判断できる。また、別個体の土師器壺の頸部から肩部片（Fig.42-63）が出土した。これらは古墳時代後期のものである。

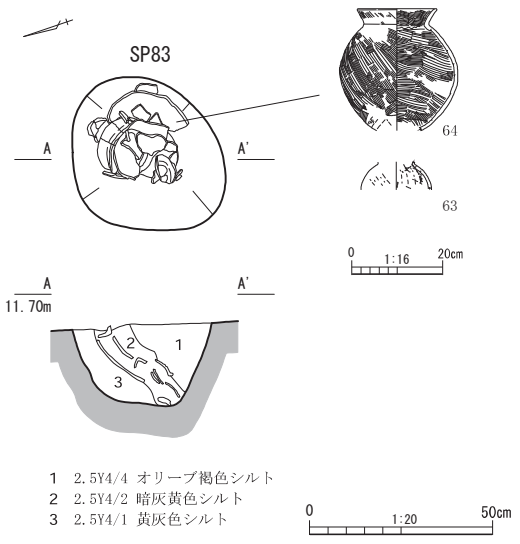


Fig.31 SP83 平面・断面図（S=1/20）

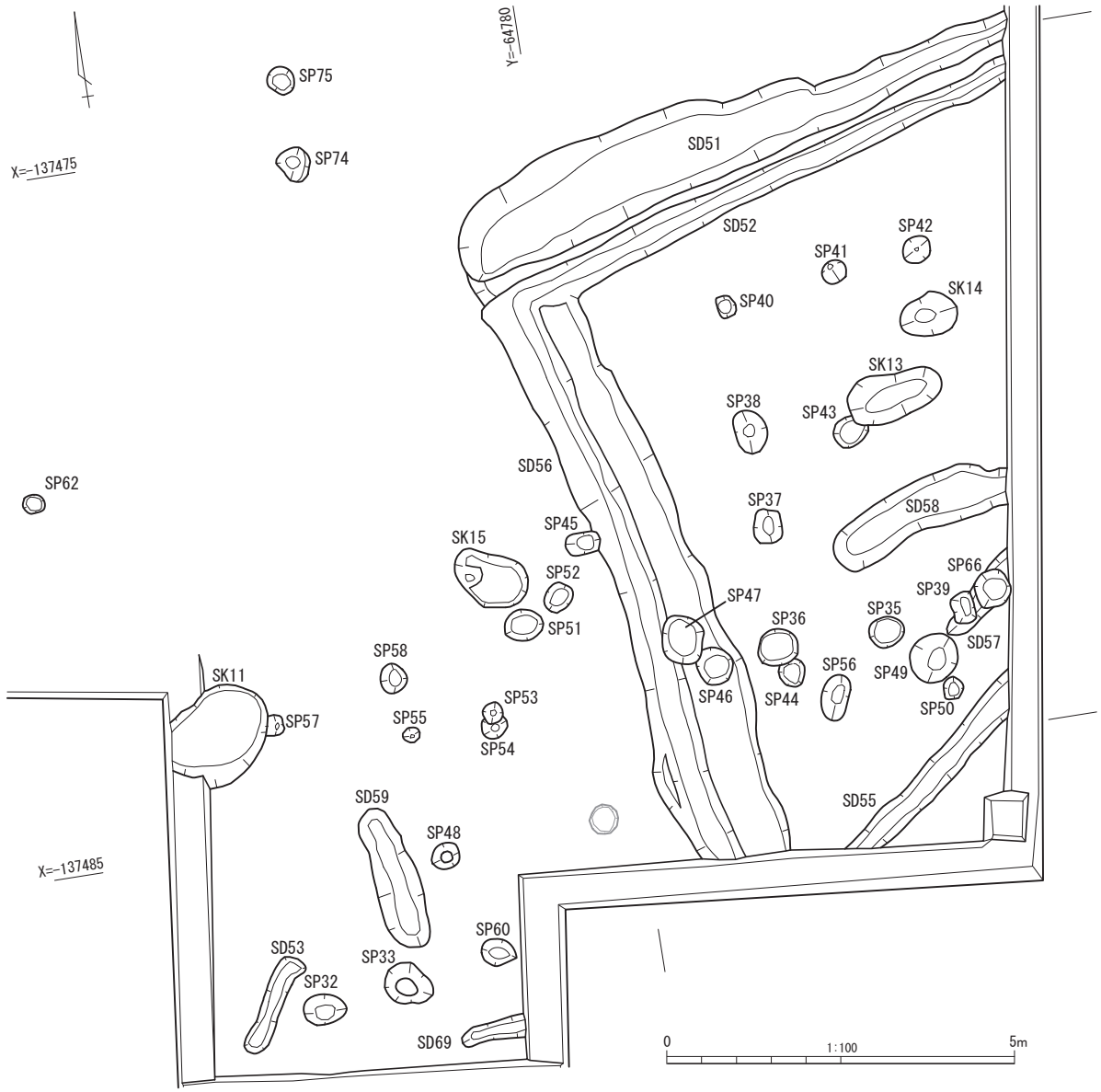


Fig.32 Ⅴ区南東部小穴群（S=1/100）

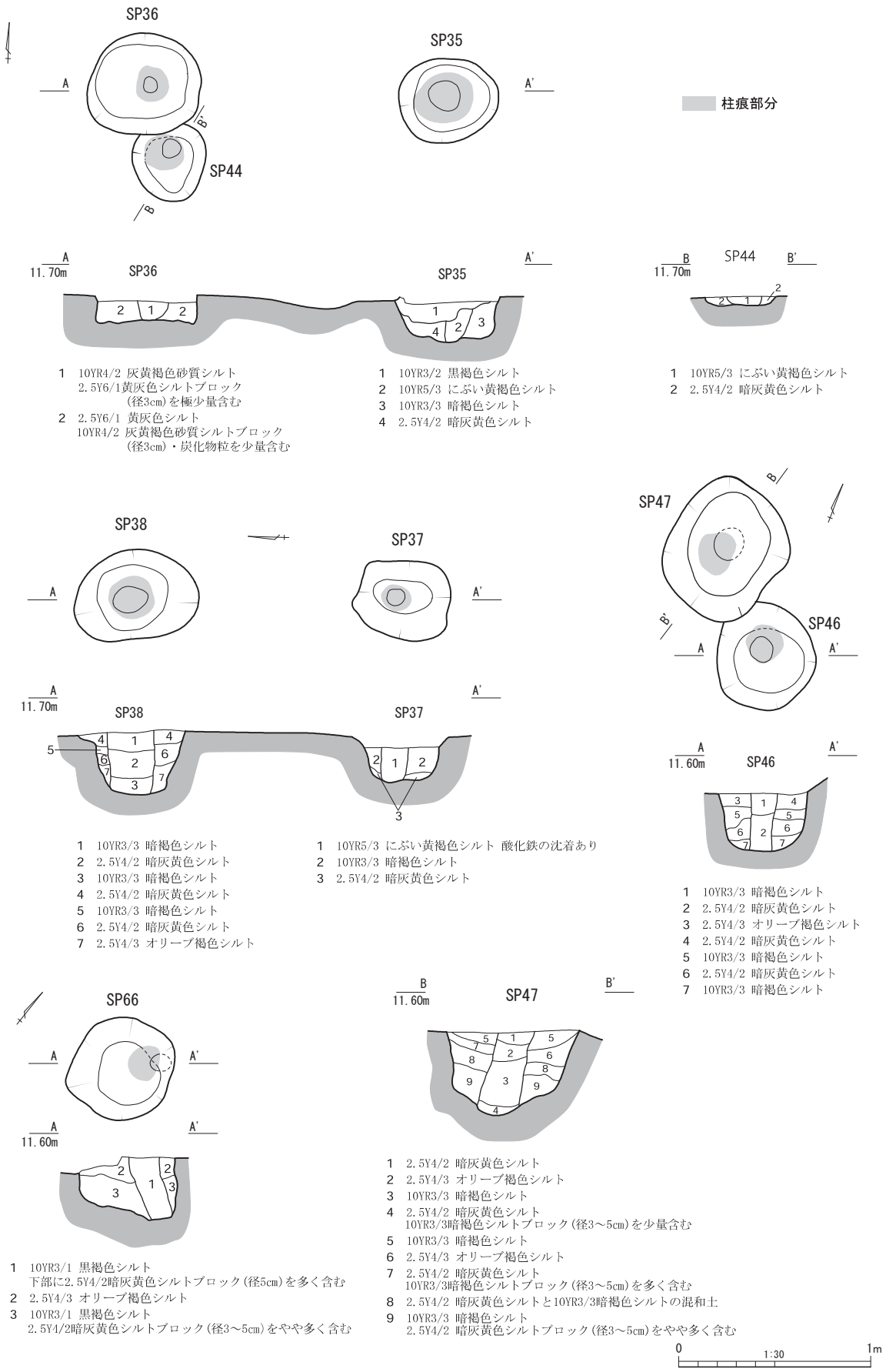


Fig.33　小穴群各遺構平面・断面図 (S=1/30)

③土坑

SK11　(Fig.34)　調査区の南側で確認したもので、幅120㎝、長さ160㎝以上の楕円形を呈し、深さ26㎝の断面が逆台形の土坑である。遺構の北東部で炭化物の広がりを確認した。これは中位層上面に相当する部分である。N-85°　49′　-E振れる。

SK18　(Fig.34)　調査区の北東で確認したもので、幅112㎝、長さ178㎝のやや北側がとがった楕円形を呈し、深さ18㎝の断面が船底型の浅い土坑である。この土坑から、土師器の小片(Fig.42-55)が出土したほか、有稜高坏(Fig.42-54)がほぼ完形で出土した。これはほぼ遺構に対して直交方向に倒れた状態で出土した。N-23°　7′　-E振れる。出土遺物から古墳時代中期～後期の遺構と判断できる。

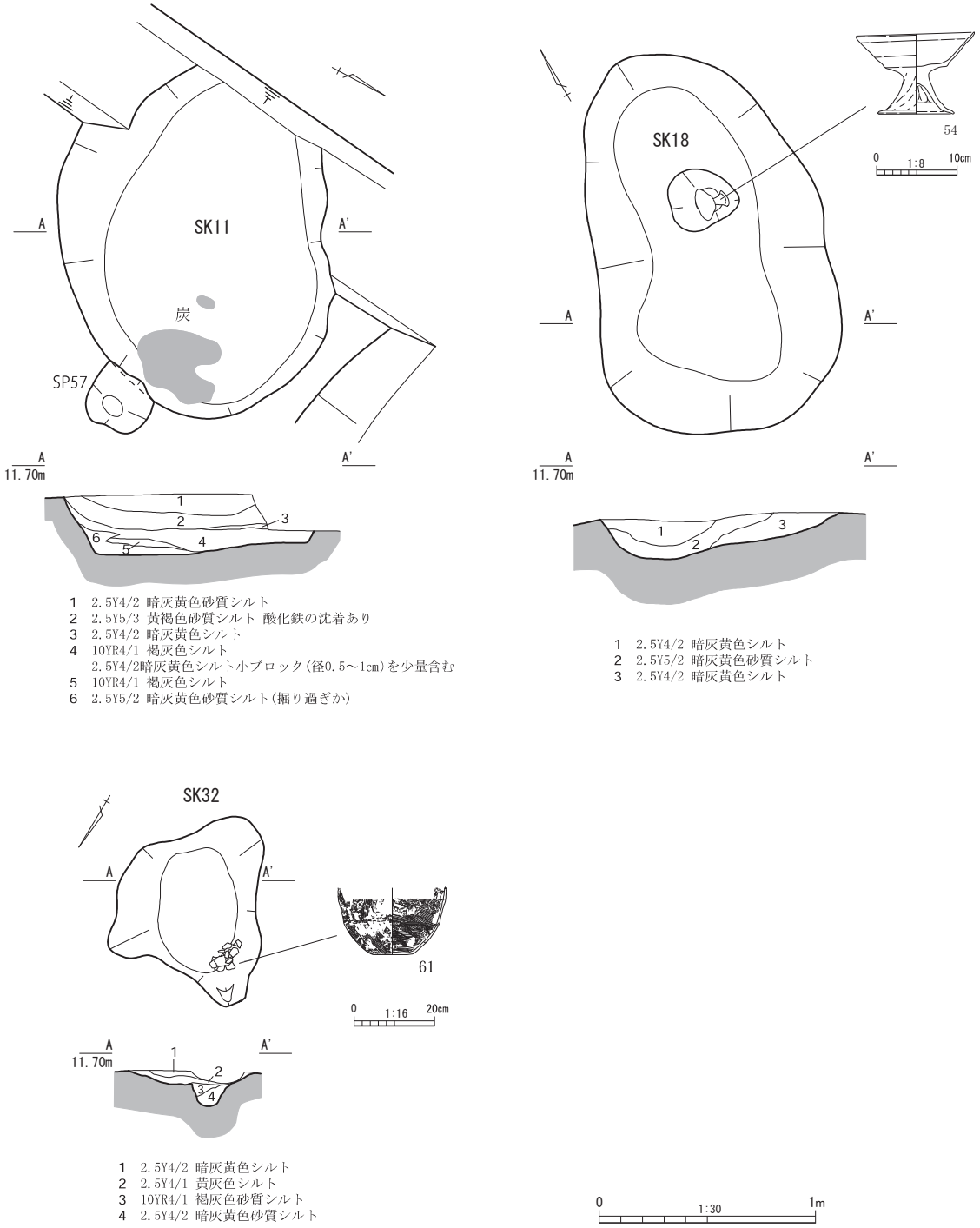


Fig.34　SK11・18・32平面・断面図(S=1/30)

SK32　(Fig.34)　調査区の中央やや西側、SD47の北側の土坑群中で確認したもので、幅30㎝、長さ40㎝の不整形な平面を呈し、深さ23㎝の断面が船底型の土坑である。平底の甕底部片(Fig.42-61)がまとまって出土した。この遺構はSD75に壊されていることから、その際に上部については欠損した可能性も考えられるが、すべて破片で出土していることから、破損もしくは破壊したのちに主に底部のみを埋納したと考えられる。なお、この遺物の底部には葉脈圧痕が残っている。

④溝

SD45　(Fig.35)　調査区の北西で確認した、素掘りの溝である。中央部分や南西端の一部が深くなっている。テラス状の部分が存在する。幅64～93㎝、深さ18㎝である。比高差が2㎝であるが北東から南西に緩やかに傾斜している。N-67°　18′　-E振れる。土師器小片(Fig.46-129～131)が出土した。

SD47　(Fig.36)　調査区中央やや南側で確認したもので、幅115～145㎝、深さ45～55㎝の断面が逆台形の素掘りの溝である。底面の比高差が8㎝で北東から南西に緩やかに傾斜している。この溝の堆積は上層・中層・下層の3層に判別できた。主に中層にシルトと細粒砂および中粒砂の互層が存在し、それなりの水量があった時期があったことが分かった。上層と下層から遺物が出土し

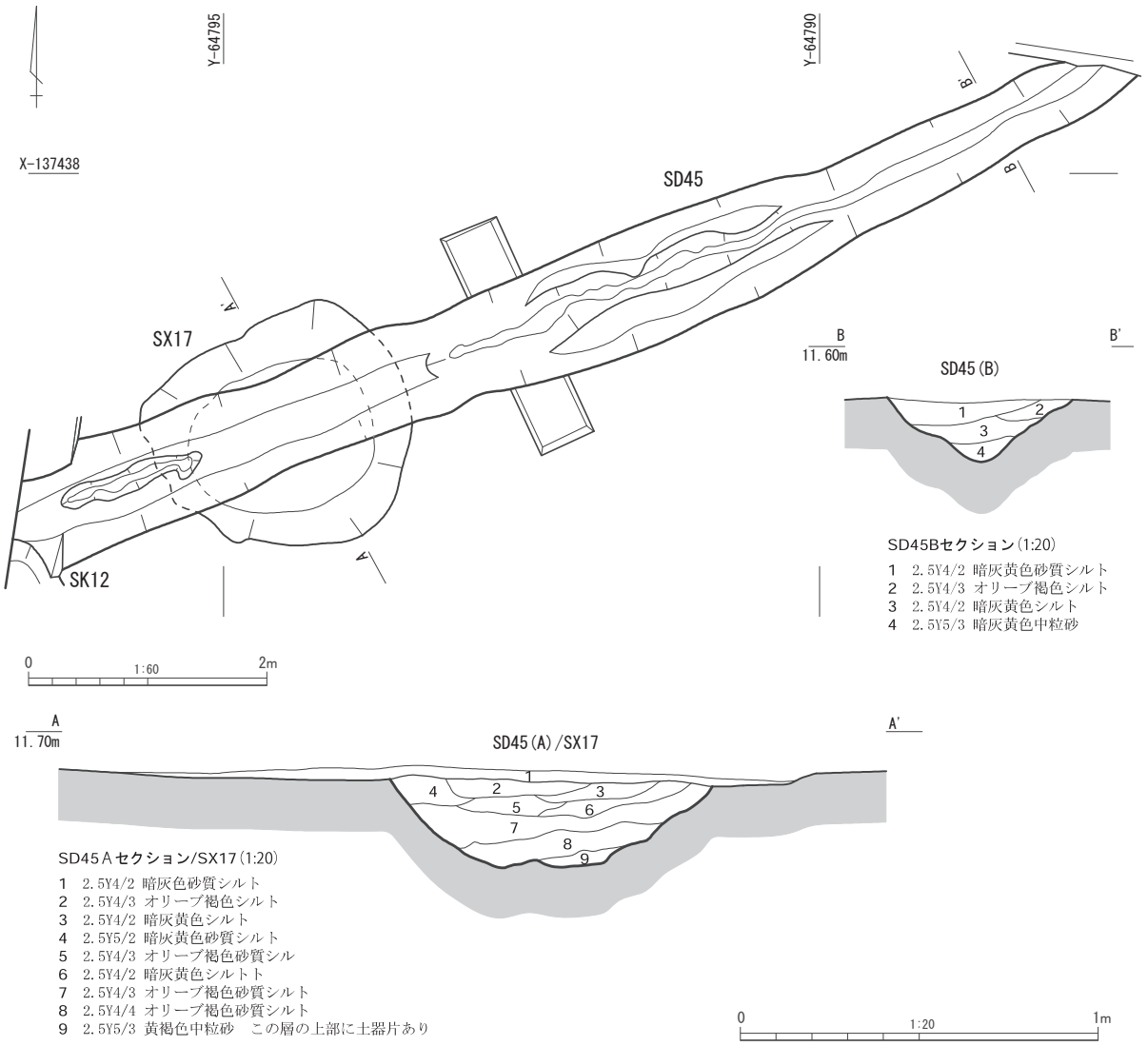


Fig.35　SD45平面(S=1/60)・断面図(S=1/20)

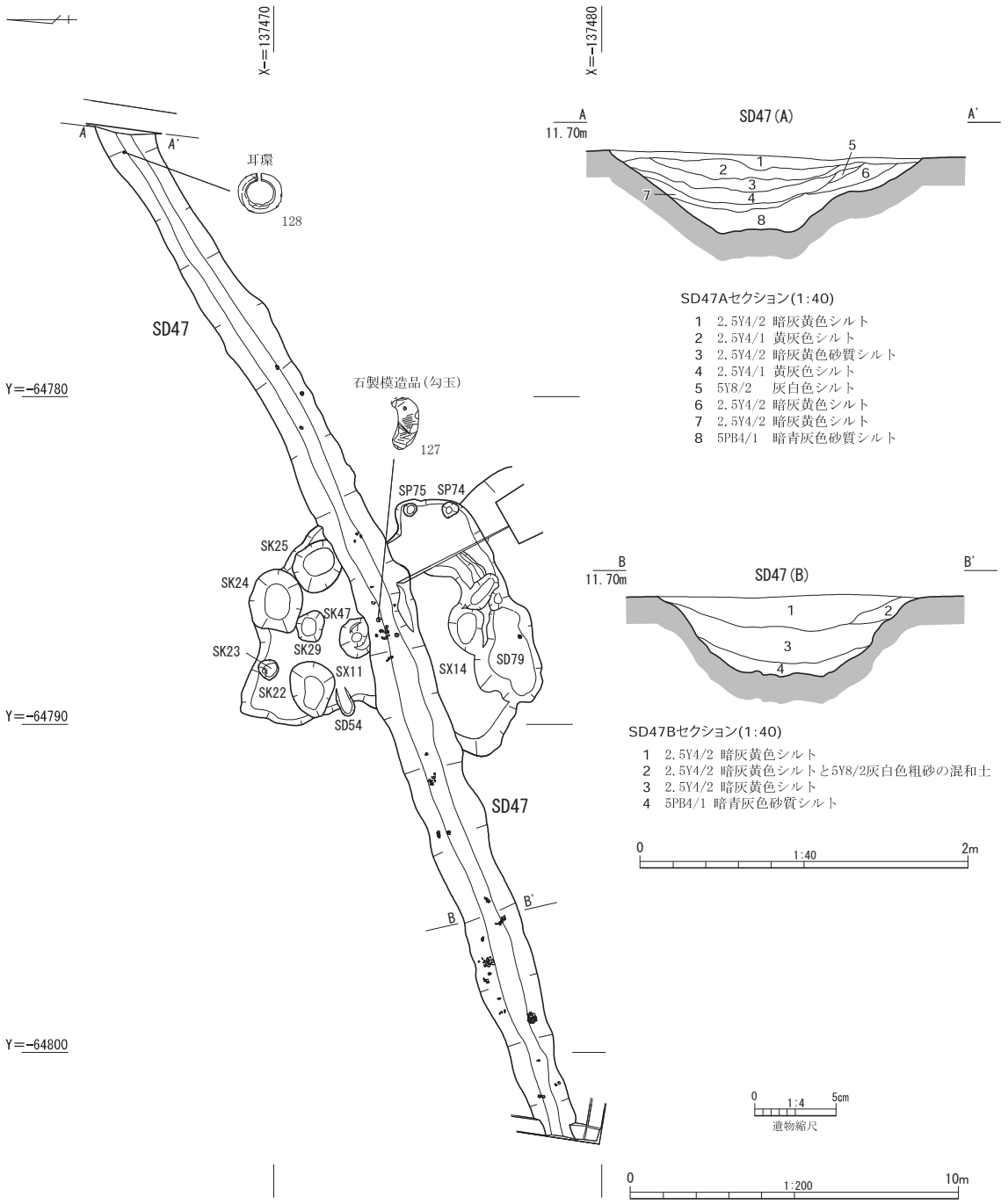


Fig.36　SD47 平面図（S=1/100）・断面図（S=1/40）

た。下層では須恵器の坏・瑳（Fig.45-102 ～ 126）や土師器片のほかに耳環（Fig.45-128）が、上層では土師器の甕（Fig.43-65 ～ 82）や甑（Fig.44-84 ～ 93）などと石製模造品の勾玉（Fig.45-127）が出土した。下層に須恵器が多く、上層に土師器が多い傾向がうかがえる。東側ではN-60°　51′-E、中央から西ではN-71°　31′　-E 振れ、やや湾曲するように溝が作られている。出土した遺物から古墳時代後期（7 世紀）以降に埋没したことがわかる。

SD51・SD52・SD56　（Fig.32・37）　調査区の南東で確認したＬ字状を呈する溝である。SD51 は幅 45 ～ 137 cmの深さ 13 cm、SD52 は幅 34 ～ 51 cmの深さ 11 cmの断面が船底型の素掘りの溝である。SD56 は幅 119 ～ 154 cmの深さが西側で 17 cm、東側で 7 cmの断面が船底型の素掘りの溝である。比

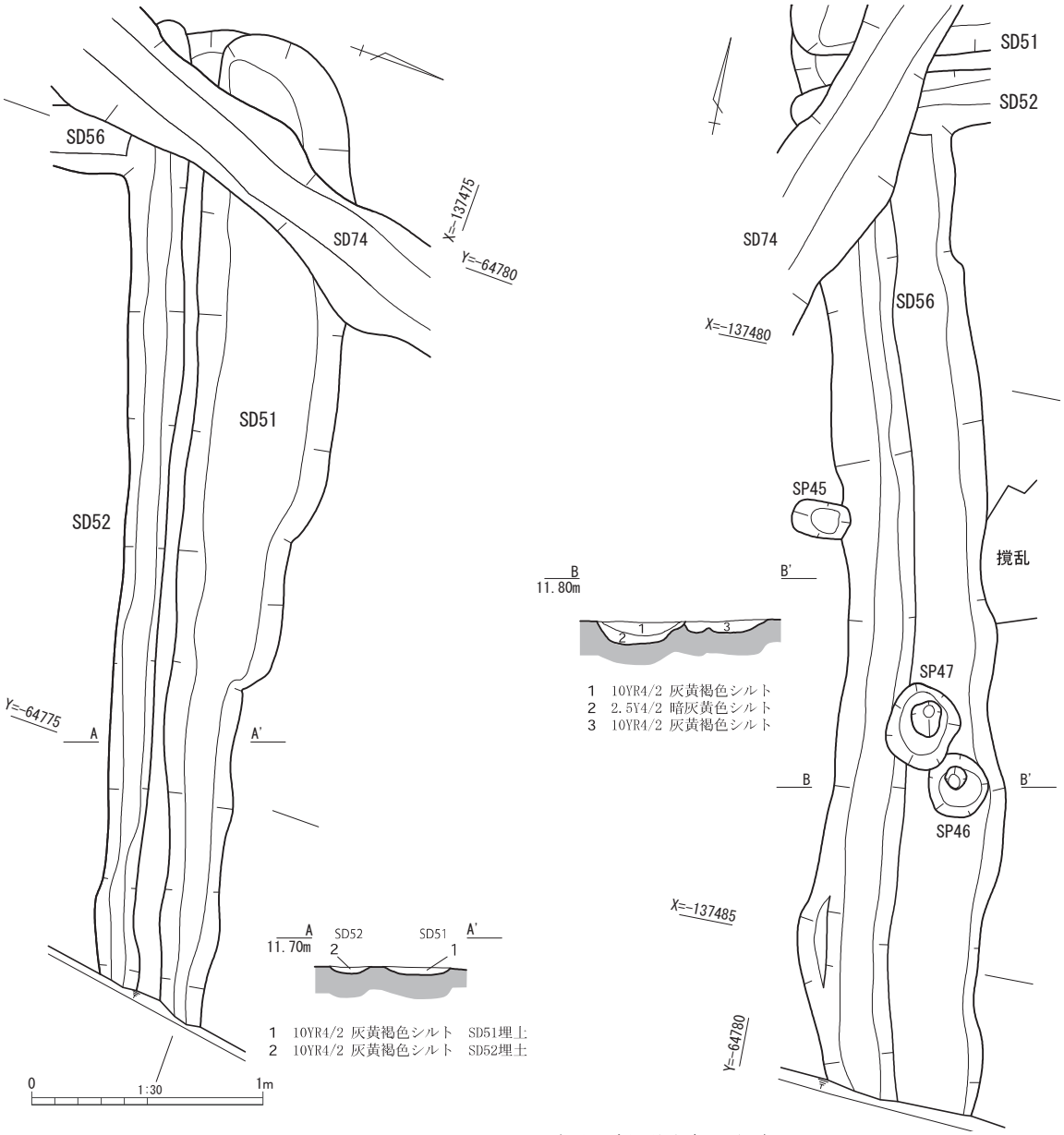


Fig.37　SD51・52・56 平面・断面図（S=1/30）

高差については高くなったり低くなったりの繰り返しで、どちらかというと西側および南側が高い。この遺構からは土師器の破片（Fig.46-132 ～ 134）が出土した。いずれも小破片であることや、SP46・47 などの柱穴と判断できる遺構を壊して形成されていることから、古代以降の遺構と考えられる。また、この溝は SD51・52 が並列するように存在することや SD56 の東側と西側で深さが異なることから、新旧関係は不明瞭ではあるが、少なくとも 2 時期の溝が存在する想定される。

SD74　（Fig.38）　調査区の東側で確認した幅 50 ～ 100 ㎝、深さ 45 ～ 53 ㎝の断面が箱型から逆台形の N-20°　82′　-E 振れる素掘りの溝である。調査区の南端付近での N-39°　14′　-E の振れに変化し 2.6 m南へ進んだところで、さらに N-9°　34′　-E の振れに変化して調査区外へ伸びる。溝底面の比高差は 4 ㎝で北から南へ傾斜する。堆積の上位はシルトを主体とし、下層はシルトと細粒砂もしくは中粒砂の互層である。遺物の出土はなかった。また、この溝は北から南へ直線的に掘られているが、調査区の南端付近でズレが生じている。このことは北側から南側へ掘削したのではなく、北側と南側で分割して掘削した可能性を示していると考えられる。

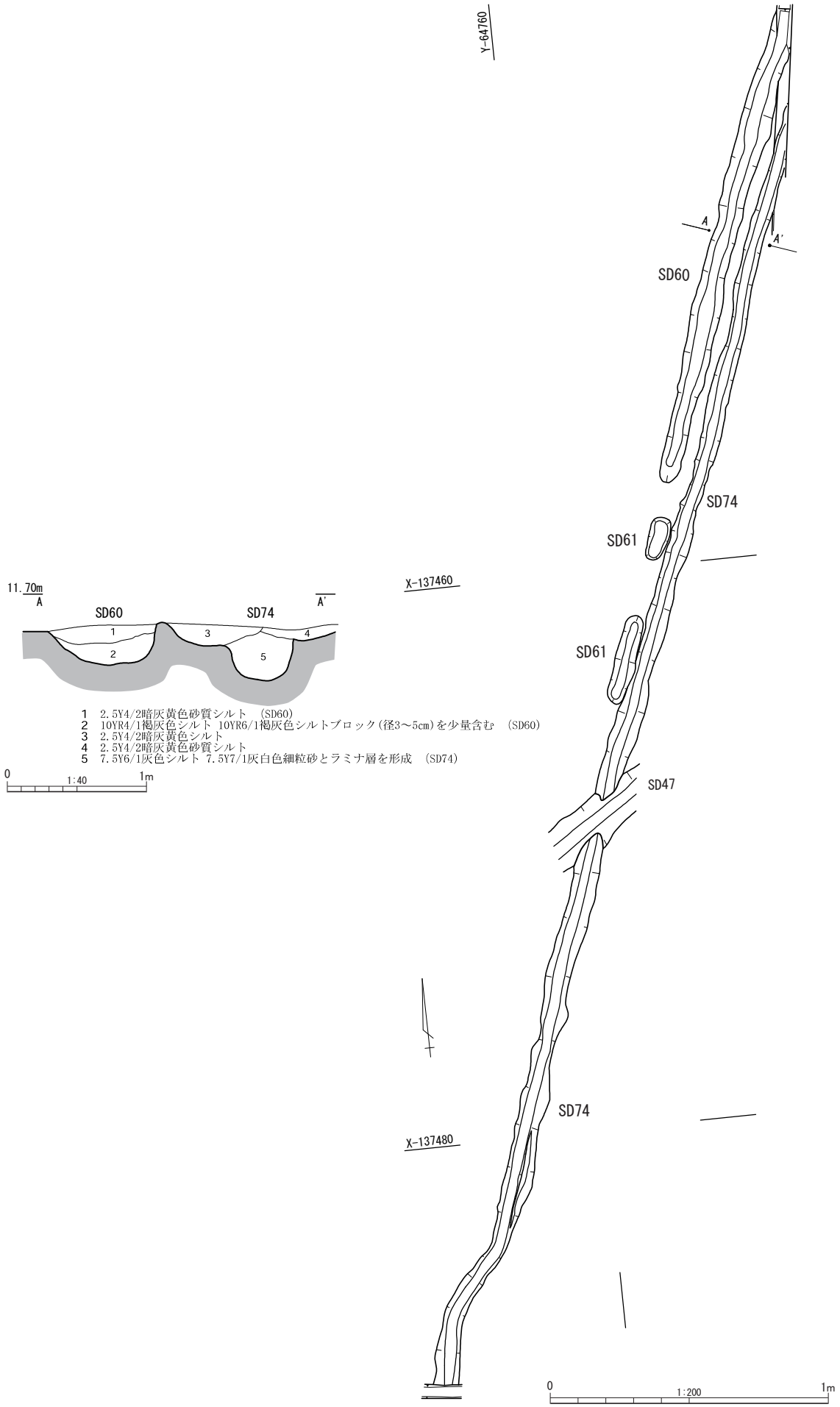


Fig.38 SD74 平面図 (S=1/200)・断面図 (S=1/40)

4. 出土遺物

(1) Ⅰ区出土遺物

Ⅰ区では、6 世紀代を中心とする土師器の小型丸底壺や高坏・須恵器の坏身・坏蓋などが出土している。

SK7 (Fig. 39) 1 は土師器の小型丸底壺である。

SD36 (Fig. 39) 2 は須恵器の坏蓋でツマミのないものである。7 世紀のものである。

SD43 (Fig. 39) 3 ～ 5 は土師器の高坏である。3 は有稜高坏の坏部、4 は坏底～脚部片、5 は屈折脚高坏の脚～裾部である。

SD30 (Fig. 39) 6 は土師器の壺で、体部片である。7 は須恵器の坏蓋で、ツマミのないものである。6 世紀後半のものである。

SD31 (Fig. 39) 8 は土師器の高坏で、脚～裾部片である。その形状から屈折脚高坏である。

遺構外 (Fig. 39) 9 は土師器の屈折脚高坏で、脚～裾部片である。10 は須恵器の瓿で肩部片である。円孔の一部が残存する。11 は坏蓋で 6 世紀前半のものである。12 は坏身で 6 世紀のものである。13 は内耳鍋の耳部の破片である。

(2) Ⅱ区出土遺物

Ⅱ区の 1 面目では、掘立柱建物を構成する柱穴を中心に、6 世紀代の土師器甕・高坏や須恵器の瓿などが出土している。2 面目遺構では、時期を確認できる遺物は出土しなかった。

SP1 (Fig. 40) 14 は土師器の低脚高坏で、坏底～脚裾部片である。脚裾はやや広がる。

SP11 (Fig. 40) 15 は土師器の高坏で坏部片である。坏部内面に横方向のハケがある。外面は縦方向にナデがある。

SP5 (Fig. 40) 16 は土師器の甕で口縁～頸部片である。

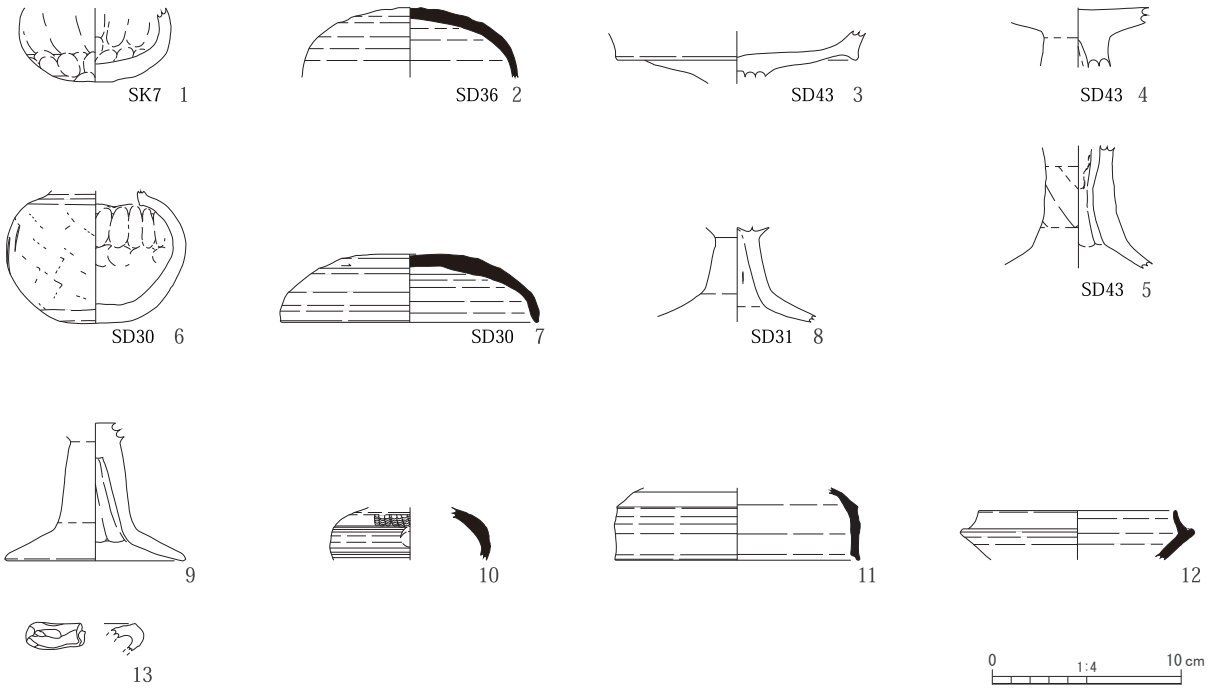


Fig. 39 Ⅰ区出土遺物

SD2　(Fig.40)　17 は須恵器の瓶で底部を欠く頸～体部片である。肩部と腰部に 2 条の沈線があり、その間に 5 条の波状文が櫛描きされる。

SD21　(Fig.40)　18 は口縁部片で甕のものと考えられる。

(3) Ⅲ区出土遺物

Ⅲ区では、掘立柱建物や溝から 6 ～ 7 世紀の土師器の甕・高坏、須恵器の坏身・坏蓋・高坏などが出土する。

SP16　(Fig.40)　19 は土師器の甕で頸部片である。外面の頸部に縦方向のハケの痕跡がある。内面に横方向のハケがある。頸部より下は右上がり、頸部より上は右下がりである。

SD5　(Fig.40)　20 は土師器の甕で外面に縦方向のハケ、内面は摩滅のため不明瞭であるが底部にユビオサエの痕跡がある。21 は台付甕の脚台部片で裾が屈曲する。外面に縦方向のヘラミガキが裾部の屈曲するところまである。22 ～ 24 は土師器の高坏である。22 は脚～裾部片で、その形状から屈折高坏である。23 は坏底～脚部片で脚部外面に縦方向のハケ、内面は板状工具で斜方向に

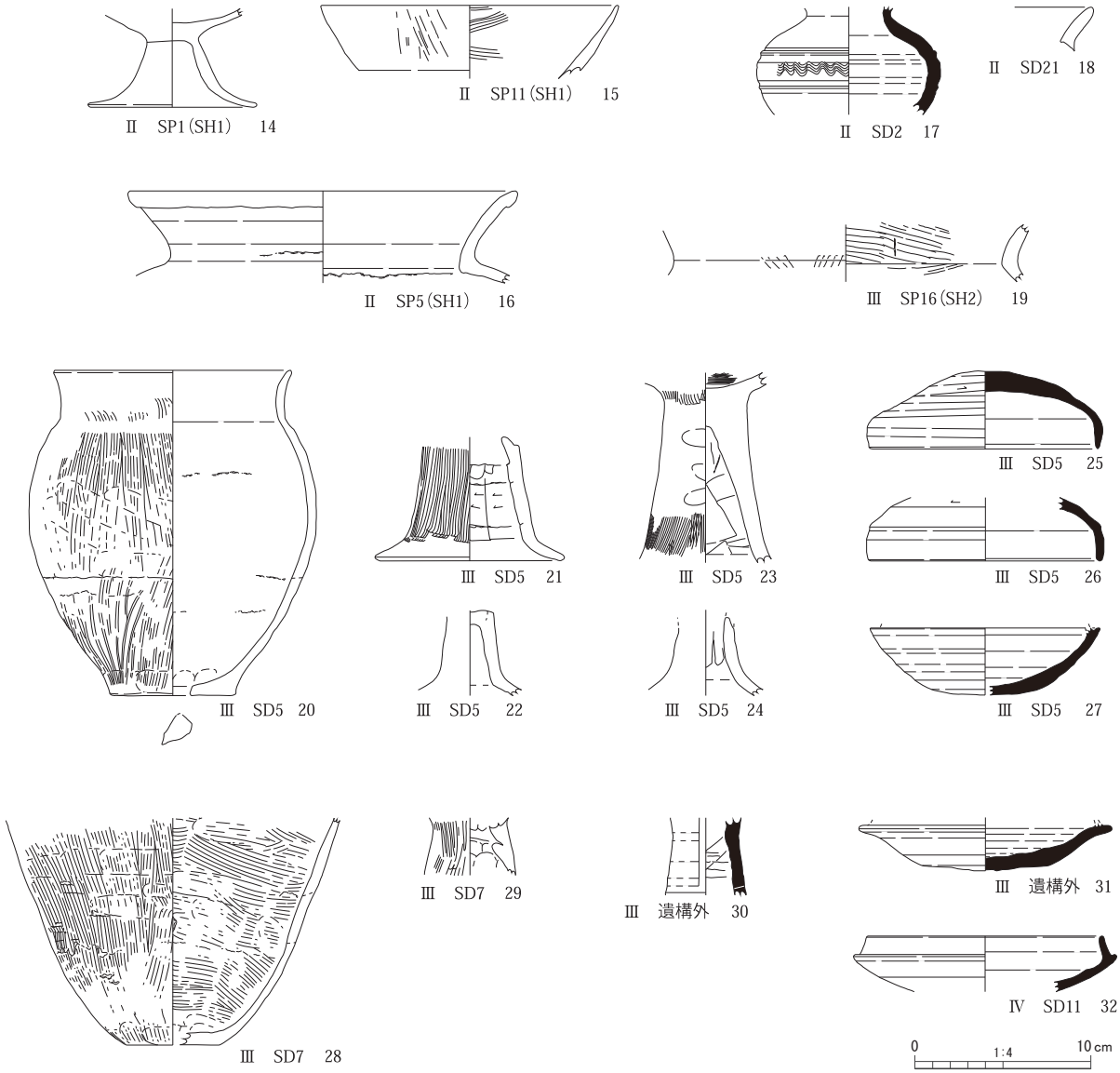


Fig.40　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物

ナデる。坏底部にハケがある。24 は脚部片で裾部が広がる低脚高坏である。25・26 は須恵器の坏蓋で、6 世紀のものである。27 は坏身で 7 世紀のものである。

SD7 (Fig.40) 28 は土師器の甕で底～体部片である。平底の甕で外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。29 は土師器の台付甕で脚台部片である。外面に縦方向のハケがある。

遺構外 (Fig.40) 30 は須恵器の高坏で脚部片である。長方形のスカシが 2 方向に存在する。31 は須恵器の坏身で 7 世紀のものである。

(4) Ⅳ区出土遺物

Ⅳ区からは溝から須恵器の坏身や少量の土師器片が出土した。小破片が多く、図化できるのは須恵器の坏身 1 点のみである。

SD11 (Fig.40) 32 は須恵器の坏身で 6 世紀のものである。

(5) Ⅴ区出土遺物

Ⅴ区では、6 ～ 7 世紀代の土師器甕・甑・高坏、須恵器坏身・坏蓋・高坏、石製模造品の勾玉・双孔円板、金銅製品の耳環などが出土している。主に出土しているのは SD47 である。また、遺構に伴うものではないが、古代の遺物も出土している。

SP36 (Fig.41) 33 は土師器の甕で口縁部片である。

SX8 (Fig.41) 34・35 は土師器の甑の把手部である。36・37 は須恵器の坏蓋である。37 は口縁部にカエリのあるものである。38 は坏身である。36 ～ 38 は 7 世紀のものである。

SX10 (Fig.41) 39 は須恵器の坏蓋で 6 世紀のものである。40 は坏身で 7 世紀のものである。

SX11 (Fig.41) 41・42 は土師器の甕の口縁部片である。42 は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。47 ～ 50 は土師器の高坏である。47 は坏底～裾端部片で、裾端部がやや反りあがる。48 ～ 50 は脚部片で、外面に縦方向のナデがある。43･44 は須恵器の坏蓋である。43 は 6 世紀、44 は 7 世紀のものである。45 は須恵器の坏身で 6 世紀のものである。46 は須恵器の高坏で坏部片である。51 は須恵器の高坏で坏底～脚部片である。

SX14 (Fig.41) 52 は須恵器の坏蓋である。外面頂部に「ー」のヘラ記号がある。7 世紀のものである。

SK15 (Fig.42) 53 は土師器の高坏であり、脚裾端部片である。

SK18 (Fig.42) 54・55 は土師器の高坏である。54 は有稜高坏である。55 は脚～裾端部片で裾部がやや広がる。54 とほぼ同じ大きさであるため、これも有稜高坏であると考えられる。

SK20 (Fig.42) 56 は土師器の甕で口縁～体部片である。口縁端部を欠く。外面体部は縦方向のハケ、頸部付近は横方向のハケののちナデ消している。内面は横方向のハケがある。57 は須恵器の坏身である。外面底部に「入」状のヘラ記号がある。7 世紀のものである。

SK22 (Fig.42) 58 は須恵器の高坏で脚部片である。脚部を 2 分する部分に 2 条の沈線があり、その上下に長方形のスカシが 2 段ある。このスカシは 2 方向に存在する。

SK24 (Fig.42) 59 は土師器の壺で底部片である。

SK31 (Fig.42) 60 は須恵器の坏身で 6 世紀のものである。

SK32 (Fig.42) 61 は土師器の甕で平底の底部～体部片である。底部外面に葉脈圧痕がある。外面に斜方向から縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。

SP58 (Fig.42) 62 は土師器の甕で口縁～頸部片である。外面頸部付近に縦方向のハケ、内面の

同位置に横方向のハケがある。

SP83　(Fig.42)　63は土師器の壺で頸～肩部片である。外面には摩滅により判断しがたいが斜方向のハケと思われるもの、内面には斜方向のハケののち縦方向のナデがある。64は土師器の甕で底部を欠く。外面に斜方向のハケ、内面には横方向から斜方向のハケがある。

SD47　(Fig.43～45)　65～76は土師器の甕である。65は口縁～体部片である。外面に縦～斜方向のハケ､内面に横～斜方向のハケがある。66は口縁～体部片である。外面体部に横方向のハケ、頸部に縦方向のハケ、内面口縁～頸部に横方向のハケ、体部に横もしくは斜方向のナデがある。67は口縁～体部片である。外面の頸～体部に縦方向のハケ、内面の体部に斜方向のハケ、頸部に横方向のハケがある。外面にはススが付着するため、煮沸具として使用していたとみられる。68は口縁～頸部片である。外面の頸部に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。69は口縁～体部片である。ユビオサエ成形後、外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケがある。70はやや小型のものでひずんでいる。外面に縦方向のハケ、内面に斜方向もしくは横方向のハケがある。71は口縁～頸部片である。72は口縁～頸部片である。頸部内面に縦方向のハケがある。73は口縁～体部片である。74は口縁～頸部片である。頸部内面に横方向のハケがある。75は口縁～頸部片である。外面に横方向のナデ、内面口縁部に横方向の細かいハケの後、頸部から口縁端部にかけて粗

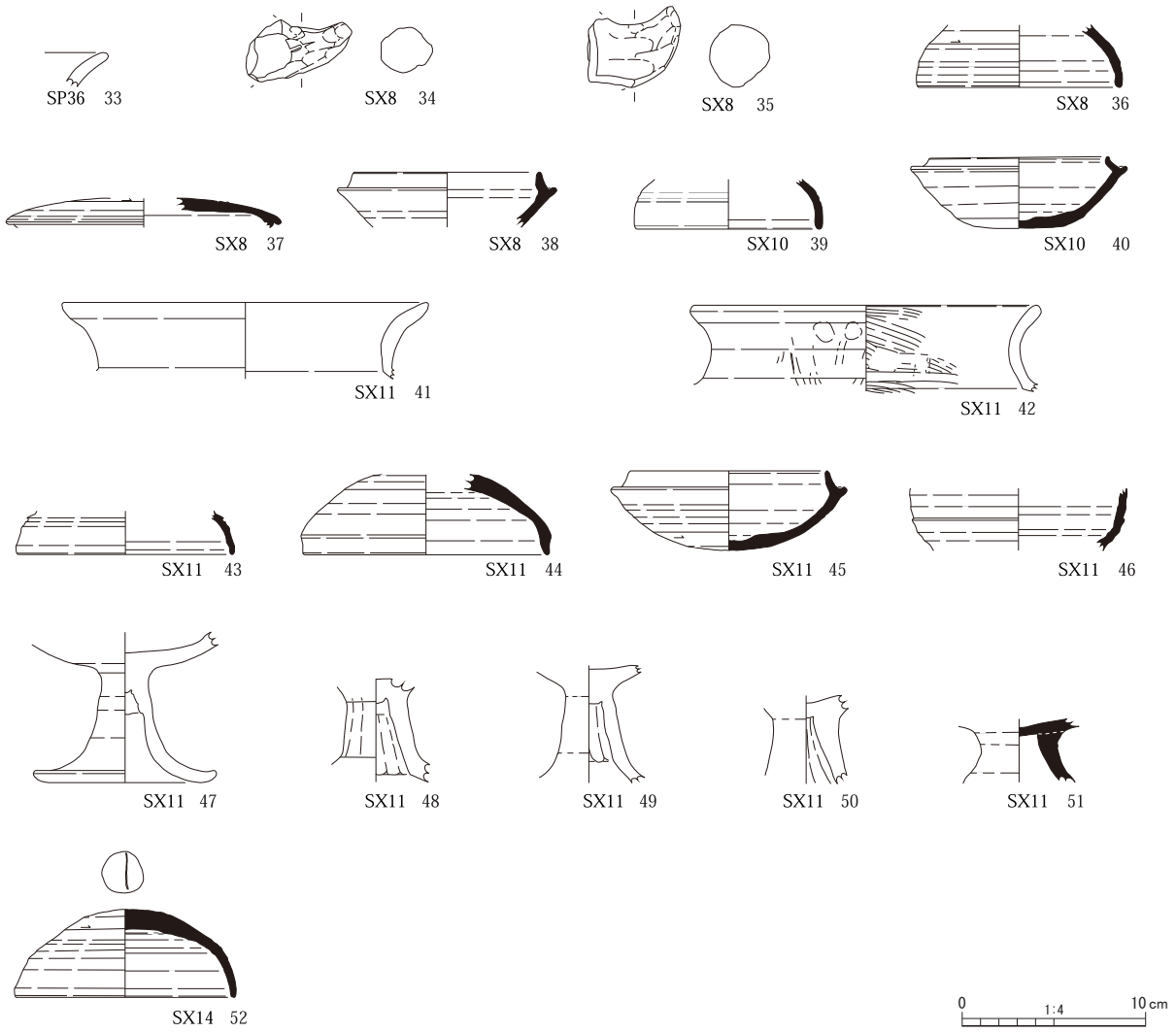


Fig.41　Ⅴ区小穴群・SX出土遺物

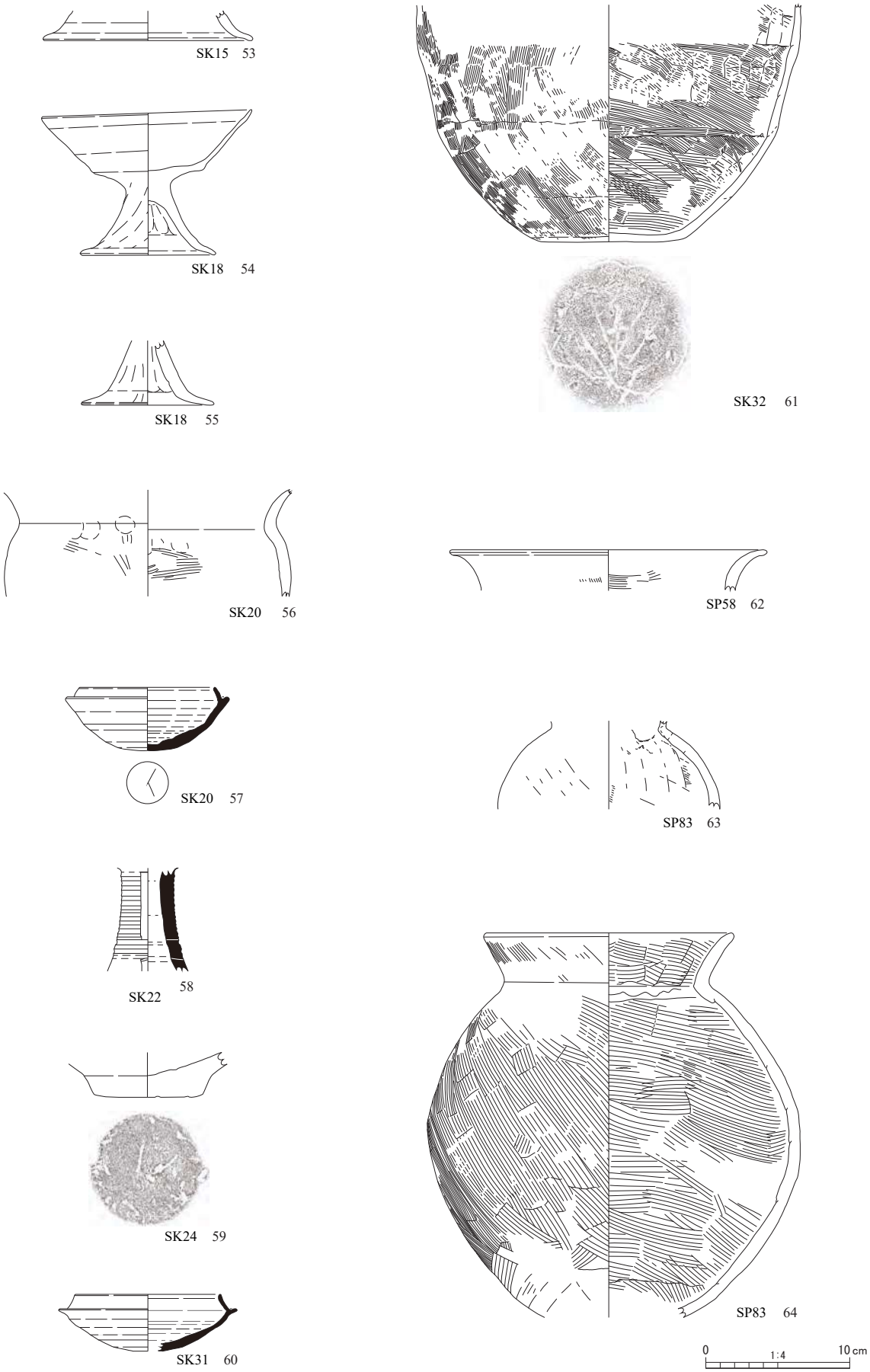


Fig.42　Ⅴ区小穴・土坑出土遺物

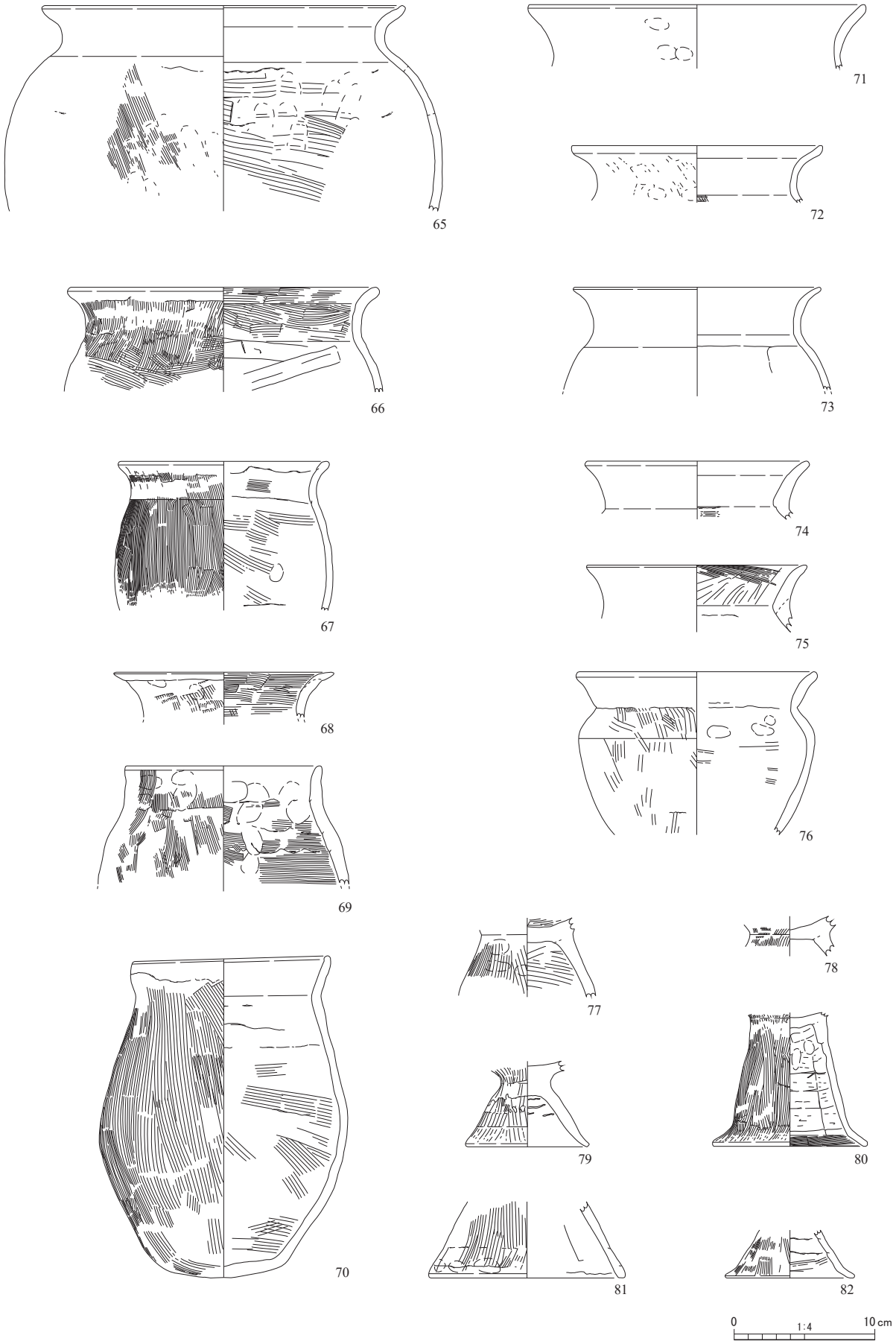


Fig. 43　V区 SD47 出土遺物 (1)

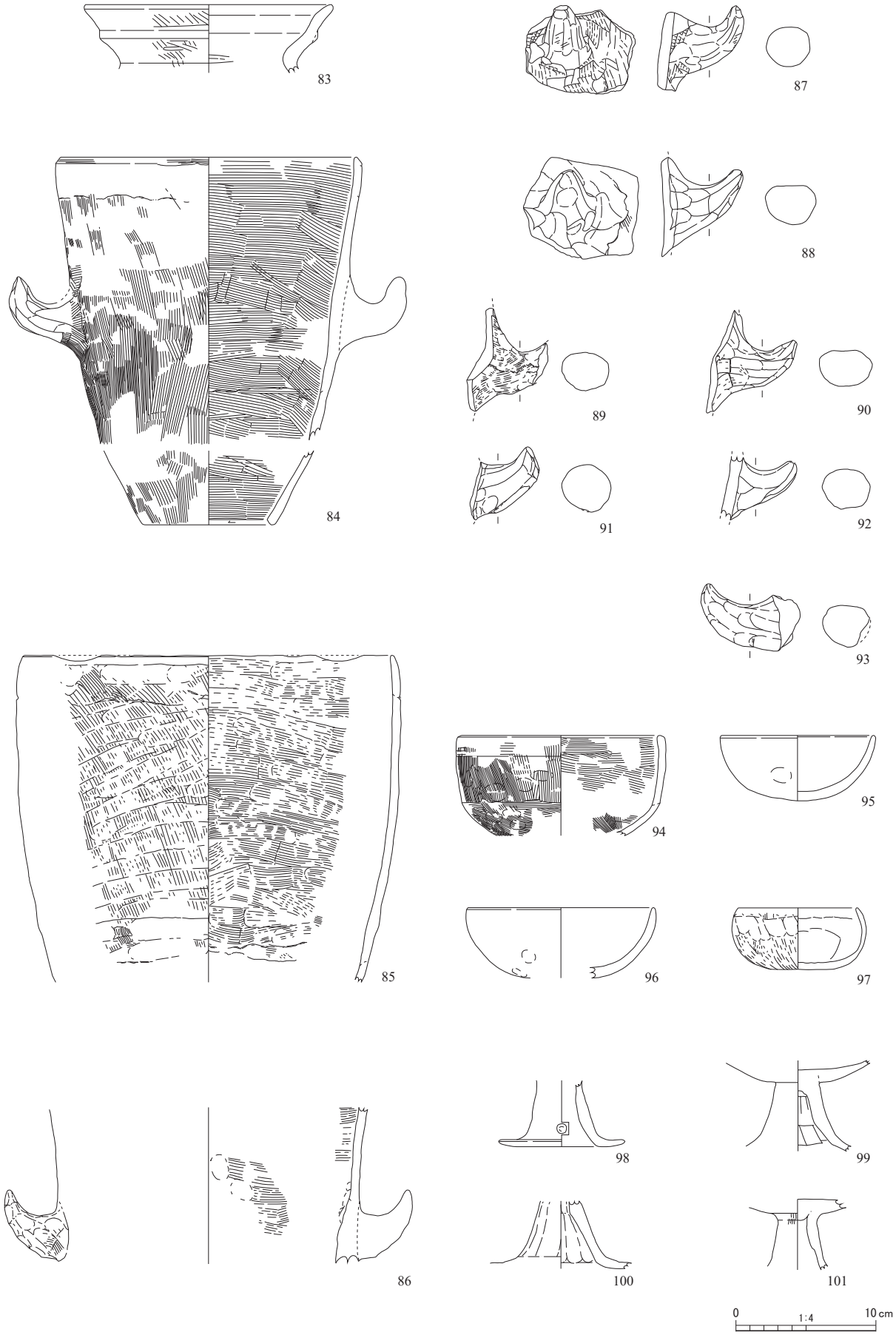


Fig. 44　Ⅴ区 SD47 出土遺物 (2)

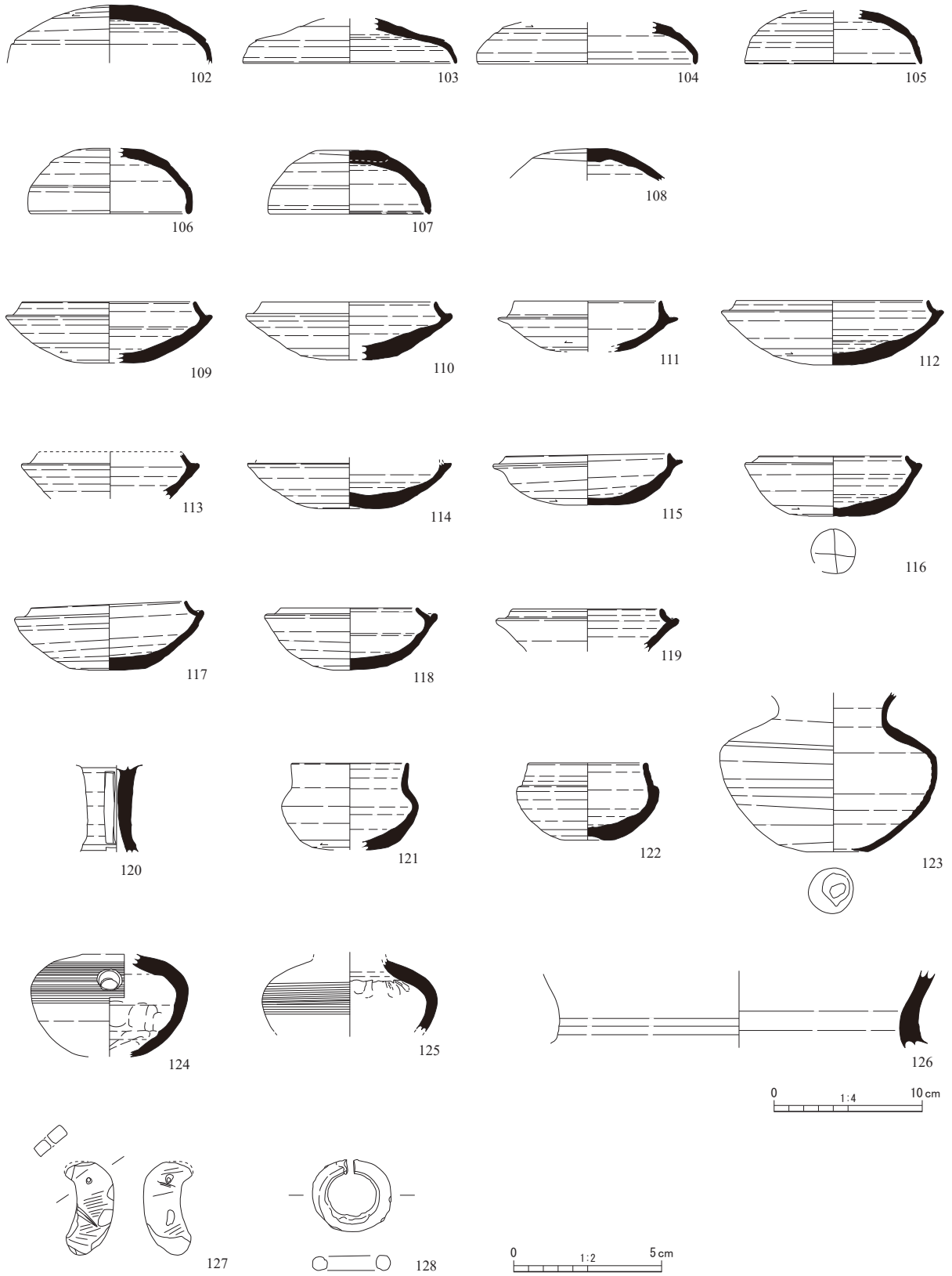


Fig. 45　V区 SD47 出土遺物 (3)

いハケがある。76 は口縁～体部片である。外面に縦方向の粗いハケ、内面に横方向のハケがある。

77 ～ 82 は台付甕である。77 ～ 80 は底～脚台部片、81・82 は脚台端部片である。77 は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。78 は外面に縦方向のハケがある。ススが付着するため、煮沸具として使用していたとみられる。79・80 は外面に縦方向のハケがある。81 は外面に縦方向のハケ、内面に縦方向の板ナデがあり、端部は内側に折り返して成形する。82 は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがあり、端部は外側に広がる。

83 は二重口縁壺で口縁部片である。外面に斜方向のミガキが所々に残存する。

84 は底のない甑である。外面には縦方向のハケ、内面には横～斜方向のハケがある。口縁～体部までの部分と底の部分の間に接点は存在しないが、出土位置や材質・作成方法から同一のものとして図上にて復元してある。別作り把手を甑体部に張り付けたのち接合部分にハケをする。85 は土師器の甑である。口縁～体部片で、外面に縦～斜方向のハケ、内面に横方向のハケがある。86 は把手～体部片である。外面は摩滅が著しく把手の接合部分にハケが残っていることから 84 と同様の作り方であると考えられる。内面に横方向のハケがある。87 ～ 93 は把手である。87・88・89 は体部に別作りの把手を貼り付けている。87・89 は、貼り付け後に 84 と同様にハケをする。89 は先端部が欠損する。

94 ～ 97 は鉢である。94 は口縁～底部片で、外面底部に横もしくは斜方向、体部に縦方向、口縁部に横方向のハケがある。内面に横方向のハケがあり、底部には縦方向のハケもある。95・96 も口縁～底部片で、底部に丸みのある小型のものである。97 は外面に縦方向のハケがある。内面に工具痕が残存する。98 ～ 101 は土師器の高坏である。

98 は低脚高坏の脚～裾部片である。裾近くの脚部に穿孔していない円形の凹みがある。裾部は屈折する。99 は坏底～脚部片であり、外面の摩滅が著しいため脚部にナデがあることがわかるだけである。100 は脚～裾部片であり、外面に縦方向のナデがある。101 は坏底～脚部片であり外面脚部と坏部の接合部分に縦方向のハケの痕跡が若干残る。

102 ～ 108 は須恵器の坏蓋である。102 ～ 107 は 6 ～ 7 世紀のものである。108 は頂部片である。109 ～ 119 は須恵器の坏身である。116 は底部外面に「+」のヘラ記号がある。109 ～ 114 は 6 世紀後半のものである。115 ～ 119 は 7 世紀のものである。120 は須恵器の高坏で脚部片である。脚部を 2 分する部分に浅い沈線が 1 条ある。この沈線の上下に長方形のスカシが 2 段ある。このスカシは 2 方向に存在する。

121・122 は無頸壺である。122 は底部外面中央が凹む。123 は須恵器の短頸壺である。124 は瓶で体部片である。肩部に横方向のカキ目があり、円孔が開けられている。125 は壺で体部片である。肩部に横方向のカキ目がある。瓶の可能性がある。126 は須恵器の甕で頸部片である。

127 は石製模造品の勾玉である。滑石製で両面ともに擦痕が残存する。128 は金銅製品の耳環である。

SD45　(Fig. 46)　129 は土師器の台付甕の口縁部片である。外面頸部にタタキの痕跡が残存する。130 は甕の口縁部片である。外面の頸部に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。131 は甑の把手である。

SD52　(Fig. 46)　132 は須恵器の壺の底部片である。貼り付け高台である。

SD56　(Fig. 46)　133・134 は須恵器の坏身である。133 は 6 世紀のものである。134 は須恵器坏身である。

遺構外　(Fig. 47)　135 ～ 138 は土師器の壺である。135 は口縁～体部片で外面の頸～体部にか

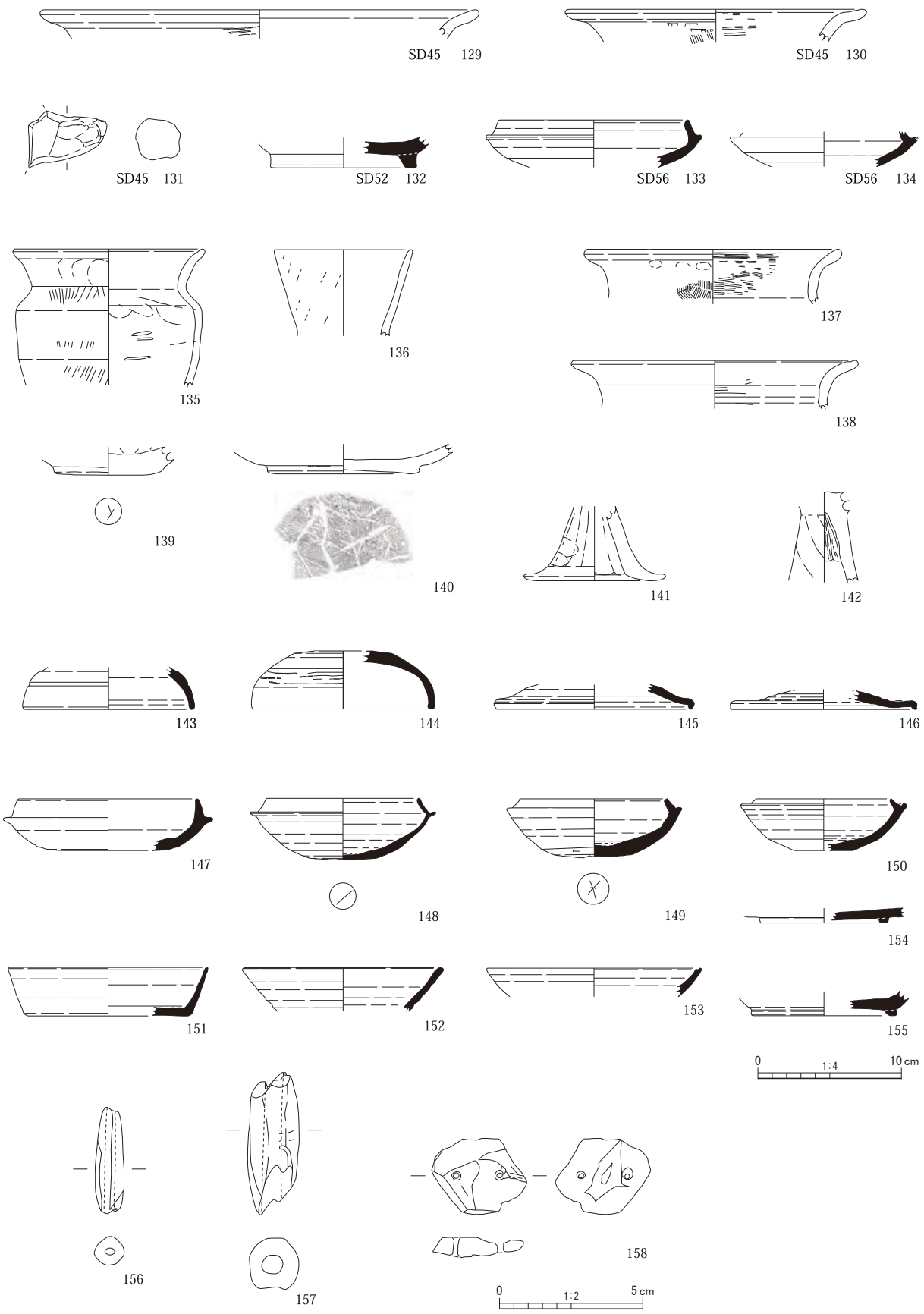


Fig.46　Ⅴ区 SD45・52・56・遺構外出土遺物

けて縦方向のハケ、内面はナデがある。136 は直口壺の口縁部片である。137 は底部片で底部外面に「X」のヘラ記号が残存する。138 は底部片で底部外面に葉脈圧痕が残存する。139・140 は土師器の甕であり、口縁～頸部片である。139 は外面頸部に縦方向のハケ、内面口縁部に横方向のハケがある。140 は内面頸部に横方向のハケが残存する。141・142 は土師器の高坏である。141 は低脚高坏の脚～裾部片であり裾部は屈折する。142 は坏底～脚部片であり外面脚部に斜方向のナデがある。

143 ～ 146 は須恵器の坏蓋である。143 は沈線が 1 条ある。145 は、平たい擬宝珠状のツマミがつくもの。やや器高が高い。146 は平たい擬宝珠状のツマミがつくもの。143・144 は 6 世紀後半、145・146 は古代のものである。147 ～ 154 は須恵器の坏身である。148 は底部外面に「ー」のヘラ記号がある。149 は底部外面に「X」のヘラ記号がある。151 はいわゆる箱坏で高台のないもの。152 は口縁部片である。154 は底部片で貼り付け高台である。147 は 6 世紀 148・149 は 6 ～ 7 世紀、150 は 7 世紀、151・154 は古代のものである。153 は須恵器の皿の口縁部片であり、内外面に重ね焼き時の溶着防止剤の跡がある。155 は須恵器の高台部片であり、壺の底部と考えられる。156・157 は土錘である。156 は細身のもので、157 は 156 に比して太く大きいものである。158 は石製模造品で双孔円板の破片である。両面とも剥離が多く当初の面の残存が少ない。残存する面に擦痕がある。

第３章　後　論

今回の恒武西宮遺跡の発掘調査での特徴は、中世以降に関わる遺物の出土が極めて少なかった点である。これは当該地が畑地であるため、農地の造成時に結果として除去された可能性が高いと思われる。また、遺構についても確認し得ていない。また古代の遺物も散見するが、これも遺構に伴ったものではなく、攪乱や耕土中から出土したものであった。古代の遺構についても確認し得ていない。

さて、今回の調査で確認した遺構のうち、SD47 を中心とした古墳時代後期のものとそれに伴う掘立柱建物（小穴群）が主要なものである。また、平成８～10 年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った調査でも確認されているが、当該地区には概ね北東から南東へ流れる溝が複数存在し、それらの溝の間に掘立柱建物が配置され利用されていた。このことは今回の調査でも不明瞭ながら、Ⅱ区の SH1、Ⅲ区の SH2、Ⅴ区の小穴群として確認している。

(1)　溝状遺構の時期について

ここでは、今回の調査で確認した遺構の時期について溝状遺構を中心に若干の考察を加えたい。

まず､全体の中で最も古い時期（Ⅰ期）に属する遺構としてはⅤ区で確認した SD74 があげられる。これは SD47 と重複し、その新旧関係からそれよりも古いことが分かっている。但し、SD74 からは遺物が出土していないため、時期について確実なことを述べることは困難である。

そこで、SD74 と関連しそうな遺構を検討してみたところ、その東側にほぼ同じ方向の SK18 が存在することがわかる。ここから土師器の有稜高坏がほぼ完形の状態で出土していることから、SD74 もほぼ同時期に存在していたと推察できる。そのため、SD74・SK18 は古墳時代（5 世紀）の遺構と考えている。この SD74 と関連して SD60 ～ 64・66・84 がほぼ同一方向を向くことを指摘しておく。そのうち SD60・SD61 は SD74 の西側に近接する。そのため、並列していた可能性が高い。この溝からも遺物が出土していない。但し、SD60・SD61 は SD74 に比べて浅いものである。また、他の溝についても並列していた可能性もあるが古墳時代の土師器の小片が出土するのみであることから、時期について確定できない。

次にⅡ期として、先述した SD47 があげられる。この溝は今回の調査で、最も主要な遺構の一つである。この遺構は北東から南西へ流れる溝で、土層観察から大きく 3 層に分かれる。埋まり始めた緩やかな流れの時期（下層）、やや水量の増した砂を伴う堆積時（中層）、そして最終段階の緩やかな流れから澱んだ時期（上層）に分けられる。下層から、金銅製の耳環や須恵器坏身・瑾、土師器片などが出土し、須恵器坏身が目立つ。中層からは土師器の小片が出土するが多くはない。上層からは滑石製の石製模造品の勾玉、土師器の甑・甕などが出土し、土師器の甑・甕などの煮沸具が目立つ。下層の時期はこの溝が本質的に機能していた時期のものであり、出土位置はやや中心部による傾向がみられる。しかし、上層の時期には、出土位置が北に寄る傾向があり、より中心側にある遺物の上に北側の遺物がのるような状態で出土している。そのため、上層の遺物は溝の北側から入れられたと考えられる。但し、石製模造品はその中でも最も上層で確認し、溝のやや中心部に寄った場所で出土した。このように上層と下層では出土状況に違いが存在するが遺物の時期としては大きな差はなく、下層から出土した瑾がやや古い様相を示すが、概ね古墳時代後期の 6 ～ 7 世紀のものである。この遺構に関連する溝状遺構はⅤ区の SD45、Ⅰ区の SD43、Ⅲ区の SD5、Ⅳ区の

SD11である。このうち、遺構の配置状況からSD43とSD47が、SD5とSD11が同一遺構と判断できる。そしてこれらの溝は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が確認したSR4･5がSD43とSD47と、SR3がSD5とSD11と同一遺構であると判断できる。また、SD45については同一遺構の存在については過去の調査では確認しえていないと思われる。また、SD46・48・50・80についてはSD47に並列するように確認できたことから、同時期の遺構と推察することも可能であるが、その関係性については不明である。

最も新しい溝（Ⅲ期）が、Ⅴ区で確認したSD51・SD52・SD56である。これは「L」字状の溝で掘削後の状況から2本の溝が交錯している可能性が考えられるが、掘削時の平面観察や土層観察からは、その状況を確認しえなかった。この溝の下から、柱穴と判断できる小穴を確認していることから、後述する小穴群の時期より新しいと判断した。この溝の時期については、古墳時代の土師器片

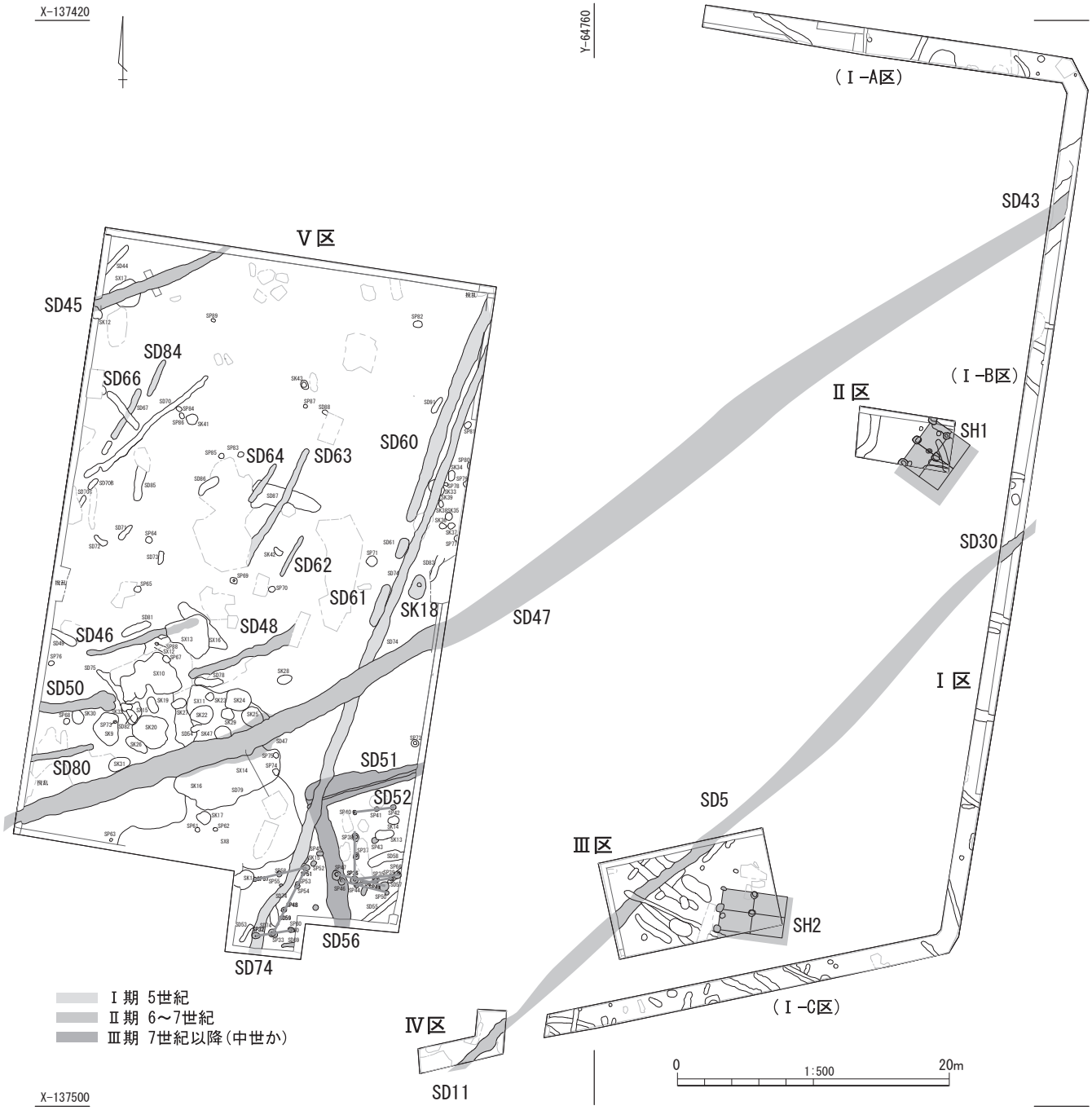


Fig.47　恒武西宮遺跡21次調査主要遺構配置図（S=1/500）

が少量出土しただけで詳細な時期については不明である。古墳時代以降の溝と述べるにとどめておきたい。また、SD46・48・50・80 についてはSD47 に並列するように確認できたことから、同時期の遺構と推察することも可能であるが、その関係性については不明である。

(2)　掘立柱建物の時期および小穴群の組み合わせ

掘立柱建物については、Ⅱ区の SH1、Ⅲ区の SH2 を確認している。その他にⅤ区で柱穴と考えられる、小穴群を確認している。SH1 は 5 基の柱穴から成立すると考えているが、西側で確認した 3 基と東側で確認した 2 基の間にズレが生じていることが確認できるため、別々の遺構である可能性もある。しかし、西側の 3 基の西側には柱穴と判断できる遺構を確認しなかったので、5 基の柱穴を一連の遺構として判断している。これらの抜き取り跡から土師器の甕や高坏が出土し古墳時代の遺構と判断した。SH2 も 5 基の柱穴から成立するが、SH1 よりも柱穴の配置に規則性があり、掘立柱建物が存在したと判断できる。SH2 については出土遺物がないため、時期の決定は困難である。

Ⅴ区で確認している小穴群は SP36 と SP44、SP47 と SP46、SP53 と SP54 がそれぞれ重複していることなどから少なくとも 2 時期以上の遺構が重複していると判断できる。また、上記の小穴などの南側にあるものは、柱痕の存在が確認でき大きく深い傾向にあるのに対して、SP40 ～ 42、51・57・58 などの北側あるものは小さく浅い傾向にある。このことや遺構配置から判断して、各々の遺構の組み合わせについてはその判別が極めて困難であった。図にはいくつかの組み合わせ案を示してみたが、掘立柱建物とするには判断材料が限られたため、柵列状のものと判断した。それらは 4 種類の方向性が見えるようである。さて、これらの小穴群の時期についてであるが、SD47 と SD5・11 に区画された部分に立地していることから関連性が考えられる。また、SP32 が SD74 の埋土の上から掘られていることや SP46・47 を削るように SD56 が設置されていることから SD74 と SD56 の間の時期と判断できる。この間の遺構として SD47 が存在するため、これらの小穴群も SD47 とほぼ同時期ものであろうと考え、6 ～ 7 世紀頃の小穴群であると推察した。

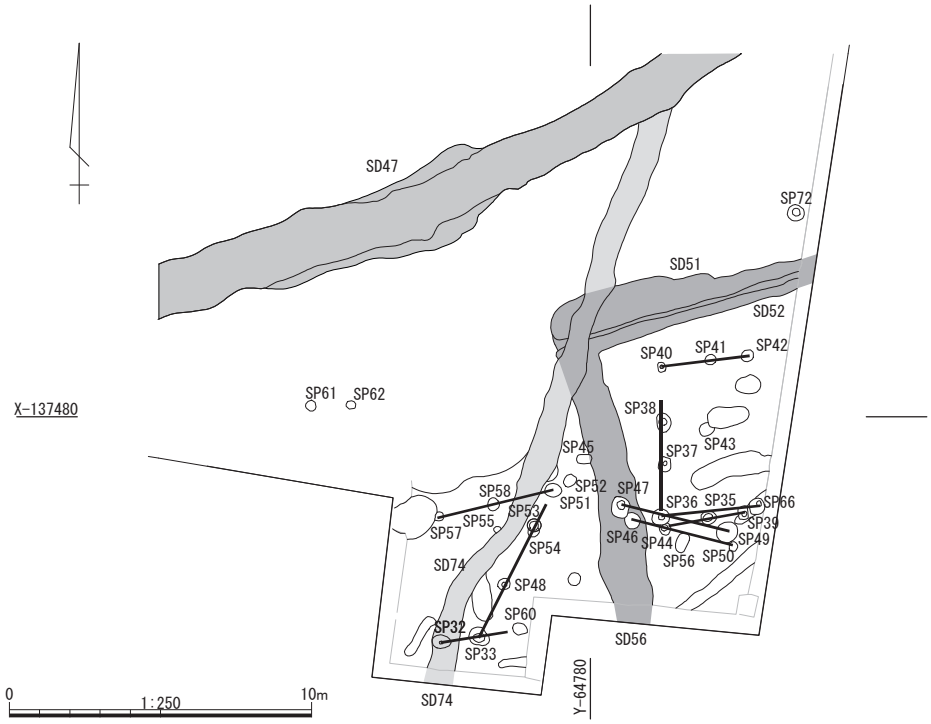


Fig.48　小穴群配置案 (S=1/250)

第４章　総　括

(1)　古墳時代前期～中期

恒武西宮遺跡では古墳時代前期から遺構が確認されているが、確認された箇所は遺跡の東側に集中している。遺跡の西側にあたる今回の調査箇所では、前期の遺構・遺物は検出されなかった。

古墳時代中期の遺構としては、Ｖ区の SK18 が確認できた。SK18 からは 5 世紀の土師器の高坏がほぼ完形で出土しており、SK18 と同時期とみられる SD74 などの複数の遺構が、古墳時代中期のものと考えられる。また、古墳時代中期の特筆できる遺物としては、Ｖ区の SD47 で出土した滑石製模造品の勾玉と、Ｖ区表土で出土した石製双孔円盤が挙げられる。山ノ花遺跡１次調査の恒武大溝や恒武西宮遺跡１次調査の SF9 では、滑石製模造品が大量に出土したが、今回の調査区からは前述の 2 点が出土した。SD47 からの出土遺物は古墳時代後期のものが主体だが、溝周辺の集落は古墳時代

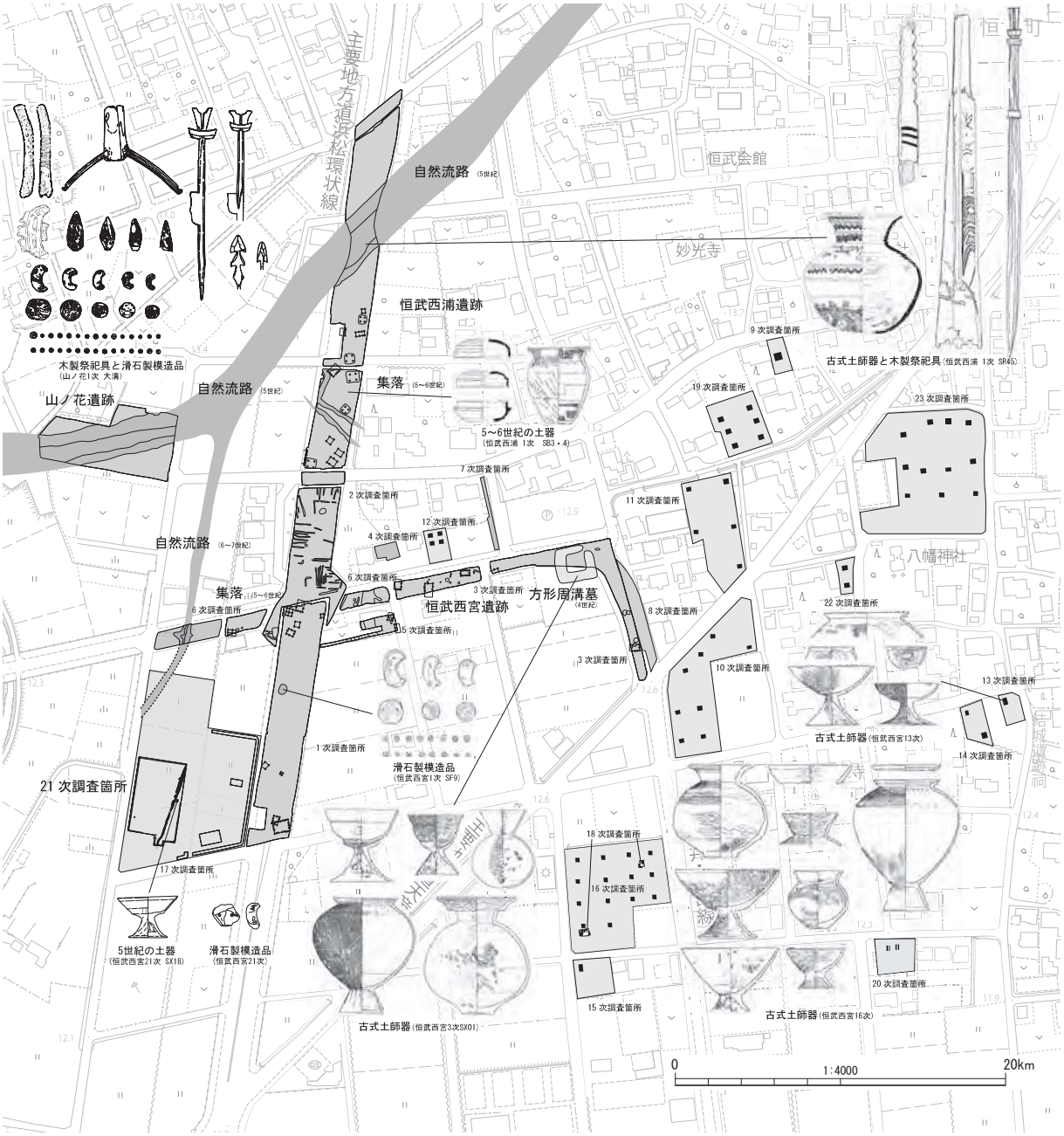


Fig.49 古墳時代前期・中期の様相 (S=1/4000)

中期から存在していた可能性がある。同敷地内で行った予備調査（17 次調査）では、調査箇所全域から 5 世紀代の土師器が出土している。また、今回の調査区の東にある恒武西宮遺跡 1 次調査区では、5 世紀の掘立柱建物跡などが確認されている。21 次調査では古墳時代中期の遺物はわずかであったが、当該地は古墳時代中期においても人々の活動の範囲にあったと考えられる。

(2)　古墳時代後期

全ての調査区で古墳時代後期の遺構を確認できた。遺構は溝（自然流路）、掘立柱建物跡、小穴群などを検出した。SD5・SD11・SD30 や SD43・SD47 は、平成 8 年に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した調査で検出した自然流路の続きと考えられる。これらの溝は北東から南西にかけて検出されており、並行した溝の間に掘立柱建物が配置されている。SD47 からは 6 世紀～ 7 世紀の須恵器、土師器等が豊富に出土した。須恵器の器種は坏身、蓋、はそうが多く、土師器は甕や甑が多い。また、SD47 の下層から耳環が一点出土していることが注目される。恒武西宮遺跡周辺で出土する祭祀遺物は古墳時代中期のものが多いが、後期においても遺跡内で祭祀が行われていた

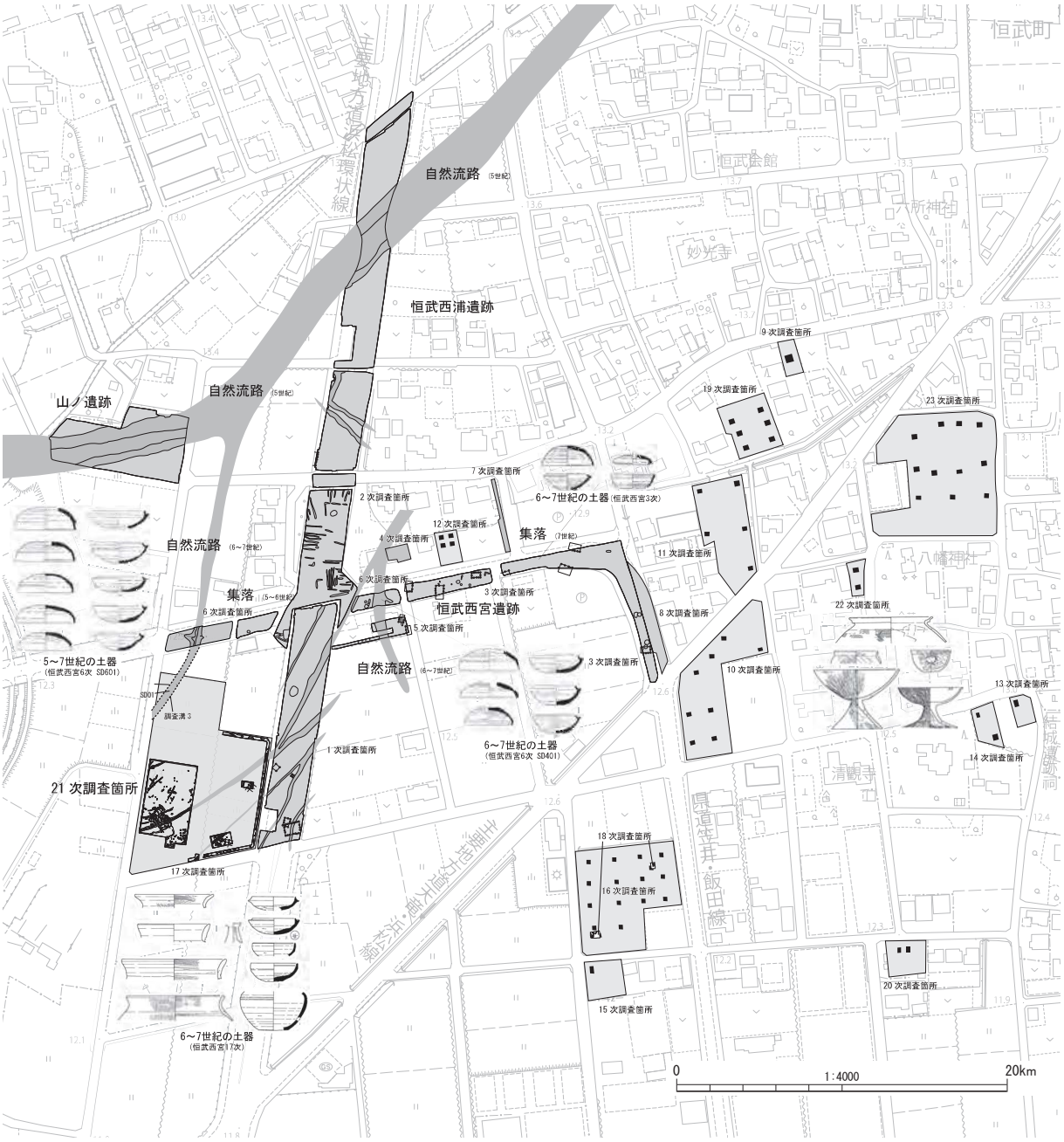


Fig.50　古墳時代後期の様相 (S=1/4000)

可能性がある。

掘立柱建物跡は、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅴ区で検出された。柱穴とみられる小穴内からは、6 世紀～ 7 世紀の土師器片などが出土している。過去の発掘調査では、6 次調査Ｅ区周辺に 5 世紀～ 6 世紀の集落、6 次調査 D 区 SD401 以東に 7 世紀代の集落があったとみられている。また、1 次調査区南端では、古墳時代中期～後期の掘立柱建物跡が確認されている。今回検出された掘立柱建物跡は、6 世紀～ 7 世紀のものとみられ、Ⅴ区 SD47 以南にも集落域が形成されていたと考えられる。また、Ⅴ区で検出された掘立柱建物跡の中には位置が重複しているものがあり、建物には少なくとも 2 時期の変遷があるとみられる。掘立柱建物の配置にはならないが一連のものとみられる小穴群もあり、柵列があった可能性がある。

(3)　恒武西宮遺跡の性格

恒武西宮遺跡は、古墳時代から戦国時代まで続く複合遺跡である。今回の調査では、古墳時代を中心とした遺構・遺物を確認できた。一部、古墳時代中期の遺物を含むが、主に古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。恒武西宮遺跡の古墳時代の様相について、周辺の調査結果をふまえて検討する。

古墳時代前期は、恒武西宮遺跡 3 次調査の B 区に方形周溝墓と土器集積がみられるのみで不明な点が多かったが、最近の予備調査で前期の遺物の出土例が増加している（恒武西宮遺跡 19 次調査、20 次調査、23 次調査）。今後の調査で、古墳時代前期の集落域が明らかになる可能性がある。古墳時代中期～後期の遺構は、恒武大溝の南側の恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡の範囲に広がっている。また、山ノ花遺跡で検出された恒武大溝からは、古墳時代中期の祭祀遺物が豊富に出土しており、首長層による祭祀が執り行われていたことが伺える。

では、古墳時代中期～後期の首長層の居住域や、首長層を支える民衆の居住域はどこにあったのか。恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡では、中期～後期の掘立柱建物跡や竪穴建物跡など集落関連の遺構が確認できている。両遺跡内では散在的に祭祀遺物が出土しており、集落内で祭祀が行われていた可能性もあることから、恒武大溝で行われた祭祀との関連が伺える。また、恒武大溝から出土した祭祀遺物には、大型木製品などの持ち運ぶには不便なものも含まれており、遠隔地に居住域があるとは考えにくい。以上のことから、恒武西宮遺跡や恒武西浦遺跡は、地域の首長層とそれを支える人々の居住域であった可能性のある遺跡といえる。

【参考文献】
財団法人浜松市文化協会　1994 『社口遺跡』
浜松市教育委員会　1995 『笠井町下組遺跡』
財団法人浜松市文化協会　1998 『山ノ花遺跡』
財団法人浜松市文化協会　2000 『御殿山遺跡』
財団法人浜松市文化協会　2000 『笠井若林遺跡 4 次』
財団法人静岡県文化財調査研究所　2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
財団法人浜松市文化協会　2002 『恒武西宮遺跡』
財団法人静岡県文化財調査研究所　2002 『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
財団法人浜松市文化協会　2003 『御殿山遺跡 3 次』
財団法人浜松市文化協会　2003 『笠井若林遺跡 7 次』
財団法人静岡県文化財調査研究所　2004 『恒武東覚遺跡』
財団法人静岡県文化財調査研究所　2005 『恒武西宮遺跡Ⅲ　笠井若林遺跡Ⅱ』
財団法人浜松市文化振興財団　2005 『笠井若林遺跡 8 次』
財団法人浜松市文化振興財団　2009 『恒武西宮遺跡 8 次』
財団法人浜松市文化振興財団　2009 『笠井遺跡 2 次』
鈴木　一有　2012 「天竜川右岸域における古墳時代集落の動態」『考古学研究会例会シンポジウム記録 8　前期古墳の変化と画期・古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会

出土遺物観察表

凡例

「残存率」　全体における残存している割合を％（5％きざみ）で示す

「反」　反転して図化したもの

大きさの単位は「cm」　　重量の単位は「g」

「色調」は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

遺物観察表 (1)

Fig.	番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考
39	1	64	Ⅰ-B	1面 SK7	土師器	小型丸底壷	底部	25	-	-	3.9	-	にぶい橙色	良	外面ナデ 内面ユビオサエ
39	2	155	Ⅰ-B	1面 SD36	須恵器	坏蓋	天～肩部	30	反	-	3.7	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ナデ
39	3	57	Ⅰ-B	1面 SD43	土師器	高坏	坏部	15	-	-	2.8	-	橙色	やや良	内外面 ナデ
39	4	52	Ⅰ-B	1面 SD43	土師器	高坏	底～脚部	5	-	-	3.2	-	にぶい橙色	良	外面 ナデ
39	5	41	Ⅰ-B	1面 SD43	土師器	高坏	脚～裾部	10	-	-	6.5	-	橙色	良	外面 ナデ
39	6	35	Ⅰ-B	1面 SD30	土師器	小型丸底壷	頸～底部	90	-	-	7.0	-	にぶい黄橙色	良	外面 ケズリ・ナデ 内面 ユビオサエ後ナデ
39	7	5	Ⅰ-B	1面 SD30	須恵器	坏蓋	天～口縁部	45	反	(13.4)	3.6	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 回転ケズリ 内面天頂部 ナデ
39	8	129	Ⅰ-B	1面 SD31	土師器	低脚高坏	脚～裾部	15	-	-	5.0	-	にぶい橙色	良	摩滅により不明
39	9	47	Ⅰ-B	遺構外	土師器	高坏	坏底～裾部	10	-	-	7.3	-	にぶい橙色	やや良	外面 回転ナデ・ナデ
39	10	32	Ⅰ-A	遺構外	須恵器	瓶	肩部	5未	反	-	2.8	-	灰色	良	肩部 刺突文 孔部 横方向のカキ目
39	11	18	Ⅰ-B	遺構外	須恵器	坏蓋	体～口縁部	5	反	(12.3)	3.85	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 回転ケズリ
39	12	29	Ⅰ-B	遺構外	須恵器	坏身	口縁～体部	5未	反	(10.4)	2.6	-	灰白色	不良	内外面 回転ナデ
39	13	7	Ⅰ-B	遺構外	土師器	内耳鍋	口縁～内耳部	5未	-	-	1.25	1.5	灰白色	良	口縁端部 ヨコナデ
40	14	8	Ⅱ	1面 SP1	土師器	高坏	坏底～裾部	15	-	-	5.6	(9.2)	橙色	良	脚部 ヨコナデ 坏部不明瞭
40	15	59	Ⅱ	1面 SP11	土師器	高坏	坏部 口縁～	5	反	(16.8)	4.2	-	橙色	やや良	外面 タテナデ 内面 ヨコハケ
40	16	37	Ⅱ	1面 SP5	土師器	甕	口縁～頸部	10	反	(22.0)	5.2	-	にぶい橙色	良	輪積成形 内外面 回転ナデ・ ナデ
40	17	31	Ⅱ	1面 SD2	須恵器	瓶	肩部	10	反	-	6.25	-	灰色	良	肩部 5条のクシガキ波状文 内外面 回転ナデ
40	18	132	Ⅱ	2面 SD21	土師器	甕	口縁～頸部	5未	-	-	2.5	-	橙色	良	内外面 ナデ
40	19	61	Ⅲ	1面 SP16	土師器	甕	頸部	5未	反	-	3.2	-	灰白色	良	外面 タテハケ・ヨコナデ 内面 ヨコハケ
40	20	151	Ⅲ	1面 SD5	土師器	平底甕	口縁～底部	85	-	(13.4)	18.5	6.8	にぶい黄橙色	良	輪積成形 外面 タテハケ 内面 タテハケ後ナデ
40	21	74	Ⅲ	1面 SD5	土師器	台付甕	脚台部	10	-	-	7.05	(10.2)	灰黄褐色	良	外面 タテハケ
40	22	98	Ⅲ	1面 SD5	土師器	高坏	脚部	15	-	-	4.85	-	橙色	やや良	外面 ナデもしくはミガキか
40	23	69	Ⅲ	1面 SD5	土師器	高坏	脚部	10	-	-	10.8	-	浅黄橙色	良	外面 タテハケ後、ナデ 内面 ハケ
40	24	72	Ⅲ	1面 SD5	土師器	高坏	脚～裾部	10	-	-	4.4	-	橙色	良	外面 ナデ
40	25	73	Ⅲ	1面 SD5	須恵器	坏蓋	天～口縁部	95	-	12.9	4.4	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
40	26	71	Ⅲ	1面 SD5	須恵器	坏蓋	天～口縁部	15	反	(13.0)	3.6	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
40	27	70	Ⅲ	1面 SD5	須恵器	坏身	体～底部	30	反	(13.1)	4.0	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
40	28	160	Ⅲ	1面 SD7	土師器	甕	体～底部	15	反	-	12.9	(5.2)	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ 外面底部 ナデ 内面 ヨコハケ
40	29	158	Ⅲ	1面 SD7	土師器	台付甕	脚台部	5未	-	-	3.3	-	橙色	良	外面 タテハケ
40	30	28	Ⅲ	遺構外	須恵器	高坏	脚部	5	反	-	4.4	-	灰白色	良	外面脚部 回転ナデ
40	31	15	Ⅲ	遺構外	須恵器	坏身	坏部	30	反	-	2.65	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
40	32	19	Ⅳ	1面 SD11	須恵器	坏身	口縁～体部	10	反	(13.3)	3.2	—	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
41	33	138	Ⅴ	1面 SP36	土師器	甕	口縁部	5未	-	-	1.9	-	にぶい黄橙色	良	内外面 ナデ
41	34	44	Ⅴ	1面 SX8	土師器	甑	把手	5	-	5.75	3.35	2.8	浅黄橙色	良	外面 ナデ
41	35	46	Ⅴ	1面 SX8	土師器	甑	把手	5	-	5.05	4.4	3.3	にぶい橙色	良	外面 ナデ
41	36	23	Ⅴ	1面 SX8	須恵器	坏蓋	天～口縁部	10	-	(10.9)	3.4	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
41	37	27	Ⅴ	1面 SX8	須恵器	坏蓋	天～口縁部	10	反	(13.7)	1.6	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
41	38	156	Ⅴ	1面 SX8	須恵器	坏身	口縁～底部	5未	反	(10.0)	3.0	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
41	39	11	Ⅴ	1面 SX10	須恵器	坏蓋	天～口縁部	5未	反	(10.0)	2.7	-	灰色	良	内外面 ナデ
41	40	21	Ⅴ	1面 SX10	須恵器	坏身	口縁～底部	95	-	9.6	3.9	4.9	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
41	41	38	Ⅴ	1面 SX11	土師器	甕	口縁～頸部	5	反	(19.8)	4.15	-	にぶい黄橙色	良	内外面 回転ナデ・ナデ
41	42	62	Ⅴ	1面 SX11	土師器	甕	口縁～頸部	5未	反	(18.6)	4.8	-	黄橙色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
41	43	13	Ⅴ	1面 SX11	須恵器	坏蓋	体～口縁部	5未	反	-	2.3	(8.2)	灰色	良	内外面 ナデ
41	44	22	Ⅴ	1面 SX11	須恵器	坏蓋	天～口縁部	25	-	-	4.4	-	灰色	良	外面 ナデ
41	45	1	Ⅴ	1面 SX11	須恵器	坏身	口縁～底部	65	-	-	4.35	-	灰色	良	外面 ナデ
41	46	145	Ⅴ	1面 SX11	須恵器	無蓋高坏	坏部	5未	-	-	3.4	-	灰色	良	外面 ナデ
41	47	130	Ⅴ	1面 SX11	土師器	高坏	坏底～裾部	60	反	(11.6)	8.2	-	浅黄橙色	良	内外面 回転ナデ
41	48	43	Ⅴ	1面 SX11	土師器	高坏	底～脚部	5	反	(13.2)	5.6	-	橙色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
41	49	49	Ⅴ	1面 SX11	土師器	高坏	坏底～脚部	5	反	(10.7)	6.4	-	橙色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 回転ケズリ

遺物観察表 (2)

Fig.	番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考
41	50	50	V	1 面 SX11	土師器	高坏	坏底～脚部	5	反	−	4.8	−	にぶい橙色	良	内外面 回転ナデ
41	51	25	V	1 面 SX11	須恵器	高坏	坏底～脚部	10	−	−	3.45	−	灰白色	良	内面坏部 回転ナデ 外面坏～脚部 回転ナデ 外面天頂部に「−」のヘラ記号
41	52	2	V	1 面 SX14	須恵器	坏蓋	天～口縁部	60	−	(11.9)	4.8	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 内外面天頂部 回転ケズリ
42	53	113	V	1 面 SK15	土師器	高坏	脚～裾部	5 未	反	−	2.1	(14.4)	にぶい黄橙色	良	内外面 回転ナデ
42	54	36	V	1 面 SK18	土師器	高坏	ほぼ完形	95	−	14.5	10.1	9.2	橙色	良	外面 回転ナデ・ナデ 内面 ナデ
42	55	54	V	1 面 SK18	土師器	高坏	脚裾部	10	反	−	4.5	−	橙色	良	外面 ナデ
42	56	148	V	1 面 SK20	土師器	甕	頸～肩部	5	反	−	7.4	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ 外面底部に「入」のヘラ記号
42	57	24	V	1 面 SK20	須恵器	坏身	口縁～底部	30	−	(9.4)	4.4	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
42	58	33	V	1 面 SK22	須恵器	高坏	脚部	10	反	−	7.2	−	灰白色	良	長方形のスカシ上下 2 段 上下のスカシ間に 2 条の沈線
42	59	9	V	1 面 SK24	土師器	鉢	底部	5 未	−	−	3.1	7.5	にぶい黄橙色	良	外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ
42	60	10	V	1 面 SK31	須恵器	坏身	口縁～底部	30	反	(10.0)	3.9	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
42	61	142	V	1 面 SK32	土師器	甕	体～底部	30	−	−	16.5	8.4	にぶい黄橙色	良	外面底部に木葉痕 外面 タテハケ 内面 横からナナメハケ
42	62	140	V	1 面 SP58	土師器	甕	口縁～頸部	5 未	反	(21.6)	2.9	−	にぶい橙色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ
42	63	162	V	1 面 SP83	土師器	壺	頸～体部	10	反	−	6.1	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケか 内面 ナナメハケ後タテナデ
42	64	157	V	1 面 SP83	土師器	甕	口縁～底部	70	−	17.0	26.7	−	橙色～黒褐色	良	外面 ナナメハケ 内面 ヨコハケ
43	65	147	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～体部	15	反	(27.4)	14.6	−	にぶい橙色	良	外面 ナナメハケ 内面 ヨコハケ 口縁部 ヨコナデ
43	66	75	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～肩部	5	反	(11.6)	7.4	−	にぶい黄橙色	良	外面 ヨコハケ・タテハケ 内面 横方向の板ナデ・ ヨコハケ
43	67	80	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～体部	15	反	(14.6)	10.5	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ後ナデ
43	68	66	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁部	5	反	(15.4)	3.2	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	69	94	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～体部	5	反	(13.7)	8.4	−	にぶい黄褐色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	70	161	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～底部	95	−	13.7	22.85	−	橙色	やや良	外面 タテハケ 外面底部 ナデ 内面 ヨコからナナメハケ
43	71	137	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～頸部	10	反	(23.8)	4.55	−	灰黄褐色	良	内外面 ナデ
43	72	85	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～頸部	5	反	(17.6)	4.05	−	浅黄橙色	良	内外面 タテハケ後ナデ
43	73	102	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～体部	10	反	(17.3)	7.3	−	灰白色	やや不良	内外面 ナデ
43	74	83	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～頸部	5	反	(15.8)	4.1	−	浅黄橙色	良	内外面 回転ナデ 内面頸部 ヨコハケ
43	75	92	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～頸部	5 未	反	(15.4)	4.75	−	にぶい黄褐色	普通	外面 ナデ 内面 ヨコハケ
43	76	101	V	1 面 SD47	土師器	甕	口縁～体部	15	反	(16.7)	11.6	−	橙色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	77	78	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	脚台部	10	−	−	5.6	−	暗灰色	良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	78	86	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	脚台部	5	反	−	2.8	−	褐灰色	良	外面 タテハケ
43	79	96	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	甕底～裾部	5	−	−	6.05	8.6	浅黄橙色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ナデ
43	80	123	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	脚台部	15	−	−	9.5	10.8	灰黄色	良	外面 タテハケ 内面坏部 ヨコハケ
43	81	109	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	脚台部	5 未	反	−	5.4	(13.8)	灰黄色	やや良	外面 タテハケ 内面 板ナデ
43	82	110	V	1 面 SD47	土師器	台付甕	脚台裾部	5 未	反	−	3.4	(9.0)	浅黄橙色	やや良	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
44	83	89	V	1 面 SD47	土師器	二重口縁壺	口縁部	5 未	反	(17.6)	4.9	−	浅黄橙色	良	外面 横ナデ後ハケ
44	84	114	V	1 面 SD47	土師器	甑	口縁～底部	40	反	(21.0)	25.8	(9.0)	にぶい黄橙色	良	底無し 外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
44	85	131	V	1 面 SD47	土師器	甑	口縁～体部	15	反	(26.2)	23.35	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ後ヨコナデ 内面 ヨコハケ後ヨコナデ
44	86	139	V	1 面 SD47	土師器	甑	体～把手	5	−	(22.6)	11.2	−	浅黄橙色	良	外面 摩滅のため不明 内面 ヨコハケ
44	87	91	V	1 面 SD47	土師器	甑	把手～体部	5	−	5.0	6.1	3.1	にぶい黄橙色	普通	外面 タテハケ後、把手を張付けハケ後ナデ 内面 ナデ
44	88	68	V	1 面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	5.3	7.3	3.6	浅黄橙色	良	外面 タテハケ後、把手を張付け後ナデ 内面 ナデ
44	89	118	V	1 面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	3.9	7.4	3.4	灰白色	良	外面 ハケ
44	90	116	V	1 面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	4.5	7.35	3.8	にぶい黄橙色	良	外面 ナデ

遺物観察表 (3)

Fig.	番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考
44	91	77	V	1面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	4.2	5.25	3.4	にぶい黄橙色	良	外面 ナデ
44	92	87	V	1面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	3.85	4.55	3.45	橙色	良	外面 ナデ
44	93	111	V	1面 SD47	土師器	甑	把手	5	−	7.1	4.8	3.4	にぶい橙色	良	外面 ナデ
44	94	100	V	1面 SD47	土師器	鉢	口縁～底部	20	反	(14.2)	7.15	−	にぶい黄橙色	良	内外面 ヨコハケ・タテハケ
44	95	97	V	1面 SD47	土師器	鉢	口縁～底部	90	−	(10.8)	4.7	−	にぶい黄橙色	やや良	内外面 ナデ
44	96	99	V	1面 SD47	土師器	鉢	口縁～底部	20	反	(13.2)	5.05	−	にぶい橙色	やや良	内外面 ナデ
44	97	125	V	1面 SD47	土師器	鉢	口縁～底部	80	−	(8.4)	4.4	4.5	にぶい黄橙色	良	外面 ユビオサエ後タテハケ 内面 ヨコナデ
44	98	107	V	1面 SD47	土師器	高坏	脚裾部	15	−	−	4.75	(9.0)	橙色	やや不良	坏部の接合時に粘土充填 外面脚部に円形のくぼみあり 外面 ナデ
44	99	88	V	1面 SD47	土師器	高坏	坏底～脚部	25	−	−	6.55	−	橙色	良	外面 ナデ
44	100	104	V	1面 SD47	土師器	高坏	脚～裾部	10	−	−	4.85	−	浅黄橙色	良	外面 タテナデ
44	101	108	V	1面 SD47	土師器	高坏	坏底～脚部	5	反	−	5.05	−	橙色	やや良	外面 タテハケ
45	102	84	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天～体部	70	−	−	3.9	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
45	103	53	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天～口縁部	15	反	(14.3)	3.0	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	104	55	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	体～口縁部	5	反	(14.6)	2.8	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	105	106	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天～口縁部	25	反	(11.8)	3.6	−	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
45	106	126	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天～口縁部	60	−	10.6	4.4	−	灰色	良	内外面 回転ナデ
45	107	105	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天～口縁部	20	−	(10.8)	4.3	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
45	108	154	V	1面 SD47	須恵器	坏蓋	天部	30	−	−	2.3	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
45	109	51	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	30	反	(11.6)	4.1	−	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	110	90	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	30	反	(11.8)	3.95	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	111	67	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	15	反	(9.8)	3.4	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	112	115	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	25	反	(13.0)	4.4	−	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	113	112	V	1面 SD47	須恵器	坏身	体部	5未	反	−	3.2	−	灰色	良	内外面 回転ナデ
45	114	103	V	1面 SD47	須恵器	坏身	体～底部	10	反	−	3.55	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	115	82	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	95	−	11.0	3.45	3.9	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	116	81	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	50	−	(9.9)	4.01	5.5	灰白色	良	底部に「X」のヘラ記号 内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	117	60	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	80	−	(10.4)	4.65	−	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	118	58	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～底部	95	−	9.2	4.2	5.0	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
45	119	95	V	1面 SD47	須恵器	坏身	口縁～体部	10	反	(10.0)	2.85	−	灰色	良	内外面 回転ナデ
45	120	122	V	1面 SD47	須恵器	高坏	脚部	10	反	−	5.9	−	灰白色	良	長方形のスカシ上下2段2方向 外面 回転ナデ
45	121	119	V	1面 SD47	須恵器	無頸壷	口縁～底部	25	反	(7.7)	5.85	−	灰色	良	内外面 回転ナデ
45	122	121	V	1面 SD47	須恵器	無頸壷	口縁～底部	45	反	(8.0)	5.2	−	灰白色	良	底部がくぼむ 内外面 回転ナデ
45	123	76	V	1面 SD47	須恵器	短頸壷	頸～底部	70	−	−	10.5	4.1	灰白色	不良	内外面 回転ナデ 底部に穿孔
45	124	117	V	1面 SD47	須恵器	甕	頸～底部	15	反	−	6.9	−	灰色	良	孔径 1.4 肩部にカキ目 外面 回転ナデ 内面 ユビオサエ
45	125	93	V	1面 SD47	須恵器	甕	頸～体部	10	反	−	4.95	−	灰色	良	外面肩部にカキ目 外面 回転ナデ
45	126	124	V	1面 SD47	須恵器	甕	頸部	5	反	−	5.2	−	灰色	良	内外面 回転ナデ
45	127	127	V	1面 SD47	石製模造品	勾玉	完形	100	−	3.1	0.4	1.2	灰色	−	重量 4 表裏面 擦痕あり
45	128	79	V	1面 SD47	金属製品	耳環	完形	100	−	2.42	0.5	2.65	明緑灰色	−	重量 7 金銅製品か
46	129	63	V	1面 SD45	土師器	台付甕	口縁～頸部	5未	反	(30.0)	2.0	−	にぶい黄橙色	良	外面 タタキ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ
46	130	135	V	1面 SD45	土師器	甕	口縁部	5未	反	(20.3)	2.3	−	にぶい黄橙色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ
46	131	42	V	1面 SD45	土師器	甑	把手	5	−	5.5	4.0	3.1	灰白色	良	外面 ナデ
46	132	146	V	1面 SD52	須恵器	壷	底部	5未	反	−	2.1	(9.5)	灰白色	良	貼付け高台 内外面 回転ナデ

遺物観察表 (4)

Fig.	番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考
46	133	16	V	1面 SD56	須恵器	坏身	口縁～底部	5未	反	(13.0)	3.3	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	134	150	V	1面 SD56	須恵器	坏身	口縁～体部	5	反	-	2.4	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	135	128	V	遺構外	土師器	壺	口縁～体部	10	反	(13.1)	9.5	-	灰白色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ナデ
46	136	120	V	遺構外	土師器	壺	口縁～頸部	10	反	(9.4)	6.0	-	橙色	良	内外面 ハケ後ナデか
46	137	133	V	遺構外	土師器	甕	口縁～頸部	5未	-	-	3.8	7.4	灰褐色	良	底部に「X」のヘラ記号 内外面ナデ
46	138	134	V	遺構外	土師器	甕	口縁～頸部	5未	反	-	3.35	9.3	にぶい褐色	良	外面底部に木葉痕 内外面 摩滅のため不明
46	139	65	V	遺構外	土師器	甕	底部	10	反	(17.4)	1.95	-	にぶい黄色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ
46	140	159	V	遺構外	土師器	甕	底部	5	反	(19.6)	2.1	-	橙色	良	外面 ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ
46	141	56	V	遺構外	土師器	高坏	脚～裾部	5	反	-	5.2	(8.6)	にぶい橙色	やや良	外面 ナデ
46	142	45	V	遺構外	土師器	高坏	脚部	10	-	-	6.75	-	にぶい橙色	良	外面 斜方向のナデ
46	143	143	V	遺構外	須恵器	坏蓋	口縁～体部	5未	反	(11.6)	2.95	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
46	144	40	V	遺構外	須恵器	坏蓋	天～口縁部	30	反	(12.6)	4.05	-	橙色	不良	内外面 回転ナデ 一部板状工具によるナデ 外面天頂部 回転ケズリ
46	145	26	V	遺構外	須恵器	坏蓋	体～口縁部	5未	反	(13.0)	2.1	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
46	146	149	V	遺構外	須恵器	坏蓋	天～口縁部	5未	反	(12.8)	1.3	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
46	147	12	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～底部	20	反	(12.4)	3.6	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	148	17	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～底部	30	-	(10.6)	4.3	-	灰色	良	外面底部に「-」のヘラ記号 内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	149	20	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～底部	80	-	10.2	4.1	-	灰白色	良	外面底部に「X」のヘラ記号 内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	150	6	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～底部	30	反	(9.4)	3.6	4.0	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 回転ケズリ 内面底部 ナデ
46	151	14	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～底部	15	反	(13.8)	3.4	(11.1)	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ 箱坏（坏A）
46	152	153	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁～体部	5未	反	(13.6)	3.05	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
46	153	30	V	遺構外	須恵器	皿	口縁部	5未	反	(14.8)	2.0	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
46	154	152	V	遺構外	須恵器	坏身	底～高台部	5	反	-	1.05	(8.6)	灰白色	良	貼付け高台 内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	155	144	V	遺構外	須恵器	壺	底部	5未	反	-	1.7	(10.0)	灰色	良	外面 回転ナデ 内面 摩滅のため不明
46	156	34	V	遺構外	土製品	土錘	ほぼ完形	90	-	3.7	1.0	1.05	灰白色	良	孔径 0.3
46	157	39	V区	遺構外	土製品	土錘	ほぼ完形	90	-	5.0	1.8	1.75	にぶい黄橙色	良	孔径 0.6 タテナデ
46	158	48	V区	遺構外	石製模造品	双孔円板	-	60	-	2.65	0.7	3.3	灰色	-	重量 7 孔径 0.2 表裏とも多くが剥離 擦痕あり 側面の一部残存

図　　版

PLATE

1　調査区全景　直上から

2　Ｖ区　掘削状況　南西から

1　Ⅰ-A 区　完掘状況　西から

2　Ⅰ-B 区　北側完掘状況　南西から

3　Ⅰ-B 区　完掘状況　北西から

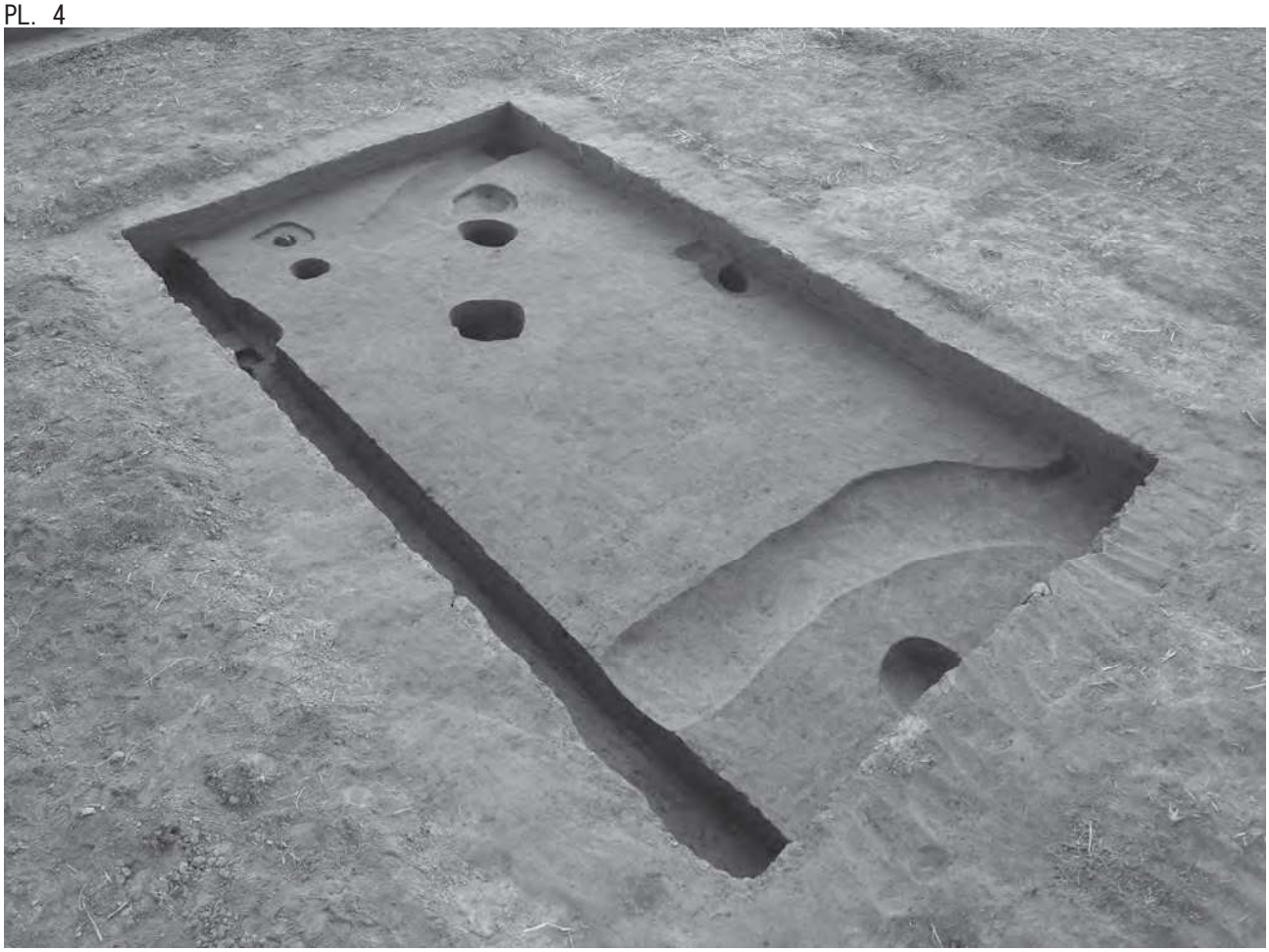
4　Ⅰ-C 区　完掘状況　西から

1　Ⅰ区　SD30 掘削状況　北東から

2　Ⅰ区　SD30 断面状況　北東から

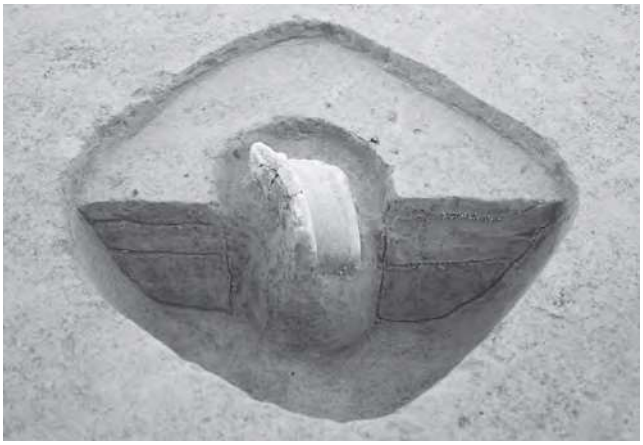
3　Ⅰ区　SD30 遺物出土状況　東から

4　Ⅰ区　SD43 遺物出土状況　北西から

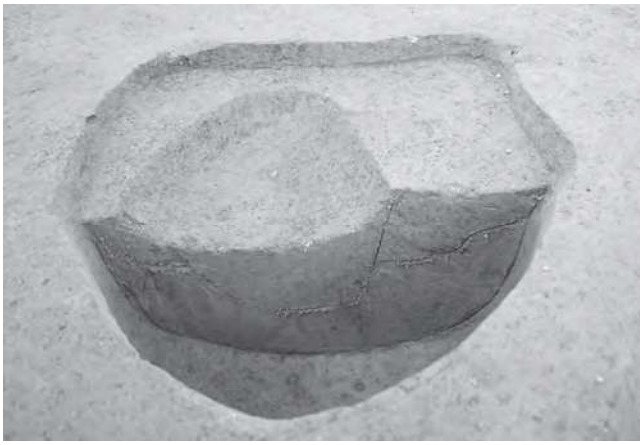


1　Ⅱ区　1面目遺構完掘状況　北西から

2　Ⅱ区　基本層序　西壁　東から



3　Ⅱ区　SP05 断面状況　西から

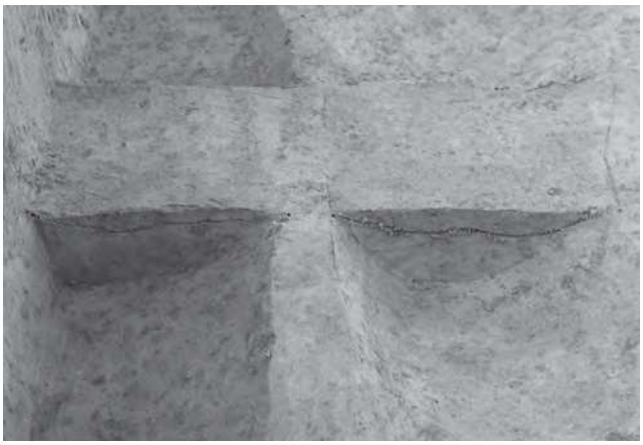


4　Ⅱ区　SP13 断面状況　南東から

1　Ⅱ区　SP02 断面状況　南東から

2　Ⅱ区　SP03 断面状況　南西から

3　Ⅱ区　SP04 断面状況　南から



4　Ⅱ区　SD22・23 断面状況　東から

5　Ⅱ区　2面目遺構完掘状況　南東から

1　Ⅲ区　1面目全景　北東から

2　Ⅲ区　1面目全景　北西から

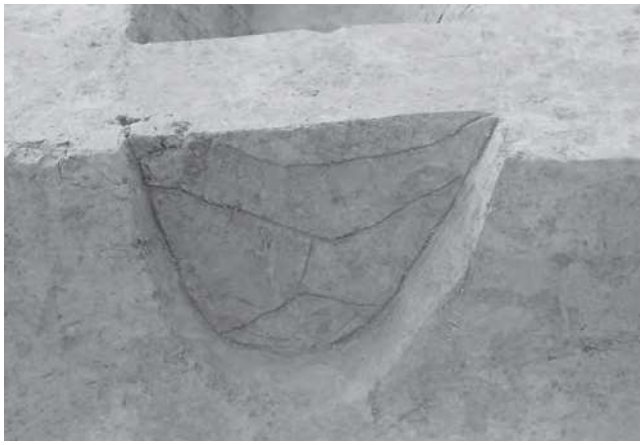
1　Ⅲ区　SD05 掘削状況　南東から

2　Ⅲ区　SD05 遺物（21・26）出土状況　南西から

3　Ⅲ区　SD05 遺物（25・20）出土状況　北東から

4　Ⅲ区　SD05 断面状況　南東から

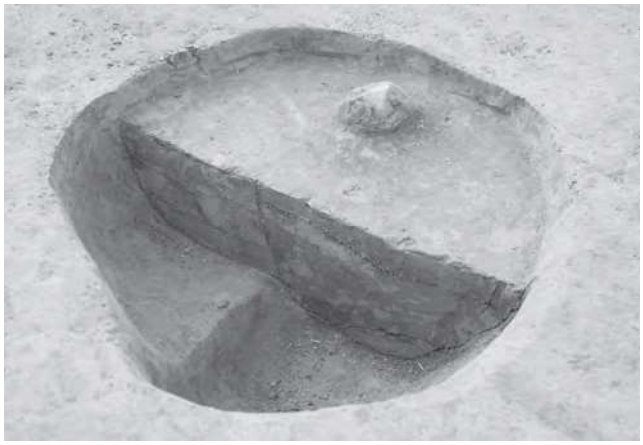
5　Ⅲ区　SD05 遺物（23）出土状況　南西から



6　Ⅲ区　SD08 断面状況　北東から

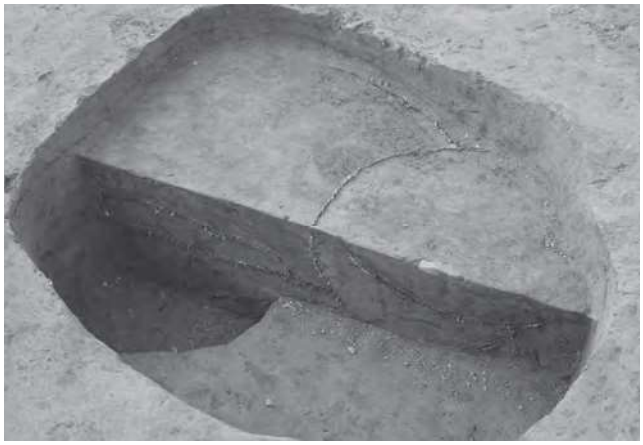
7　Ⅲ区　SD07 遺物（28）出土状況　南東から

1　Ⅲ区　SH02 完掘状況　東から



2　Ⅲ区　SP06 断面状況　東から

3　Ⅲ区　SP07 断面状況　東から



4　Ⅲ区　SP08 断面状況　東から

5　Ⅲ区　SP10 断面状況　東から

1　Ⅳ区　全景　北東から

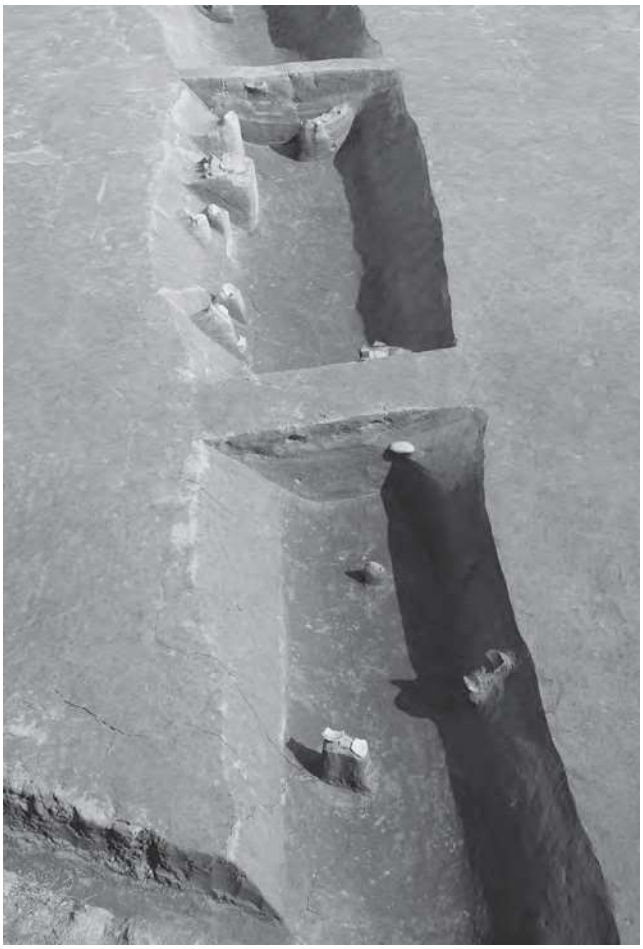
2　Ⅳ区　全景　西から

3　Ⅳ区　SD11 遺物出土状況　北西から

4　Ⅳ区　SD11 断面状況　北東から

1　Ⅴ区　全景　南東から

2　Ⅴ区　基本層序　西壁　東から



3　Ⅴ区　SD47 掘削状況　南西から

1　Ⅴ区　SD47 断面および耳環出土状況　南西から

2　Ⅴ区　SD47 耳環（128）出土状況 南から

3　Ⅴ区　SD47 石製模造品勾玉（127）出土状況　南から

4　Ⅴ区　SD47 遺物出土状況　南から

5　Ⅴ区　SD47 遺物出土状況　西から

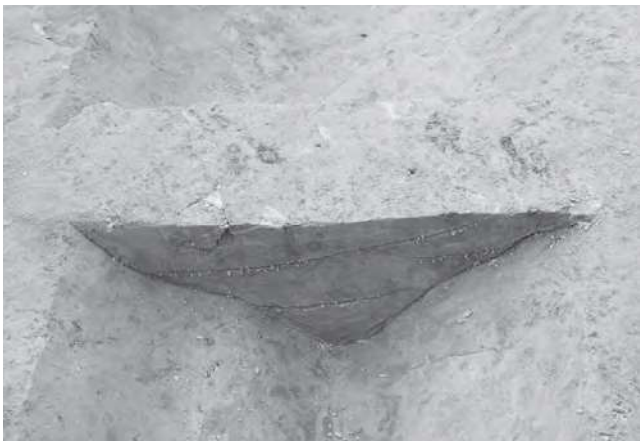
6　Ⅴ区　SD47 須恵器瓹（124）出土状況　南から

7　Ⅴ区　SD47 遺物出土状況　南西から

1　Ⅴ区　SD47(B) 断面状況　西から

2　Ⅴ区　SD47(A) 断面状況　西から

3　Ⅴ区　SD45 土師器片出土状況　北東から



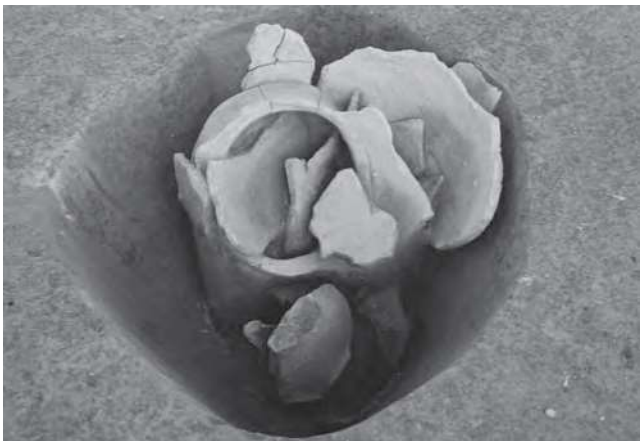
4　Ⅴ区　SD45 断面状況　北東から

5　Ⅴ区　SD45 掘削状況　北東から

1　Ⅴ区　SK36 土師器甕（61）出土状況　西から

2　Ⅴ区　SP83 断面状況　西から

3　Ⅴ区　SP83 土師器甕出土状況　西から



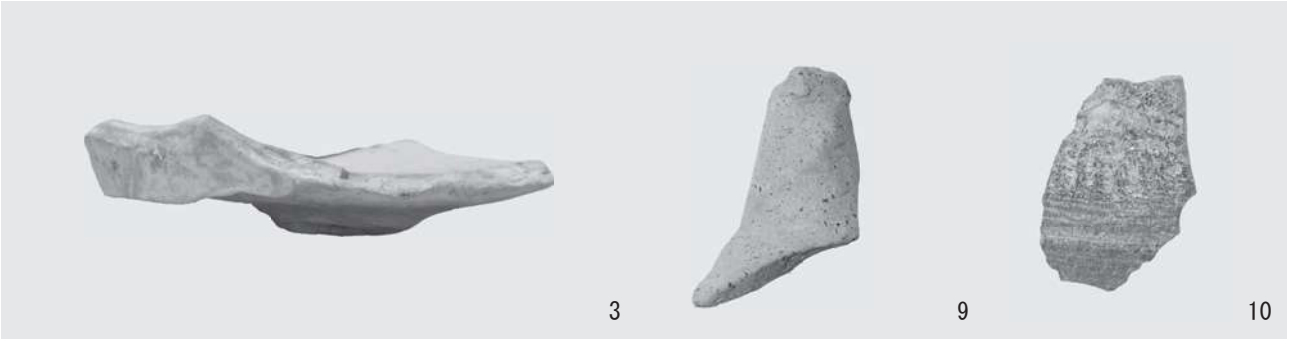
4　Ⅴ区　SP83 土師器甕出土状況　南から

5　Ⅴ区　SK18 土師器高坏（54）出土状況　西から

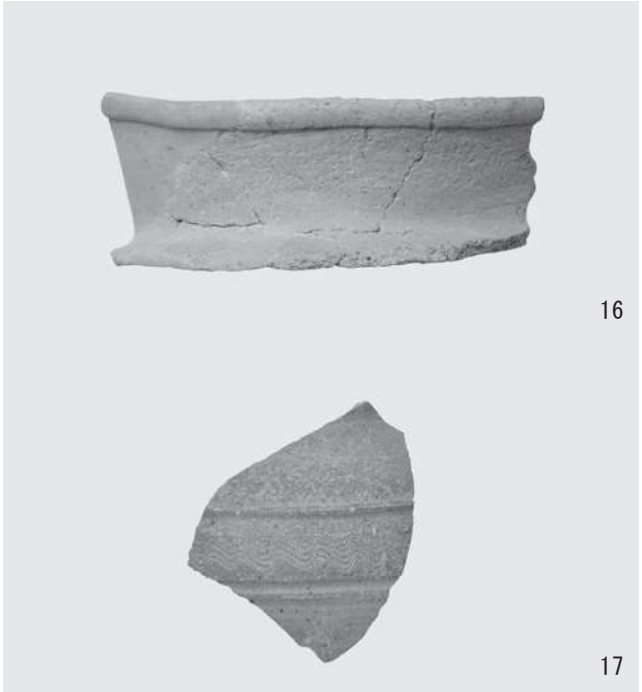
6　Ⅴ区　SD74 断面状況　西から

7　Ⅴ区　SD74 完掘状況　南から

Ⅰ区　出土遺物　1



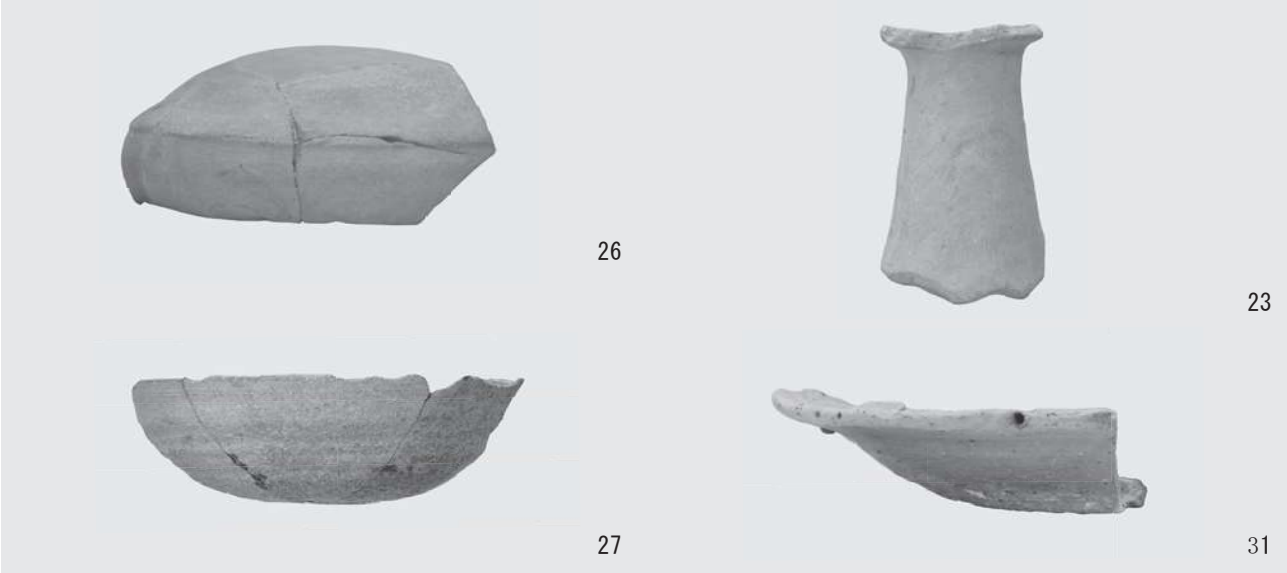
Ⅰ区　出土遺物　2



Ⅱ区　出土遺物　1

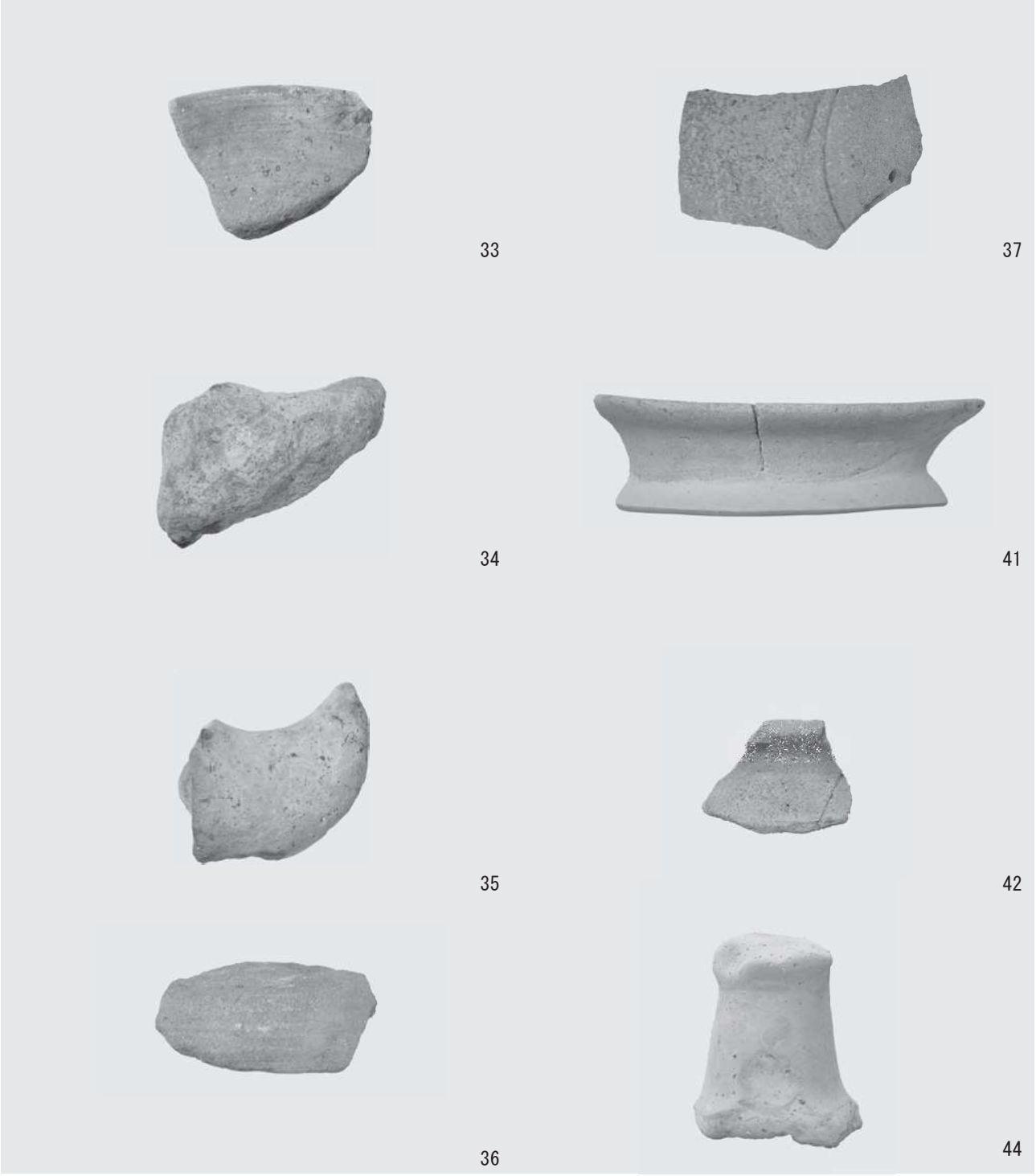
Ⅲ区　出土遺物　1

Ⅲ区　出土遺物　2



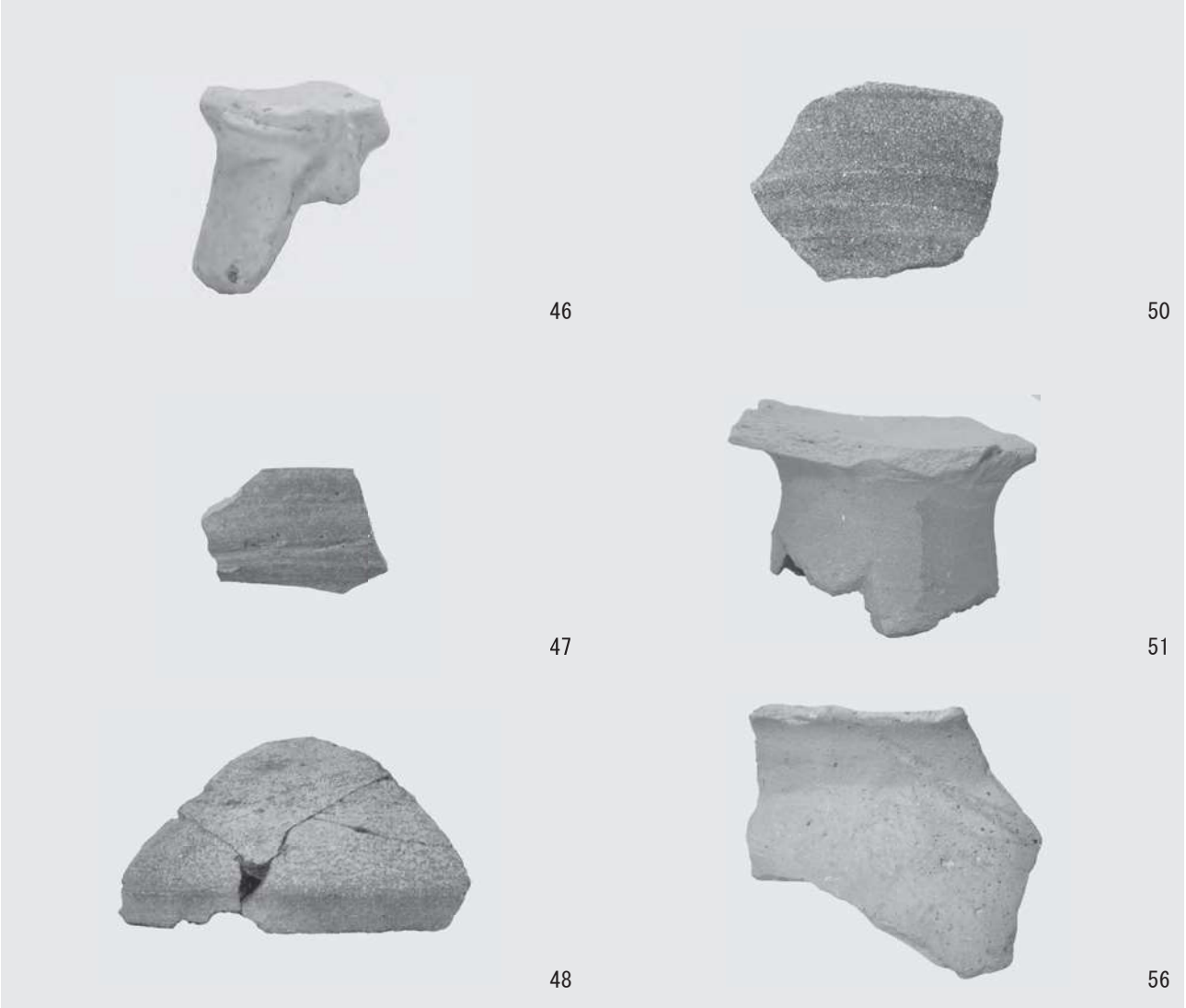
Ⅲ区　出土遺物　3

Ⅴ区　小穴・土坑出土遺物　1



Ⅴ区　小穴・土坑出土遺物　2

Ⅴ区　小穴・土坑出土遺物　3



Ⅴ区　土坑出土遺物　1


61

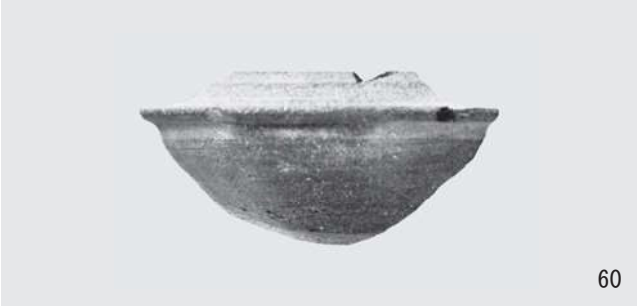

64

Ⅴ区　小穴・土坑出土遺物　2


57


59


58


60

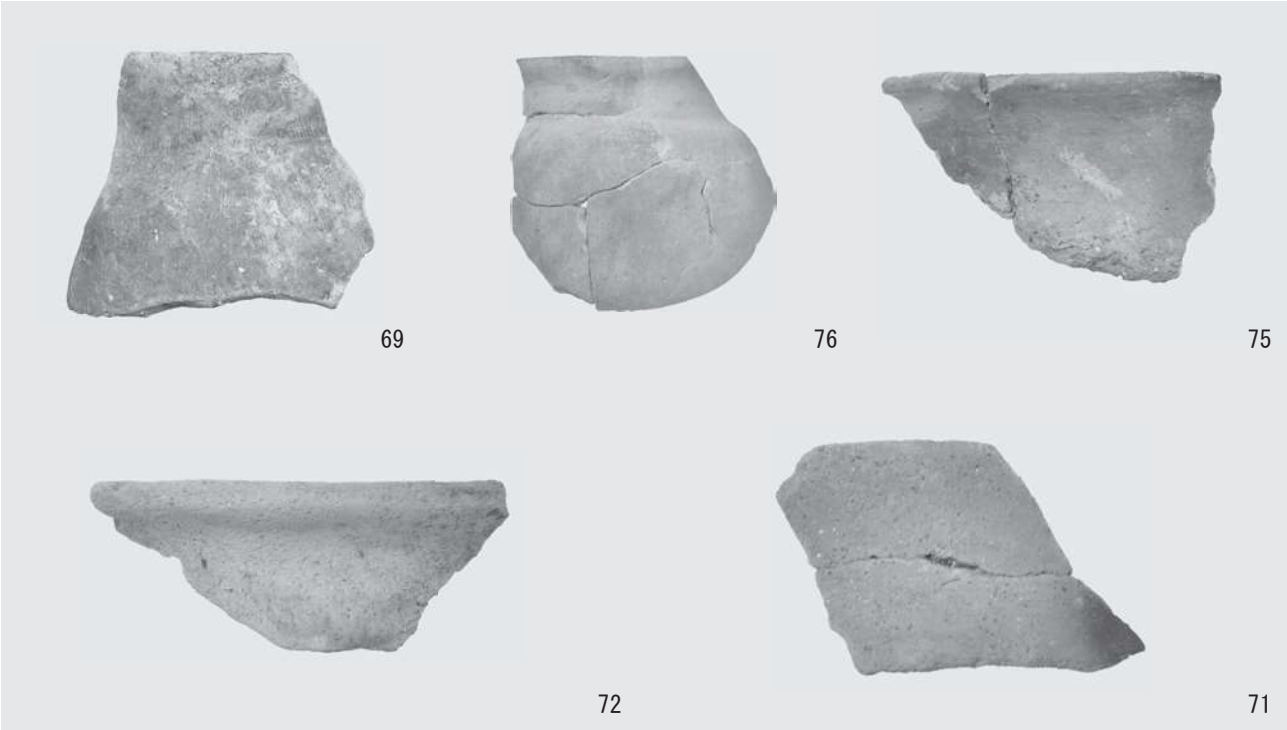
Ⅴ区　小穴・土坑出土遺物　3


65


67

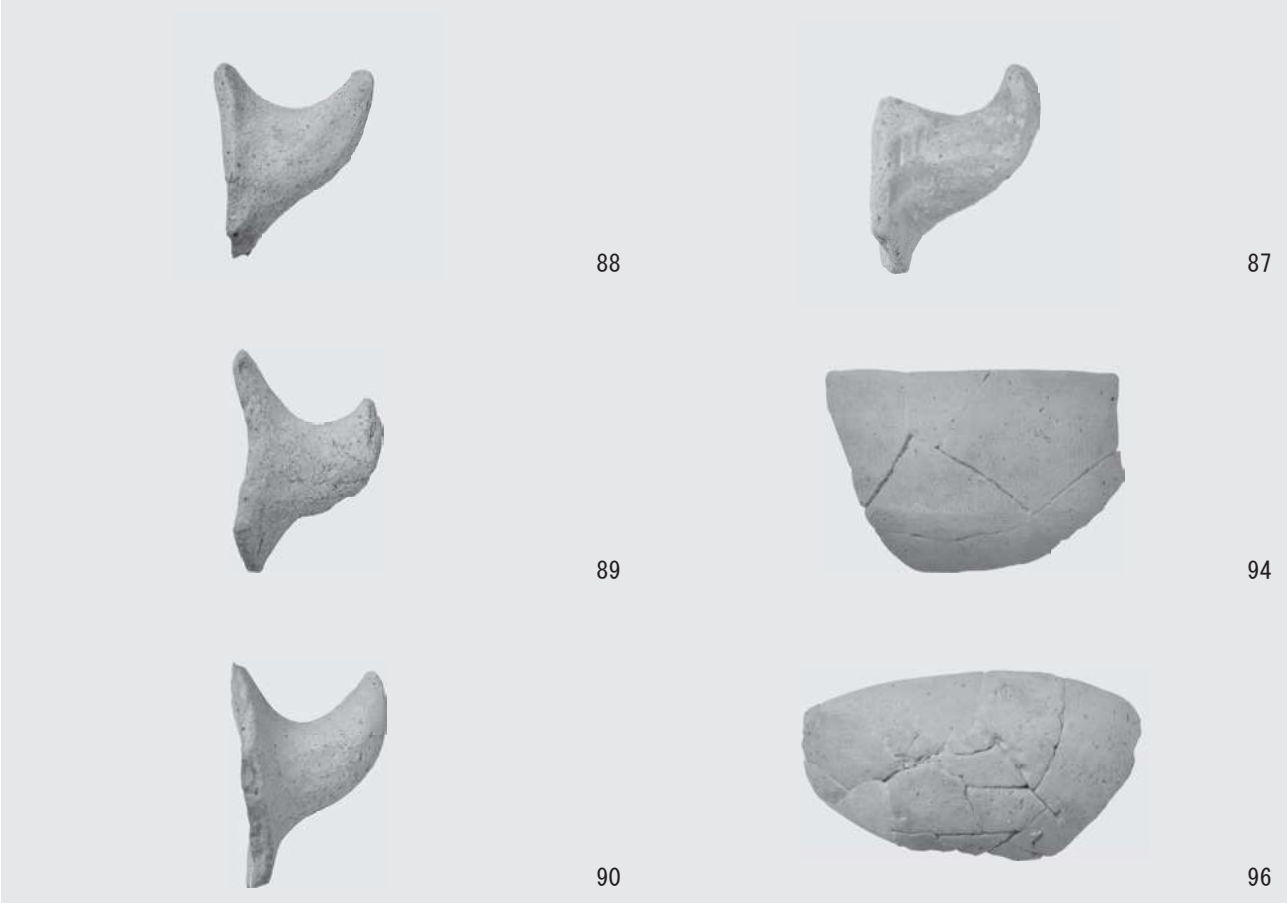
Ⅴ区　SD47 出土遺物　1

Ⅴ区　SD47 出土遺物　2



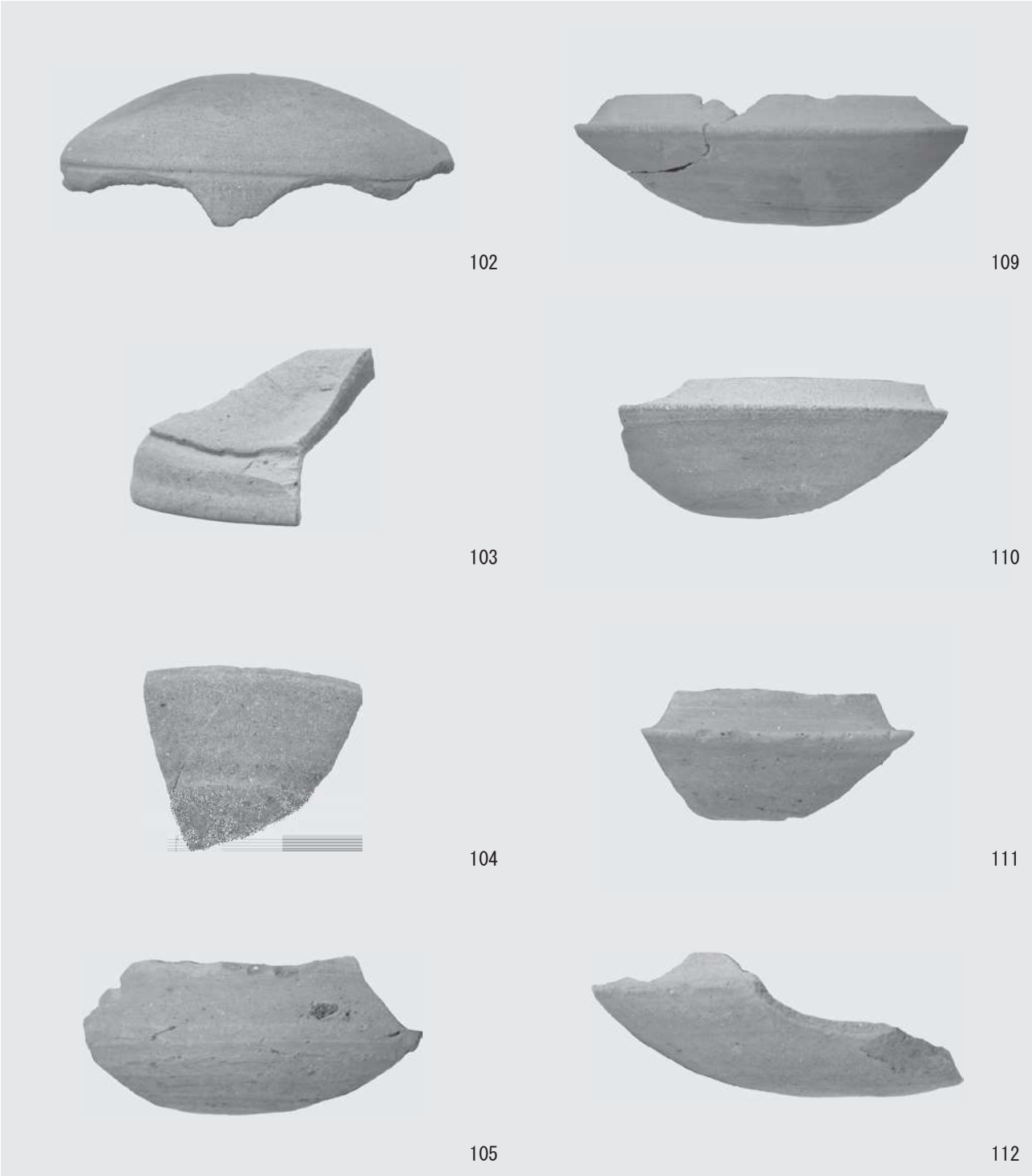
Ⅴ区　SD47 出土遺物　3

Ⅴ区　SD47 出土遺物　4



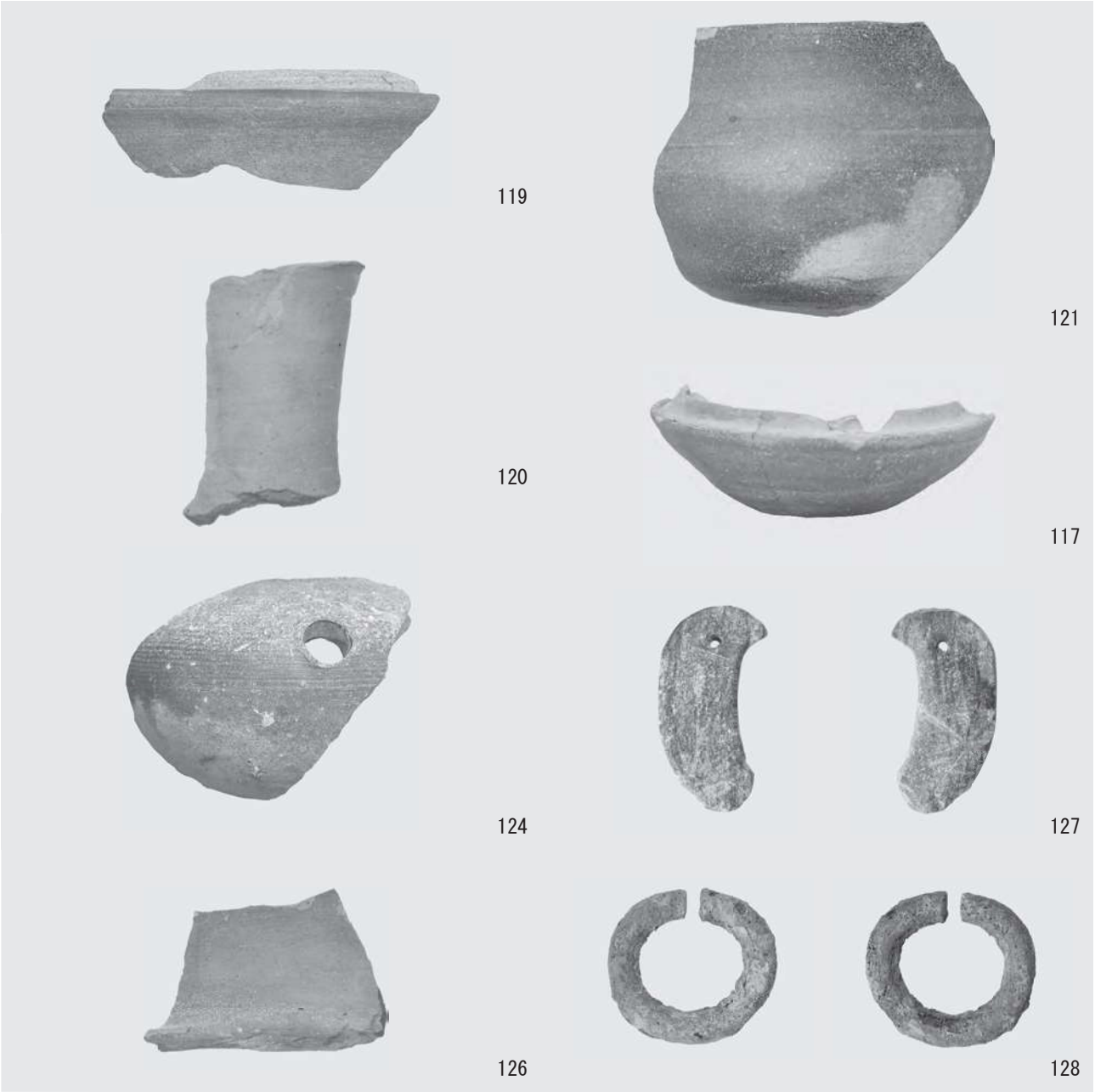
Ⅴ区　SD47 出土遺物　5

Ⅴ区　SD47 出土遺物　6



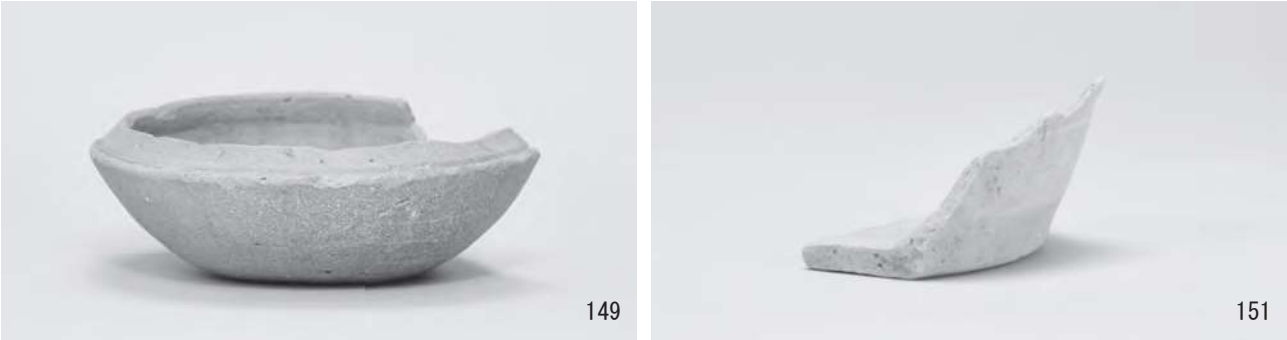
Ⅴ区　SD47 出土遺物　7

Ⅴ区　SD47 出土遺物　8

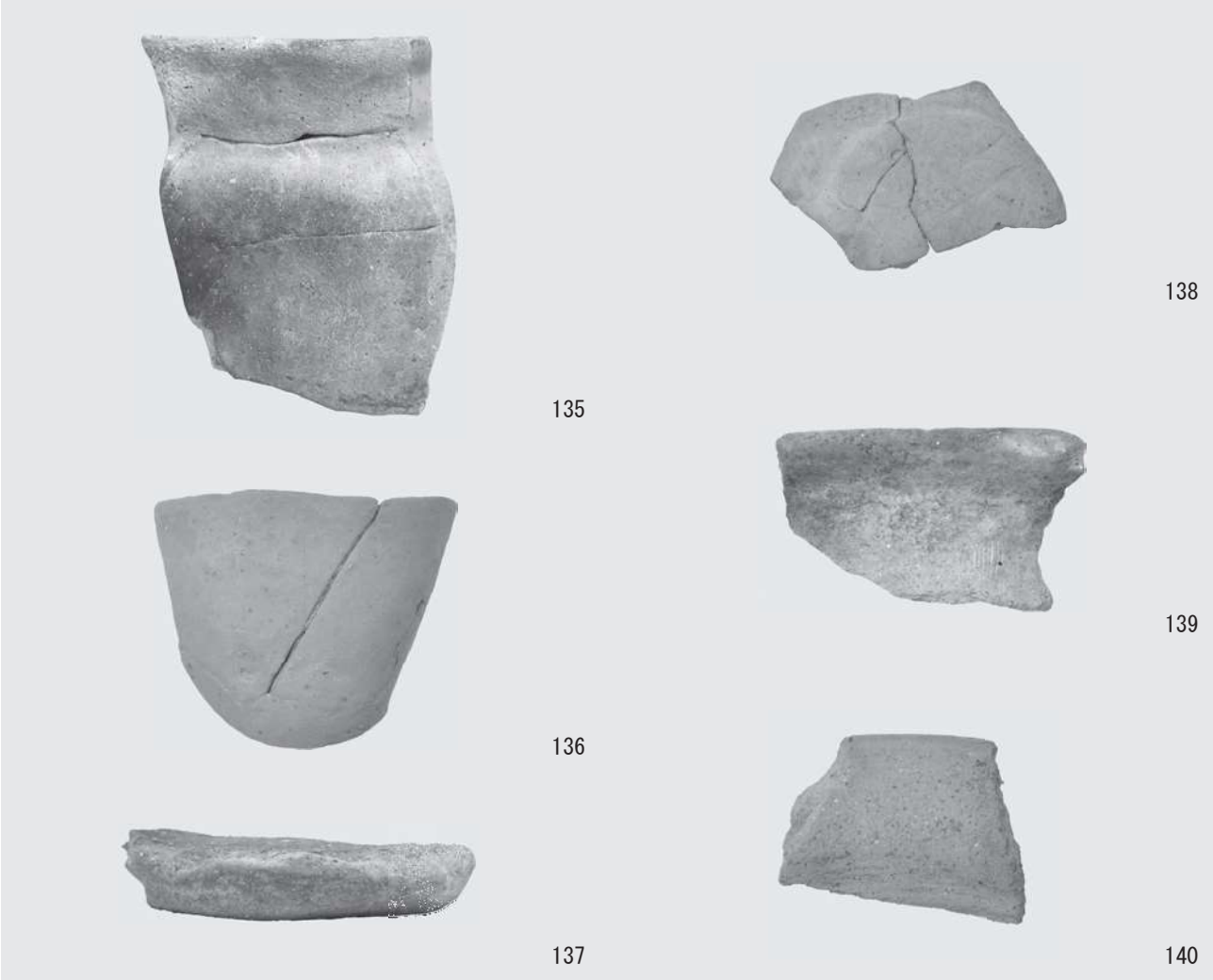


Ⅴ区　SD47 出土遺物　9

Ⅴ区　SD52・SD56 出土遺物



Ⅴ区　遺構外出土遺物　1



Ⅴ区　遺構外出土遺物　2


142


153


144


154


147


155


148


156


150


157


152


158

Ⅴ区　遺構外出土遺物　3

報　告　書　抄　録

書名（ふりがな）	恒武西宮遺跡 6（つねたけにしみやいせき）
編著者名	安孫子雅史（編）、山中美歩、萩原美香
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-0946　浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466　FAX(053)457-2563
発行年月日	2018 年 10 月 30 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
恒武西宮遺跡（つねたけにしみやいせき）	静岡県 浜松市 東区 恒武町	22132	2-02-12	34 度 45 分 31 秒	137 度 47 分 32 秒	2017 年 12 月 11 日 ～ 2018 年 3 月 16 日	1704 ㎡	物流センター 新築工事 に伴う 埋蔵文化財 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恒武西宮遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物 溝 土坑 小穴	土師器 須恵器 土製品 石製模造品 （勾玉・双孔円板） 金銅製品（耳環）	古墳時代後期を中心とする遺構面では、並行する溝を３条を確認。その溝間には掘立柱建物を確認。 溝を中心に土師器・須恵器、石製模造品・金銅製品が出土。 中でも、下層遺構として遺物を伴わない南北方向の溝を確認したことが特筆される。

要約

恒武西宮遺跡は、天竜川の堆積作用によって形成された沖積平野の中でも東を南流する豊田川、西を南流する安間川に挟まれた微高地に位置する遺跡である。株式会社スズケイの物流センター新築に伴って行われた試掘確認調査（17 次）において、遺物とともに遺構の存在が確認されたことから記録保存を目的とした本発掘調査（21 次）を実施するに至った。

今回の調査により、古墳時代後期の遺構と豊富な遺物が出土した。この時期の遺構として並行する３条の東西溝を確認した。ここから、石製模造品・耳環・土師器・須恵器が出土した。これらの溝は過去の調査においても確認している。また、これらの溝に先行する１条の南北溝を確認した。この溝から遺物の出土はなかったが、並行する土坑から有稜高坏が出土することから古墳時代前期にまで遡る可能性がある。

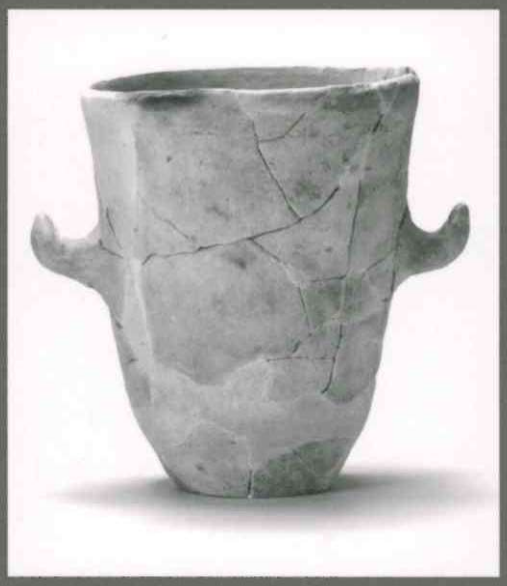
恒武西宮遺跡 6

2018 年 10 月 30 日
編集・発行機関　浜松市教育委員会
（浜松市市民部文化財課が補助執行）
印　　刷　三星商事印刷株式会社

Tsunetake-nishimiya Site

The 21st Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
In Western Shizuoka, Japan



October,2018

Hamamatsu Municipal Board of Education,